

令和5年度 こども家庭庁委託事業

児童館における乳幼児親子を対象とした
遊びのプログラムに関する調査研究
報告書

受託団体
一般財団法人 児童健全育成推進財団

児童館における乳幼児親子を対象とした遊びのプログラムに関する調査研究

目次

第1章 事業概要

I 事業目的	3
II 調査研究委員会	3
III 倫理面への配慮	5
IV 調査研究の内容	5
V 児童館の選定経過	6
VI 実施するプログラム（児童劇）の選定経過	10
VII 児童館・児童劇団との調整作業	12

第2章 調査研究の結果 ープログラムの実施結果ー

I 川口市立戸塚児童センターあすぱる	27
II こども未来館あいぽーと	42
III 東郷町立兵庫児童館	57
IV 光の園児童館	75
V 劇団インタビュー	91
VI 委員（学識経験者）による「演目レビュー」及び「観察報告」	97

VII 特別寄稿（明治学院大学 教授 小林由利子 氏）

「児童館における乳幼児のための演劇鑑賞と遊びプログラムの意義」・・・110

第3章 考察及び提言

I 保護者用アンケート、児童館用アンケートの結果の概要・・・125

II 児童福祉文化財（主に児童劇）を活用した乳幼児親子を対象とした
遊びのプログラム実施結果の考察・・・134

謝 辞

第1章 事業概要

I 事業目的

児童館ガイドラインにおいて児童館に期待される機能の一つである「子育て家庭への支援」（児童館ガイドライン第3章 児童館の機能役割の4）における乳幼児支援に関して、全国の児童館において参照されたい取組の企画を通じて、今後の児童館活動の方向性の検討に資することを目的とする。その手法としては、①有識者等による調査研究委員会での検討等、②乳幼児親子を対象とした遊びのプログラムの企画・実施、③その成果を報告書としてまとめることで、全国の児童館活動の質の向上を図る。

II 調査研究委員会

1. 設置目的

実施児童館（以下、児童館）等の選定、評価、周知方策の検討、遊びのプログラムの企画、事業全体への助言等について専門的な見地から助言をおこない、本事業を円滑に実施し十分な成果をあげることを目的として設置する。

2. 委員会メンバー（五十音順、敬称略）

[委員]

氏名	所属・職名
伊藤 美由紀	特定非営利活動法人こども・コムステーション・いしかり 理事長
大熊 良太	川口市立戸塚児童センターあすばる 所長
高阪 麻子	東郷町立兵庫児童館 館長
田村 奈緒美	石狩市 保健福祉部次長（子ども政策担当）兼子ども政策課長
西島 結	一般財団法人児童健全育成推進財団 参事
松永 忠 久志 寿芽恵	光の園児童館 親子の広場 統括施設長（8月～11月） " 児童厚生員（12月～3月）
宮里 和則	こども家庭庁こども家庭審議会児童福祉文化分科会舞台芸術委員会 委員長 特定非営利活動法人ふれあいの家おばちゃんち 理事

[こども家庭庁]

氏名	所属・職名
高根沢 景	成育局 成育環境課 児童環境づくり専門官

[事務局]

氏名	所属・職名
依田 秀任	一般財団法人児童健全育成推進財団 業務執行理事
渡部 博昭	同 事業部長
阿部 朱音	同 事業部係員

3. 開催概要（回数）と各回の検討内容

開催数、期日	検討内容
第1回 令和5年8月18日	本事業の方向性を確認し、全国4か所で行う実施プログラム、児童館の選定について検討する。 ・事業概要について ・実施する遊びのプログラムについて ・児童館の選定について ・今後のスケジュールについて
第2回 令和5年9月28日	児童館選出の各委員に対してあらためて方向性を確認するとともに、実施プログラムを上演する劇団との打合せ内容と方法について、鑑賞後のアンケートについて意見交換を行う。 ・事業概要について ・実施する遊びのプログラムについて ・劇団との打合せについて ・上演後アンケートについて ・今後のスケジュールについて
第3回 令和5年12月20日	10月に実施した遊びのプログラムについて、各児童館から報告をもらうとともに、実施当日に行ったアンケートの集計結果を報告する。報告書案を示し内容を確認する。 ・事業の実施経過について ・アンケートの中間結果について ・報告書の内容について

Ⅲ. 倫理面への配慮

- ・児童館ならびに劇団に、実名を報告書に記載することについて了承を得たうえで実施した。
- ・アンケート調査は事前に調査研究の目的・内容を伝え、協力していただける方について実施した。
- ・アンケート結果の集計及び報告書への掲載は、個人が特定されることのないよう配慮した。
- ・写真等は著作権ならびに肖像権、個人情報保護に厳重な注意を払って取り扱った。

Ⅳ. 調査研究の内容

1. 児童館における乳幼児親子を対象とした遊びのプログラム（主に児童劇、以下「プログラム」という）の企画・実施
 - （1）乳幼児支援における、厚生労働省 社会保障審議会推薦児童福祉文化財を活用したプログラムについて検討・整理する。
 - （2）調査研究委員会にて、厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財としてこれまでに推薦を受け、現在も上演可能な劇団を選定する。
 - （3）児童館を選定し、全国4か所で作品を上演、実施する。
2. アンケート調査の実施と検証
 - （1）上演後、参加し保護者、児童館及び児童劇関係者に対して、アンケート又はインタビューを行う。
 - （2）プログラムの現状や課題について分析・検証する。
3. 報告書の作成
 - （1）本調査研究の実施過程において調査研究委員会で検討した。
 - ・児童福祉文化財の選定基準、選定結果
 - ・児童福祉文化財の児童劇上演・実施報告
 - ・アンケート、インタビューの結果をとりまとめる
 - （2）児童福祉文化財の価値を検証し、今後の取組みのあり方を提案する。

V. 児童館の選定経過

1. 児童館の選定

4か所の実施児童館は、以下の点を考慮して事務局が候補となる児童館を推薦し、調査研究委員会での検討を経て決定した。

- ・施設規模（プログラムが実施可能な面積を有する）
- ・乳幼児子育て支援の取り組みの状況
- ・地域バランス

2. 選定結果（児童館プロフィール）

【北海道・東北ブロック】

児童館名	こども未来館あいぼーと
所在地	北海道石狩市花川北7条1丁目22番地
種別	大型児童センター
設置主体	石狩市
管理運営	特定非営利活動法人 こども・コムステーション・いしかり
ホームページ	https://iport-ishikari.net/mirai_top
特徴	<ul style="list-style-type: none">・飲食可能なスペースや中高生の居場所を兼ね備えた施設設計など、企画段階からこどもを含む市民の意見を反映して建設された児童館。・毎月第3日曜と年末年始以外は開館し、学校休業日に居場所のなかったこどもたちの居場所として機能している。・子育て支援拠点が併設されており、遊び場としてだけでなく子育て情報の発信地としても切れ目ない支援を行っている。

取組んでいる子育て支援活動

活動名	内容	対象年齢	平均利用組数
全員集合！	児童館利用者(小学生から高校生)、放課後児童クラブ児童、子育て支援拠点利用親子全員で簡単な遊びを通して交流する日	0才～18才と保護者	幼児・保護者5組 児童15名

【関東・甲信越ブロック】

児童館名	川口市立戸塚児童センターあすばる
所在地	埼玉県川口市戸塚南 4-10-2
種別	児童センター
設置主体	川口市
管理運営	株式会社コマーム
ホームページ	https://www.comaam.jp/uspal/
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児親子の遊びや交流、情報共有の場として多様な子育て支援プログラムを実施。なかでもママ友づくりの支援としてママのおしゃべりカフェを毎月開催し、参加者同士のつながりをサポートしている。 ・子ども会議、子ども実行委員会の開催など、こどもが意見を述べることのできる活動にも積極的に取り組んでいる。

取組んでいる子育て支援活動

活動名	内容	対象年齢	平均利用組数
おやこの遊びひろば	親子がつながる雰囲気づくりを行い、安心してすごせる居場所にする	未就学児	30～50組
ぱるにこクラブ	月齢や発達に合わせた活動を年間で行う	1歳児	18組
幼児クラブ	遊びを通して親子のふれあいを深める活動を行う	2歳児	20組
親子であそぼう	月に一回、保健ステーションと連携しテーマに合わせたミニ講座、母親同士の交流、ふれあい遊び等を行う	0歳児	15組
ママのおしゃべりカフェ	地域の子育て情報の交換、友達づくり	0歳児	8組
線路をつないであそぼう	父親参画の事業として、電車のおもちゃを通して交流を行う	2歳以上	5組
秋祭り	伝統芸能にふれたり簡単なゲームを楽しみ祭りの雰囲気を味わう。	乳幼児親子	40組

【東海・近畿・北陸ブロック】

児童館名	東郷町立兵庫児童館
所在地	愛知県愛知郡東郷町兵庫三丁目1番地
種別	小型児童館
設置主体	東郷町
管理運営	ハマダスポーツ企画株式会社
ホームページ	https://www.hamada-sports.com/hyougo_jidoukan/
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・職員主導による乳幼児親子向けの活動のほか、保護者同士の仲間づくりの支援、さらに希望する保護者グループによる自主活動の支援を積極的に行っている。 ・「保護者のしたいことを実現させる」姿勢を大切にし、参加者と職員が連携し活動している。

取組んでいる子育て支援活動

活動名	内容	対象年齢	平均利用組数
幼児クラブ	同じ月齢の親子で年間を通して活動するクラブ。主体は保護者。参加者同士でイベントやその日の内容を企画実施、職員はサポートのみ。	3クラブ 012歳児とその保護者	10組程度
のびすくひろば	職員による様々な体験の企画。運動、工作、遠足からお祭りまで年間を通して様々な活動をおこなう。	未就学の親子	15組程度
おやっとカフェ	保護者のおしゃべりをメインとした事業。 おしゃべりサイコロを使ったり、職員が話題を振ったりしてお茶を飲みながらおしゃべりをしたり気軽に相談をすることができる機会としている。	未就学の親子	5組程度
ママ企画	ネイルやズンバ(ダンス)など、保護者のやりたい事を実現させる企画。保護者が主体となって企画を	未就学の親子	5～10組程度

	し、職員はサポートをおこなう。		
まいにちすくすく	お昼ご飯の前に、読み聞かせや体操などをして「遊びのしめくくり」を実施。 その後も遊び続ける親子もいるが、こどもたちがこれをきっかけに「帰る」を選択できるよう実施する。	未就学の親子	その日の来館者全員

【中・四国・九州ブロック】

児童館名	光の園児童館
所在地	大分県別府市荘園 8 組
種別	小型児童館
設置主体	社会福祉法人 別府光の園
管理運営	社会福祉法人 別府光の園
ホームページ	http://beppu-hikarinosono.jp/
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・児童養護施設「光の園」を母体とし、児童館、放課後児童クラブ、保育所、共同生活援助グループホーム、児童家庭支援センター、一時保護所、別府市子ども家庭総合支援拠点を運営。 ・支援を要する家庭への支援や虐待予防の取組の必要性から児童館が創設された経緯があり、乳幼児親子が安心して利用できる点に配慮した施設運営が行われている。

取組んでいる子育て支援活動

活動名	内容	対象年齢	平均利用組数
ベビーマッサージ	歌遊び、ふれ合い遊び、ベビーマッサージ、お母さん同士の分かち合い	2ヶ月～1歳	10組
ママカフェ	アロマリップクリーム作りや、運動会、防災カフェや米粉離乳食作りなど、親子で気軽に集い、お母さん方が笑顔になる時間	就学前まで	12組

にじの会	絵本読み聞かせとわらべ歌遊び	就学前まで	5組 保育園児18名 (2歳児)
ちちんぷいぷい お母さんの会	お母さんのための、言葉遊びとポストカードを描く時間	就学前まで	5組
ぽこあぽこ	乳幼児を持つお母さんのための勉強会	就学前まで	14組
すくすくりサイクル & 助産師さんとほっと 交流会	・子ども服や子育て用品、玩具などの持ち寄り交換 ・助産師さんとの相談や交流	就学前まで	6組

VI. 実施するプログラム（児童劇）の選定経過

1. 実施するプログラム（児童劇）の選定

実施するプログラム（児童劇）は、以下の点を考慮して事務局が候補となる作品を推薦し、調査研究委員会での検討を経て決定した。

- ・厚生労働省 社会保障審議会推薦児童福祉文化財である
- ・鑑賞の対象が乳幼児とその保護者である
- ・本調査研究の目的を理解し協力が得られる

2. 選定結果（実施するプログラムの概略）

表1「実施するプログラム」参照

表1 「実施するプログラム」(劇団名の五十音順/敬称略)

実施劇団名等	作品名	作品内容	対象年齢	時間	対象人数
CAN青芸 ・所在地 埼玉県飯能市 ・責任者 新妻 嗣二	ぐるぐる 	<p>「ぐるぐる」は、2, 3 歳児に向けたセリフのないフィーリングパフォーマンス。笑う、泣く、怒る、食べる、寝る、歌うという日常体験をモチーフに構成されている。ふたりの登場人物は、手作り楽器とボイスパフォーマンス、喃語のような声を使い、あそびながら関係を積み重ねハーモニーにたどり着く。ぐるぐる模様のパネルで囲まれた、円形の客席で親子で観る不思議な体験。</p>	2～3歳	30分	上限30組 (会場による)
劇団風の子九州 ・所在地 福岡県福岡市 ・責任者 仮屋 祐一	ハイハイ、ごろ～ん。 	<p>8ヶ月から18ヶ月の赤ちゃんとその親に向けた演劇です。なるべく近い距離で観て欲しいので、上限20組で観てもらいます。言葉はほとんど使わず、動きや生音、人形や大小の球体を操り、赤ちゃんたちの五感に訴える作品です。客席は舞台を半円形に囲むようにしてあるので、親たちは、赤ちゃんたちの反応も見ることが出来ます。</p>	8ヶ月～18ヶ月	35分	上限20組 (会場による)

Ⅶ. 児童館・児童劇団との調整作業

1. 公演日時の設定

児童館、実施するプログラムの決定を受け、以下の通り公演日時の調整を行った。

- ・児童館と実施劇団（以下、劇団）それぞれに問い合わせを行い、実施可能日の候補を挙げてもらった。
- ・特に北海道の児童館では冬になると積雪による交通の欠航等があり得ることを考慮し、全ての児童館について秋の実施を予定して調整した。
- ・劇団からは「学校公演等の予定があるため、秋の実施は難しい」などの回答があり、2か所の児童館は1月に実施することになった。
- ・プログラムの開演時間は、各児童館の平常時の乳幼児向けプログラムの実施時間と実施候補日の都合、乳幼児の生活リズム等を考慮して調整した。

以上の条件を考慮し、次の通り公演日時を決定した。

公演日時	児童館名	劇団名	演目
11月2日（木） 10：30～11：00	川口市立戸塚児童センター あすばる	CAN青芸	ぐるぐる
11月11日（土） 12：30～13：00	こども未来館あいぼーと	CAN青芸	ぐるぐる
1月11日（木） 10：30～11：10	東郷町立兵庫児童館	劇団風の子九州	ハイハイ、ごろ～ん。
1月18日（木） 10：30～11：10	光の園児童館	劇団風の子九州	ハイハイ、ごろ～ん。

2. 児童館との調整

- ・施設長、または担当者と連絡を取り、劇団、公演内容について連絡した。あわせて公演日の相談、当日までの周知のお願いを行った。
- ・調査研究事業の趣旨説明をあらためて行い、効果把握のための参加者（乳幼児の保護者）ならびに職員に対するアンケートの協力依頼を行った。

3. 劇団との調整

- ・各劇団責任者と連絡を取り、調査研究事業の趣旨説明、実施前にオンラインまたは対面による打合せおよび下見を行って欲しいこと、効果把握等のためのインタビュー協力依

頼、実施費用の説明と見積書の提出依頼を行った。

- ・公演するにあたって必要となる要件・児童館への要望などを確認した。

4. 児童館、劇団、事務局による3者打合せ

- ・本調査研究では、劇団が事前に児童館を訪問することにより書面や電話、オンライン会議システムによる打合せでは気づきにくい公演会場の細かな状態を確認し、安心してプログラムが実施できる環境をつくるために、事前下見を行うこととした。
- ・事前下見以前に児童館、劇団、事務局の3者の顔合わせと、相互の基礎情報を共有することを目的として3者打合せを行うこととした。
- ・3者打合せの方法は下見、公演日時、3者の予定が合致する日などを考慮して対面またはオンラインで行うこととした。
- ・児童館、劇団の担当者に連絡して3者打合せの日程を調整した。
- ・日程調整の結果、次の通り3者打合せを行うことになった。

(公演日時順)

打合せ日時	児童館名	実施方法	備考
10月16日(月)	川口市立戸塚児童センター あすばる	対面	同日、事前下見も実施
10月12日(木)	こども未来館あいぽーと	対面	同日、事前下見も実施
10月17日(火)	東郷町立兵庫児童館	オンライン	
10月19日(木)	光の園児童館	オンライン	

- ・打合せに必要な基礎情報を整理して打合せ表を作成し、事前に児童館、劇団にメールで送信した。
- ・打合せ当日は、事務局が進行役となって、3者の自己紹介の後、打合せ表を元に1項目ごとに確認し、打合せ表に書き込む作業を行った。
- ・本調査研究の趣旨、作品内容、対象年齢・募集人数、劇団が必要とする設備の確認等を行った。特に対象年齢と募集人数は、鑑賞環境に大きく影響するため念入りに確認した。あわせてアンケート実施の依頼も行った。
- ・打合せ表は、次ページの通りである。

打合せ表

打合せ日：令和 年 月 日

劇団確認事項

① 児童館名	(担当者名:)
②公演日・時間	月 日() 時 分 ~ 時 分
③劇団名	(担当者名:) 連絡のとれる TEL /
④作品名	
⑤観覧対象	才 ヶ月 ~ 才 ヶ月程度の親子 (動員: 組 あるいは ___人程度希望)
⑥劇団編成	男性 人 / 女性 人
⑦到着予定	月 日() 時頃
⑧仕込予定	月 日() 時 ~ 時
⑨駐車場	(要・不要)児童館内・児童館外() *車の大きさ()
⑩控室	(要・不要) / *控室の準備物()
⑪暗幕	(必要・不要) *無い場合の対応策()
⑫会場について	*広さ *電源 *その他
⑬その他	

児童館確認事項

⑭観覧者の募集	*方法()
⑮スタッフ	児童館職員(人) その他(人)
⑯役割	児童館職員() () ()
⑰会場整理	*観覧者の誘導 (児童館職員等 人で担当)
⑱空調	(有・無) *無い場合の対応策()
⑲開会・閉会の流れ	
⑳アンケート	*配布のタイミング *アンケートセット ()部 *記入用筆記具()本 *回収方法 ()
㉑昼食手配	(要・不要) 人分
㉒その他	

下見の日時 月 日 () 時 分 ~

5. 劇団の事前下見

- ・本調査研究では、劇団が事前に児童館を訪問することにより書面や電話、オンライン会議システムによる打合せでは気づきにくい公演会場の細かな状態を確認し、安心してプログラムが実施できる環境をつくるために、事前下見を行うこととした。(前掲)
- ・実施日が間近であった「こども未来館あいぽーと」「川口市立戸塚児童センターあすばる」は、3者打合せと事前下見を同日に行うこととし、「東郷町立兵庫児童館」「光の園児童館」は3者打合せの際に下見実施日を決定した。
- ・日程調整の結果、次の通り事前下見を行うことになった。

(公演日時順)

下見日時	児童館名	備考
10月16日(月)	川口市立戸塚児童センターあすばる	同日、3者打合せも実施
10月12日(木)	こども未来館あいぽーと	同日、3者打合せも実施
12月8日(金)	東郷町立兵庫児童館	
11月17日(金)	光の園児童館	

- ・下見当日は、主に会場となる場所の広さや明るさ、観覧する親子の入退場導線、電源の状況、劇団員の控室となる部屋の位置、搬入出の経路、その他必要備品などの会場環境の確認を行った。
- ・児童館によっては日差し対策のために幕を用意することになったり、集客人数を変更したりするなど、現地の下見をしたからこそその気づきや対応変更があり、鑑賞プログラムにおける下見の重要性が確認できた。
- ・また、下見に合わせて児童館見学と児童館、劇団、事務局の懇談の時間を持つことができた。これにより、児童館の日常の運営・プログラムの様子や、児童館、劇団双方の理念を共有することができ、プログラム実施に向ける意識を統一する機会となった。

6. 児童館、保護者アンケートの作成

児童館における公演実施後の感想、意見、効果把握のため、児童館、保護者に向けてアンケートを実施することとした。

- ・保護者用アンケートは、こどもの年齢（月齢）、児童館利用の有無と利用頻度、これまでの演劇の鑑賞体験に関すること、今回の鑑賞体験におけるこどもの様子や感想などについて問うものとした。
- ・児童館用アンケートは、プログラム実施前の期待と実施後の親子の変化、児童館への効果、プログラムが効果的に実施された要因、今後の活用などについて問うものとした。

上記の観点により作成したアンケート案を第2回調査研究委員会にて提案し、ご意見をいただいたところ、次の意見があった。

【保護者用アンケートについて】

- ・最近の保護者はスマートフォンでのアンケートを望む方もいるので、アンケート用紙にQRコードを入れ、紙・スマートフォンが併用できるようにする。
- ・今後、継続的に同児童館での演劇プログラムの実施を約束するものではないので、誤解を与えないような表現とする。
- ・今後、全国の児童館で演劇プログラムが実施されるようなプラスになる設問を設定する。
等

【児童館用アンケートについて】

- ・回答期間は2週間に設定する。
- ・プログラム実施直後の記入、その後の保護者の変化を見るために日にちを開けてから記入しても良いこととする。
- ・いつ記入するか判断は児童館が行う。 等

以上の意見を反映、整理して再作成したアンケートを各委員に送付し、最終確認を得たうえで実施した。

アンケート（保護者用、児童館用）の内容は次ページの通りである。

【保護者用アンケート】

児童劇上演後アンケート(保護者様用)



本日はご覧いただきまして、ありがとうございました。
本来は観覧後の余韻を楽しんでいただきたいところですが、研究の一環で上演を行っていることをご理解いただき、下記のアンケートにご協力をお願いいたします。
なお、回答は統計的に処理しますので、個人が特定されることはありません。

問1 お子さんの年齢(月齢)を教えてください。()歳()ヶ月

問2 児童館を利用することはありますか?

①ある(週 回・月 回) ②ほとんどない

問3 今回の劇の上演は、何で知りましたか?

①児童館の広報(たより・チラシ・ポスターの掲示) ②インターネット
③児童館の職員から聞いた ④知人から聞いた ⑤その他()

問4 今までに、今回一緒にいらしたお子さんと一緒に、このようなプロの劇団の舞台を観たことがありますか?(キャラクターショーは含みません)

①観たことがある(下記③にもご回答ください)
②今回が初めて(下記④にもご回答ください)
③ どこでご覧になりましたか?()
④ 今回が初めての場合、それはなぜですか?(いくつでも選択可)
a.自分の子にはまだ早いと思ったから b.このような劇の情報がなかったから
c.泣いたり、ぐずったりすると困るから d.演劇は難しそうと思ったから
e.退屈しそうだから f.値段が高いから g.その他()

問5 今回、劇の上演に参加したきっかけを教えてください。(一つ選択)

①お子さんが観たいと言ったから ②お子さんに体験させたいと思ったから
③ご自身が演目(内容)に興味があったから ④児童館で観られるから
⑤誘われたから ⑥無料だから ⑦その他()

問6 上演を観覧したご感想を、保護者の方の視点で教えてください。(いくつでも選択可)

①楽しかった ②感動した ③ゆったりとした気分になった ④わくわくした
⑤どきどきした ⑥特くない
・具体的な感想があれば書いてください
()

問7 上演を観ていたお子さんの反応で気づかれたことを教えてください。

(自由にご記入ください)

問8 今回の体験は、お子さんの情操を豊かにする（美しいものや心を動かす出来事にふれ、想像力を豊かに持ち、コミュニケーション力を育むなど）きっかけになると思いますか？

①とてもそう思う ②そう思う ③少し思う ④どちらともいえない

問9 児童館でプロの劇団の公演を行うメリットは何だと思えますか？
(いくつでも選択可)

①子どもが喜ぶこと ②内容が良いこと ③いつも子どもが来ている場所であること
④親も気軽に来ることができる場所であること
⑤子どもが多少泣いても許されること ⑥無料または安く観られること
⑦特にない
⑧その他 ()

問10 (児童館上演に限らず) 劇を観る機会があったら、また観たいと思えますか？

①ぜひ観たい ②観たい ③演目による ④どちらともいえない

ご協力、ありがとうございました。その他お気づきの点がありましたら、ご自由にお書きください。

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。あてはまるものすべてに○をお付けください。

	子ども	保護者
1 鑑賞活動に満足し、次への期待を持った		
2 表情が明るくなってきた		
3 感情表現が豊かになってきた		
4 普段の行動が活発になってきた		
5 来館者同士のコミュニケーションが増えた		
6 児童館のプログラムに積極的に参加するようになった		
7 保護者が進んで意見を出すようになった		
8 児童館に来館する機会が増えた		
9 児童館職員に関わってくる場面が増えた		
10 舞台芸術に興味や関心を示すようになった		
11 舞台芸術に関する活動に参加するようになった		
12 特に変化はなかった		
13 その他 ()		

(3) 上演によって、児童館にどのような効果がありましたか。あてはまるものすべての番号を○で囲んでください。

1 子ども自身の楽しみが増えた
2 保護者の楽しみが増えた
3 子どもと保護者の関係に変化が表れた
4 身近な場所で良質な劇にふれることができた
5 子どもの感情表現が豊かになった
6 子どもの心の安定に効果があった
7 既存の児童館プログラムにより影響を及ぼした
8 新たな児童館プログラムの開発に資する気づきを得ることができた
9 児童館に乳幼児と保護者の来館児童が増えた
10 児童館に関心を持つ地域の来館者が増えた
11 地域のさまざまな社会資源(他施設・機関、主任児童委員等)との連携に資する気づきを得ることができた
12 職員の技術向上(スキルアップ)につながった
13 職員の意識向上(モチベーション)につながった
14 特に効果はなかった
15 その他の効果 ()

(4) 上演が効果的に実施されたのは、何が影響したからだと思いますか。あてはまるものすべての番号を○で囲んでください。

- | |
|--------------------------------|
| 1 児童福祉文化財推薦作品そのものの内容や質が高かったから |
| 2 児童館が身近で気軽に参加できる施設だから |
| 3 親と子で一緒に参加できるプログラムだったから |
| 4 事業実施までの準備の取組みの過程が良かったから |
| 5 事業実施にともない、児童館で関連プログラムを実施したから |
| 6 事業実施当日のプログラム内容が良かったから |
| 7 事業実施後の反省会の取り組みがあったから |
| 8 わからない |
| 9 その他 () |

(5) 今回のような劇団上演の機会があった場合、どのように対応しますか？
いずれか1つに○をお付けください。

- | |
|------------------------------------|
| 1 また上演してみたい |
| 2 条件が合えばまた上演したい
(それはどんな条件ですか?) |
| 3 上演しないと思う |
| 4 どちらともいえない |

(6) 今後、児童館では児童劇等の児童福祉文化財推薦作品を活用して、どのようなプログラムが実施できそうでしょうか？

また、活用のためにどのような工夫が必要だと思いますか。自由にお書き下さい。

活用プログラム
活用のための工夫

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

7. 委員によるプログラムの実施状況の視察

プログラムの実施状況の実際を客観的に観察・評価することを目的として、委員が当日の児童館での実施状況を視察した。

視察の際には、各委員が同様の観点で観察するよう、下記の統一項目をシート化して委員に共有し、記入をした。

また、これとは別に、実施日当日の時間経過を事務局が記録した。

- ・公演（上演作品）自体の感想
- ・参加者（こども、保護者）の様子
- ・劇団のことで気づいた点
- ・児童館職員のことで気づいた点
- ・全体を通しての感想

なお、使用したシートは次ページの通りである。

公演当日の感想

_____ 委員

公演前、公演中、公演後の参加者、児童館職員の様子などについてもご記入ください。

劇団名 / 作品名 劇団風の子九州 /	
公演日 年 月 日	公演場所
公演時間 : ~ :	参加者数 (おおよその人数) 名
① 公演 (上演作品) 自体の感想をお知らせください。	
② 参加者 (子ども、保護者) の様子はどうでしたか。	
③ 劇団のことでお気づきのことがあればお知らせください。	
④ 児童館職員のことでお気づきのことがあればお知らせください。	
⑤ 全体を通しての感想をお知らせください。	

第2章 調査研究の結果

－プログラムの実施結果－

I. 川口市立戸塚児童センターあすばる

1. 実施日・演目・参加人数

- ・2023年11月2日（木） 10:30～11:00
- ・『ぐるぐる』（CAN青芸）
- ・親子18組（こども19人、おとな22人）

2. 実施状況（時間経過）

時間	実施状況
	<p>（児童館による事前設営）</p> <p>多数のイベントやクラブ活動の掲示がされている。その中の一プログラムとして、チラシとポスターが掲示してある。たくさんの掲示や装飾がしてあり、これらを見ただけでも、児童館の温かい雰囲気と日ごろの活動の活発さが見て取れる。</p> <p>劇団3名着。すぐに搬入、会場の仕込みに入る。会場は遊戯室。</p> <p>前日に児童館側で日差し除けの簾を掛けていただいていた。</p> <p>これは、事前下見時に、プログラム実施日の天気が快晴だった場合に観客が眩しくなることを避けたいため「できれば」という劇団の要望に応えたもの。</p>
08:30	劇団員から説明を受けながら、マットの養生と衝立ての設置などの設営を行った。（劇団3名、児童館4名、事務局2名）
08:57	仕込みが終了し、児童館は定例の朝ミーティングを実施、劇団は控室（集会室）で上演の準備に入る
09:08	<p>関係者ミーティングを実施した。劇団員が進行。自己紹介後、入場から開演、終演までの流れを次の通り確認した。</p> <p>①開場は開演15分前、演者2人が会場内で親子を迎える</p> <p>②荷物台（長机）2台を設置する。スマホの電源を切り、スマホも荷物に入れて荷物台に置いてから着座してもらう。</p> <p>③着座はマット上で前方から。ただし、こどもを抱っこした状態で、こどもが脚を伸ばしてもマットからはみ出ないようにちょっとだけ後ろに座る。1列目は15枚のマットの上に座っていき、2列目は1列目の間から見えるような形で座る。おとなの見学者はマット上、さらに2列目の後ろに座る。</p> <p>④予定の観客が全員座ってから始めるため、集まりが悪い場合は5分押しとする。</p> <p>⑤開演のきっかけは、所長のご挨拶で。</p> <p>⑥終演は紙吹雪を撒きながら、演者が退場して終わる。それをきっか</p>

	<p>けに所長がアンケート記入依頼をして、配布、ご記入いただく。</p> <p>⑦開演から 15 分くらい経ってしまうと、作品世界に入り込むのが難しいので、その頃に来られた方にはあきらめていただく。</p> <p>⑧途中泣いてしまって収まらないこどもがいた場合、児童館がいつも行っている「こどもを児童館が見て、親は観劇を続ける」方式もよいことを確認する。(これで、こどもが親のもとに再び戻るができることもあるとのこと。)</p> <p>⑨また、立って抱っこしてあげることで落ち着くこどももいることから、入り口付近でそれを行うのも良いと劇団からアドバイスがあった。</p> <p>以上を確認した。</p>
09 : 25	<p>ミーティング終了</p> <p>9 : 30 頃から観客であろう親子が少しずつ来館し始める。親は日ごろの乳幼児クラブ来館時と同様にこどもに名札をつける。こどもたちは一目散に好きな遊びを始めている。親子とも、児童館にとっても慣れている様子。</p>
10 : 15	<p>開場。館内放送で入場を促すと、親子はすぐに入場を始めている。</p> <p>劇団員二人は、入口の所で親子を迎え入れている。一人が柔らかく太鼓を打ちながらハミングを口ずさみ会場の雰囲気を作っている。もう一人は親子に声を掛けて入場を促している。</p> <p>児童館職員は打ち合わせ通り、スマホの電源を切って荷物台に荷物を置いてから着座するように説明と場内案内をしている。</p> <p>一人、入場することを拒んで号泣しているこどもがいる。様子を見るが入れないため、親だけ先に入場して着座。こどもも追って入ったが泣き止まず、親も断念。劇団員が声掛けフォローしていた。</p> <p>こどもの多くが、親に抱っこされたり、横に座ったりしておとなしく座っている。</p> <p>いつもと違う雰囲気に高揚しているこどもと若干の戸惑いを見せるこどもがいる。親は期待の表情が見て取れる。待っているうちに、こどもの一人が、マットの円内側を走り始める。しばらく様子をうかがっていたが、3人程が同様にぐるぐると走り出した。待ち時間の丁度良い暇つぶしとなっていた。5分押しで開演。</p>
10 : 35	<p>開演。演者がコミカルに円内に入ってくるところからこどもたちは引き付けられている。笑う子、びっくりしているように目を見張っている子、ちょっと泣き出しそうな子、反応は様々だが目で追っている様子が見られる。親はよく笑って親子で楽しもうという姿勢が見える。</p> <p>真似あそび、追いかっこ、ふれあい遊びのようなもの、喜怒哀楽を表情や不思議言語（言葉じゃない言葉）で表現している。最初は強張っ</p>

	<p>た表情をしていた子たちも、慣れてきて少しずつ笑ったりするようになってきている。1人、途中で泣き出したこどもがいたが、少し後ろに下がったら泣き止んでいた。児童館職員は泣いたこどものフォロー、乳児連れの親のフォローなどをうまくしていた。また、職員が楽しそうに声を上げて笑っていたので、場が良い雰囲気となっていた。</p> <p>途中、演者が仰向けで寝てしまう場面ではこどもの一人が起こしに行く一幕もあった。全体的に明るく楽しいにぎやかな雰囲気でもこどもも楽しんでいた。</p>
11:05頃	<p>終演。所長がアンケートの依頼をして。アンケートとペンを手分けして配布。親は全員手書きで記入に協力してくれた。ペンとボードは喜んで持ち帰ってくれていた。アンケート裏面に気づかず、空欄のままの用紙が何枚かあったので、裏面の記入を促す必要があった。</p> <p>親に声を掛けて感想を聞いたところ「楽しかった」と言っていた。記入が終わると三々五々退場、そのまま児童館で遊んで行かれる方が多かった。</p>
11:20頃	<p>ばらし。劇団、児童館、事務局、見学に来ていた親子劇場の方で、15分ほどで終了。</p>
11:45頃	<p>その後、児童館、劇団、事務局で懇談の場面が作られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な反応があった（児童館） ・日ごろと違う面を見せたこどももいた（児童館） ・乳幼児向けの作品を作ろうと思ったきっかけは、海外で0～1歳向けの人形劇を見て、それまでの言語理解がないと演劇が成り立たないという考えが壊されて、乳幼児も観客となるとわかったこと。こうした劇を作りたいと思ったことから。（劇団） ・その後も発達心理を勉強したりしている。（劇団） ・非認知能力を高める意味でも観劇は重要ではないか。（劇団） ・こどもは目で直接見ていなくても背中で場の雰囲気を感じ刺激を受けている（劇団） <p>などの話を交換した。</p>

3. 実施児童館の感想、気づき、効果など

・公演を実施するにあたり劇団の方との打ち合わせにおいて対象年齢や発達段階、環境構成に細やかな配慮を次々と提案する姿に表現と児童福祉の分野を越えて「こどもの可能性を引き出す」方向性の一致を実感することができた。

公演では自施設における1・2歳児を対象にした「ぐるぐる」だけでなく、対象年齢が違う「ハイハイ、ごろ～ん。」も視察させていただき、同じように愛着形成から自発

的動作へのつながりを感じることができたことに驚くとともに、乳幼児や保護者の感受性の高さに感心した。また保護者のリラックスした表情やこどもに対する温かい声かけから社会問題となりつつある虐待への前向きなアプローチとしての可能性も感じた。さらに、地域の課題や特色、状況などを考慮した内容を選択して、自治体と地域の公共施設のニーズを踏まえて協力して継続的な公演実施につなげることができるのではないかと思う。加えてフリースクールなどではカリキュラムとして取り入れているところもあるが、児童館としてこども家庭庁の発足を受けこどもの意見を聞き、こども主体の演劇を劇団とともに一から作り上げてみるのは表現の可能性をひろげこどもの達成感や自己肯定感につながるのではないかと感じた。特に小学生低学年が興味のある分野と一緒に考えてみたいと思う。

学校や児童館を舞台にこどもの感受性を客観的に大人が感じる演劇などがあればぜひ観劇してみたい。それはこどもにとって夢につながる演技者や環境構成を含めた表現への好奇心の刺激になるのではないかと思う。

課題としては周知や効果の言語化、継続実施に対する費用面での助成など解決が難しい面があるのではないかと感じた。

今回の気づきから、小学生や中高生への体験会を見てみたい。そして保護者向けや職員向けの内容にも興味を感じ、表現方法の広がりや職員の日頃のこどもとのかかわりや声掛けに関係する気づきにもなるのではないかと思う。

4. 委員（1名）の観察

・公演（上演作品）自体の感想

客席としてパンチカーペットが円形に敷かれ、客席の後方にぐるぐる巻きのイラストの描かれた衝立が立てられたシンプルな設営。演者二人はその円の中心をメインに、客席にも移動しながら手作り楽器と声（言葉ではない音）と体の動きで喜怒哀楽を表現する。演者が表情豊かにコミカルな動きを織り交ぜながら演じる姿に、こどもたちが次第に引き込まれていく様子が見て取れた。主に2～3歳児が理解しやすいシチュエーションに楽器、足踏みなどの効果音があいまって、気が散りやすい年代のこどもたちの集中力を途切れさせない構成に感心した。

・参加者（こども、保護者）の様子

冒頭から演者二人が追いかけてっこをする姿を見てこどもたちは笑い出し、親の膝の上で

動き出す子や立ち上がって演者の動きをまねする子も出てきた。またこどもの反応を気にすることなく親の方が笑い出し、リラックスして楽しんでいる様子も見られた。追いかけてこのシーンで演者が客席の周りを走り回ったり、こどもたちの間に紛れ込んだりするとこどもたちはげらげらと笑いながら演者を目で追いかけて、会場全体の一体感が感じられた。走り出す子はおらず、ファンタジーの世界を親子で観て楽しめる適切な年齢設定であることが分かった。

・劇団のことで気づいた点

開場から演者が太鼓を叩きながら会場をぐるぐると回り続け、開演まで徐々にこどもたちが会場の雰囲気になれるような配慮が感じられた。客席を回りこどもの目を見て順番に優しくタッチしていく場面があったが、こどもの表情や態度を見て、笑顔でスルーすることもあった。演じながら客席のこどもの特性をよく観察しているのだと思う。また最後に紙吹雪を飛ばすとこどもたちが喜んで手を伸ばしていたが、全員に行き渡るように飛ばしていたことが印象的だった。

・児童館職員のことで気づいた点

終盤で泣き出した子がいたが、横に座っていた職員が「少し後ろに下がってみたら」と母親に声をかけていた。一つ後ろに座っただけでこどもは泣き止み、再び夢中になり最後まで観ることができた。少し距離を置くだけでこどもの気持ちを落ち着かせ、親もほっとできるような一言を提案できるのは、親子との日頃の関係性があるからかもしれないが、児童館職員の経験が生かされていると感じた。

・全体を通しての感想

片付け後、児童館、劇団、事務局が懇談する時間があった。児童館から、普段はよく動き回る子が劇に見入っていたことやきょうだいと来場した乳児さんも集中していたことに驚いたという感想があった。劇団からは、発達心理について学び 20 年以上かけて少しずつ内容をブラッシュアップしていることや観劇は非認知能力を高めることに有効であることなどの意見交換ができ、児童館とベイビーシアターとの親和性の高さが窺えた。

5. 保護者用アンケート結果【回収数 18】

問1 お子さんの年齢（月齢）を教えてください。

～0歳11ヶ月	0
1歳～1歳6ヶ月未満	0
1歳6ヶ月～2歳未満	0
2歳～2歳6ヶ月未満	7
2歳6ヶ月～3歳未満	6
3歳以上	5
無回答	0

問2 児童館を利用することはありますか？

ある	17
ほとんどない	1
無回答	0

問2-1 児童館を利用する頻度を教えてください。【集計条件】 問2「ある」

～月1回	0
月2回～月3回	2
月4回～月5回	4
月6回～月10回	4
月11回～月20回	5
月21回以上	1
無回答	1

問3 今回の劇の上演は、何で知りましたか？

児童館の広報	0
インターネット	0
児童館の職員から聞いた	17
知人から聞いた	1
その他	0
無 回 答	0

問3-1 児童館広報のどの媒体で知りましたか？【集計条件】 問3「児童館の広報」

たより	0
チラシ	0
ポスターの掲示	0
無 回 答	0

問4 今までに、今回一緒にいらしたお子さんと一緒に、このようなプロの劇団の舞台を観たことがありますか？（キャラクターショーは含みません）

観たことがある	2
今回が初めて	16
無 回 答	0

どこでご覧になりましたか？

・北とぴあ。

問4-2 それはなぜですか？【集計条件】 問4「今回が初めて」

自分の子にはまだ早いと思ったから	3
このような劇の情報がなかったから	9
泣いたり、ぐずったりすると困るから	8
演劇は難しそうと思ったから	3
退屈しそうだから	2
値段が高いから	2
そ の 他	0
無 回 答	2

問5 今回、劇の上演に参加したきっかけを教えてください。

お子さんが観たいと言ったから	0
お子さんに体験させたいと思ったから	10
ご自身が演目（内容）に興味があったから	1
児童館で観られるから	9
誘われたから	4
無料だから	2
その他	1
無回答	0

その他

- ・対象年齢だから。

問6 上演を観覧したご感想を、保護者の方の視点で教えてください。

楽しかった	17
感動した	1
ゆったりとした気分になった	3
わくわくした	13
ドキドキした	3
特にない	0
無回答	0

その他

- ・子どもが参加してとてもうれしそうで、その後まねしてました。
- ・音とリズム、表情で表現していて楽しかったです。
- ・迫力がありました。
- ・周囲の子どもたちを含め、最初こわばっていた顔が、最後笑顔の子が増えて面白いと思いました。

問7 上演を観ていたお子さんの反応で気づかれたことを教えてください。

- ・近くにいきなり来るとびっくりしてた。楽しそうな所は一緒に楽しめて良かった。
- ・おはなしではないので見ていられるか心配でしたが、いつのまにか世界に入り込んでいて、とても楽しそうでした。
- ・おとなしく座って見ることができた。
- ・音につられて、興味深く目で追っていて、とても楽しそうでした。近くで見すぎておどろいてしまったようですが、その後も泣きながらも、目で追っていたのが印象的でした。

- ・少し怖がったりした時もあったが、音が流れたり、面白いジェスチャーや最後の紙ふぶきが楽しそうでした。
- ・始まる前は不安だったけど、音が聞こえて劇団の方にひきこまれているようでした。とても楽しそうでした。
- ・とても興味深く観ていて、良かったです。
- ・30分は長くて飽きてしまうか心配でしたが、ずっと集中してしていました。
- ・子どもの色々な表情が見れたので良かったです。
- ・上演までの時間、おとなしくしていた分もあって、途中で集中できなくなった。音や表情は楽しめているけど、"真似る、追いかける"といったことの面白さは分かってなさそうだった。
- ・ゲラゲラ笑って楽しんでいた。
- ・速い動き、くり返しに反応していた。目で追っていた。
- ・音楽が好きなので、リズムある動きの時、楽しそうにしていました。太鼓の音への反応も良かったです。
- ・楽しそうだった。太鼓の音を聞きながら、笑ったりしていた。
- ・触らせてもらったり、参加するのが楽しそうだった。
- ・指示しをして、ドコにいる！と探したりずっと目で追っていて、わくわくしてそうでした！！音楽が好きな子なので楽しそうでした。

問8 今回の体験は、お子さんの情操を豊かにする（美しいものや心を動かす出来事にふれ、想像力を豊かに持ち、コミュニケーション力を育むなど）きっかけになると思いますか？

とてもそう思う	10
そう思う	6
少し思う	0
どちらともいえない	0
無 回 答	2

問9 児童館でプロの劇団の公演を行うメリットは何だと思いますか？

子どもが喜ぶこと	10
内容が良いこと	3
いつも子どもが来ている場所であること	6
親も気軽に来ることができる場所であること	14
子どもが多少泣いても許されること	8
無料または安く観られること	9
特になし	0
その他	0
無回答	2

問10 (児童館上演に限らず) 劇を観る機会があったら、また観たいと思いますか？

ぜひ観たい	10
観たい	4
演目による	2
どちらともいえない	0
無回答	2

その他お気づきの点などがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・すてきな時間をありがとうございました。家でも一緒にやってみたいと思います。
- ・とても面白かったです。他でも機会があれば、子ども向けであればぜひ見たいと思いました。
- ・親子で楽しめました。ありがとうございました！！
- ・いやがって泣く子を慣らせなくても良いと思う。せっかくの機会ではあるが無理することはない。
- ・とくになし。
- ・楽しかったです。ドキドキ ワクワクしました。

6. 児童館用アンケート結果【回収数 4】

(1) 上演前、劇に何を期待されましたか。(複数回答)

設問	回答数
子ども自身の楽しみとなること	4
保護者の楽しみとなること	3
子どもと保護者の関係に変化が表れること	1
身近な場所で良質な劇にふれることができること	4
子どもの感情表現が豊かになること	4
子どもの心の安定に効果があること	1
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼすこと	0
新たな児童館プログラムの展開が期待できること	2
児童館に乳幼児と保護者の来館が増えること	1
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えること	2
地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携が期待できること	0
職員の技術向上（スキルアップ）につながること	1
職員の意識向上（モチベーション）につながること	2
特になし	0
その他の期待	1
無回答	0

その他の期待

- ・子どもにとってあこがれの存在、不思議な感情、保護者との愛着形成の意識につながることに。

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【子ども】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	1
表情が明るくなってきた	4
感情表現が豊かになってきた	3
普段の行動が活発になってきた	0
来館者同士のコミュニケーションが増えた	0
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	0
保護者が進んで意見を出すようになった	0

児童館に来館する機会が増えた	0
児童館職員に関わってくる場面が増えた	0
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	0
舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	0
無回答	0

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【保護者】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	3
表情が明るくなってきた	3
感情表現が豊かになってきた	0
普段の行動が活発になってきた	0
来館者同士のコミュニケーションが増えた	0
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	1
保護者が進んで意見を出すようになった	0
児童館に来館する機会が増えた	0
児童館職員に関わってくる場面が増えた	2
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	1
舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	0
無回答	0

(3) 上演によって、児童館にどのような効果がありましたか。(複数回答)

設問	回答
子ども自身の楽しみが増えた	3
保護者の楽しみが増えた	3
子どもと保護者の関係に変化が表れた	0
身近な場所で良質な劇にふれることができた	4
子どもの感情表現が豊かになった	0
子どもの心の安定に効果があった	0
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼした	1
新たな児童館プログラムの開発に資する気づきを得ることができた	2

児童館に乳幼児と保護者の来館児童が増えた	0
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えた	0
地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携に資する気づきを得ることができた	1
職員の技術向上（スキルアップ）につながった	0
職員の意識向上（モチベーション）につながった	3
特に効果はなかった	0
その他の効果	0
無 回 答	0

（４）上演が効果的に実施されたのは、何が影響したからだと思いますか。（複数回答）

設問	回答数
児童福祉文化財推薦作品そのものの内容や質が高かったから	4
児童館が身近で気軽に参加できる施設だから	4
親と子で一緒に参加できるプログラムだったから	3
事業実施までの準備の取組みの過程が良かったから	0
事業実施にともない、児童館で関連プログラムを実施したから	0
事業実施当日のプログラム内容が良かったから	1
事業実施後の反省会の取組みがあったから	0
わからない	0
その他	1
無 回 答	0

その他

- ・ 2歳～3歳という月齢の発達によい影響があったのではないか。

（５）今回のような劇団上演の機会があった場合、どのように対応しますか？（単一回答）

設問	回答数
また上演してみたい	4
条件が合えばまた上演したい	0
上演しないと思う	0
どちらともいえない	0
無 回 答	0

(6) 今後、児童館では児童劇等の児童福祉文化財推薦作品を活用してどのようなプログラムが実施できそうでしょうか？

- ・SDGs に関するプログラム。小学生以上向け。
- ・小学生向け、又は中高生向けの演奏会や体験会。
- ・乳幼児の発達段階に合うプログラム。
- ・小・中・高校生向けの劇や音楽などの鑑賞会。
- ・ロールプレイ体験会。
- ・地域の異世代交流。

(6) また、どのような工夫が必要だと思いますか。

- ・小学生以上の子どもとの関わりを持つこと。(他1件)
- ・五感や感性を育むことの大切さを伝えること。
- ・日頃の関わりを大切にして信頼関係を築く、特に中高生との関わり。
- ・地域のニーズを知るための関係づくり、環境整備。
- ・子どもとのあそびを通じた関わり、信頼関係づくり。
- ・定期的、継続的な実施ができる環境醸成。

II. こども未来館あいぽーと

1. 実施日・演目・参加人数

- ・11月11日（土） 12:30～13:00
- ・『ぐるぐる』（CAN青芸）
- ・親子19組（こども20人、おとな22人）

2. 実施状況（時間経過）

時間	実施状況
10:00	<p>劇団2名着 (児童館による事前設営)</p> <ul style="list-style-type: none">・会場内は、事前の打ち合わせで劇団より要望があり、部屋を仕切る扉の窓に目隠しの画用紙を貼っていただいていた。また、こどもたちが気にならないようにするため、日差し除けのカーテンをかけていただいていた。・会場内は土足厳禁のため、会場入り口に靴や荷物を置けるよう長机二台、荷物袋も用意されていた。・会場前には受付ブースがあり、チラシが掲示されている他、整列できるよう導線のテープが床に貼られていた。・『ぐるぐる』のフォトスポットが設置されており、自由に親子で撮影できる場所があった。 <p>(当日設営)</p> <ul style="list-style-type: none">・児童館職員とともにマット、衝立の設置など行った。 <p>劇団2名、児童館2名、事務局</p>
10:30	<p>仕込み終了。関係者ミーティング。劇団員の進行により、自己紹介後、以下の通り、入場から開演、終演までの流れを確認した。</p> <ol style="list-style-type: none">① 開場は開演15分前、演者2人が会場内でお出迎えする② 荷物台（長机）2台を設定する。スマホの電源を切り、スマホも荷物に入れて荷物台に置いてから着座。③ 着座はマット上で前方から。ただし、こどもを抱っこした状態で、こどもが脚を伸ばしてもマットからはみ出ないようにちょっとだけ後ろに座る。1列目は15枚のマットの上に座っていき、2列目は1列目の間から見えるような形で座る。おとなの見学者はマット上、さらに2列目の後ろに座る。児童館職員は、親子が前方から座るよう、「ここに座ってください」と声掛けする。きょうだいで来ている場合には、場所に余裕をもつため二列目に案内する。

	<p>④ 予定の観客が全員座ってから始める。</p> <p>⑤ 開演のきっかけは、職員から軽い挨拶。</p> <p>⑥ こどもたちは大人の笑い声を聞くと幸福感を得る。遠慮なく笑ってくださいとのこと。</p> <p>⑦ 終演は紙吹雪を撒きながら、演者が退場して終わる。こどもが余韻を楽しんでいる間、事務局が記入依頼をして配布、ご記入いただく。この時、裏面も記入いただくよう声かけをする。また、こども未来館では「未来館」と呼称しており、児童館という言葉に馴染みがない保護者もいるため、アンケートにおける「児童館」＝未来館も含まれる旨も伝える。</p> <p>以上を確認した。</p>
11:00	<p>館内を視察させていただく。乳幼児向けのクッキング行事を行っていたほか、石狩市地域子育て支援拠点では、たくさんの乳幼児親子が利用していた。</p>
12:15	<p>開場。劇団員2人は、入口の所で親子を迎え入れている。一人が柔らかく太鼓を打ちながらハミングを口ずさみ（※こどもたちが場所に慣れるようにするため）、もう一人は入場してきた親子に挨拶。</p> <p>児童館職員は打ち合わせ通り、スマホの電源を切って荷物台に荷物を置いてから着座するように説明、場内案内。</p> <p>一人、場内を走り回る子がおり、衝立が気になる様子。</p> <p>きょうだい同士でじゃれあい、うずうずして動きたい様子の子、落ち着いて膝の上に座っている子などさまざま。</p>
12:30	<p>太鼓の音が鳴り、開演。</p> <p>それまで動きまわっていたこどもたちが、一瞬で目を奪われていた。</p> <p>全員驚いた様子で演者を見ている。</p> <p>演者は真似あそび、追いかっこ、ふれあい遊びのようなもの、喜怒哀楽を表情や不思議言語（言葉じゃない言葉）で表現している。</p> <p>こどもたちはしだいに慣れてきて、声を出して笑う。大人も一緒に笑ったり、動きをまねしたりする。</p> <p>開演前走り回っていた子が、演者の真似をして声を出したり、演者の後ろをついていったりと、動きながら演劇を楽しんでいる様子。</p> <p>顔をこわばらせながら観劇していた子が、途中で泣き出した。母が抱っこして壁際に移動したところ泣き止み、集中して観劇していた。</p> <p>親も子も声を出して笑い、驚き、終始明るく楽しい雰囲気であった。</p>
13:00 頃	<p>終演。親は全員手書きで記入に協力してくれた。</p> <p>途中で泣いていた子の保護者に話を聞くと、「歌や音楽は大好き。知らない人が近くにいるのが怖かったみたい」とのこと。</p>

	ママ友に誘われ苦小牧市より初めて来館した方もいた。「とても楽しかった」とのこと。退場後はフォトスポットで写真を撮る親子が多数いた。
13:30	ばらし。劇団、児童館、事務局で行った。

3. 実施児童館の感想、気づき、効果など

11月11日上演日。前日までなかった雪が朝積もっていた。幼児連れの外出にはやっかいな日だがみなさん早々に集まり観劇への期待値の高さがみて取れた。

今回、急な告知にもかかわらずあっという間に席が埋まったのは、子育て中の保護者のニーズの高さがあった。申込時「今から楽しみ！」とみなさん話され、予定で参加ができない方々から「残念！次の開催は？」と聞かれ、あるパパは「ちょうど娘(2才)に非日常の体験をさせたかった。」と話された。子育て中の保護者が幼児向けのプログラムに関心があることが随所に現れていた。

なかなか外出が難しい双子連れのお母さんが2組もいらした。それも遠方から。「二人ともじっとしていなが劇を見せたい」という強い決心の元、悪天候にもかかわらず来館された。劇が始まるまで児童館内を楽しそうにお散歩し卓球をしている小学生達を見学して時間を過ごしていた。

開演間近、会場に案内され何が起きるのかわからず“じっとママのとなりで身をすくめて待つ子”“ワクワクが止まらず走り回る子”がいる中でぐるぐるが始まる。音が聞こえだすとあっという間にぐるぐるの空間に引きこまれていった。平土間での上演だからこそリアルに感じる足音、息づかい、動作、表情、視点…集まった一人ひとりの期待と心地好い緊張感を全員で感じているようだった。

序盤で泣き出した子がいた。泣き声が迷惑になると感じた母親が座っていた場所から少し離れた壁際に移動。そのまま鑑賞を続ける。幼児の様子を見ていると視線はぐるぐるへ注がれおり最後まで鑑賞し笑顔を見せた。親子で最後まで観劇できたことの達成感を喜んでいった。

ママパパにとって我が子が観劇できたことも勿論うれしいが、プログラムの最大の魅力は今ここにいる子育て中の親子全員で劇に参加している感動を共有していることでありウェルビーイングを感じられたことではないだろうか。

地域にある児童館(日常にある空間)は、生まれて初めて出会う幼児期の観劇という遊びのプログラム(非日常)の場となることで地域の子育て世代へのウェルビーイングをもたらすことを実感できた日であった。

4. 委員・事務局（2名）の観察

・公演（上演作品）自体の感想

*演者と観客が円形に配置されていることで、観るだけでなく、自分もその中にいるような感覚になり、どんどん引き込まれていく作品だった。演者が2名なので目で追いやすく、丁度良いタイミングで場面が切り替わり、中心から外周に移動したりするので、幼児でも30分飽きることなく集中して観ていた。

*4つの衝立と円形のパンチカーペットでシンプルな舞台が構成されている。赤ちゃんが演者の動きが認識しやすいようなオノマトペを用いたシンプルな表現で構成された作品である。太鼓やカリンバ、口琴という小さな楽器を優しく鳴らしこどもの関心に向け、演者も表情豊かに演技している。二人の演者が楽しげに追いかけてくる様子をこどもが目で見追っていた。すぐって追いかけてこしているうち、観客のこどもたちもこちょこちょされるようになり、自然に親子が作品に参加していった。

・参加者（こども、保護者）の様子

*こどもは、上演直後から演者の動きと音に一気に引き込まれ、まばたきもしないで集中して見入っていた。動きと擬音だけで場面を理解できていて、笑ったり、心配そうな顔をしたり、表情がどんどん変わっていった。保護者もこどもの様子に驚いたような、うれしいような表情をしており、親子で一緒に楽しんでいる様子が窺えた。

*概ね2歳未満とみられる乳幼児とその保護者が参加した。こどもは親の膝に座ったり、手や肩などを片手でつかんだりしながら、真剣な面持ちでみる子や演者の動きを不思議そうな顔をしてみている。月齢の低い子も笑う、手をたたき、足をばたつかせるなどしっかり反応している様子がみられた。親と手をつないだまま真剣に見入る子や、作品が進むうち親からすこしずつ離れたり動きだしたりする子もいて、同じ作品に参加していてもこどもの反応はそれぞれの個性が見られた。親がクスッと笑ったり演者の動く方を指さしたりするリアクションが一緒にいるこどもを安心させるようだった。途中、泣き出した子がいて、母親と会場の端に移動したが、しばらくすると泣き止み、会場から出ることなく、遠目から最後まで見ていた。終了後、その母親にインタビューしたところ、知らない人との

距離が近いと怖がることもあり、演者との距離が近いことで圧倒されたと思うと話していた。

・劇団のことで気づいた点

*CAN青芸は、以前にもあいぽーとで別の演目を実施している。今回公演した「ぐるぐる」では、2人のベテランの演者がコミカルな動きとともに、小さなこどもにみせる作品として、空間づくり、構成・演出、音響・衣装等々に様々な配慮・工夫をしていた。

・児童館職員のことで気づいた点

*広報、打ち合わせ、会場設営、受付、控室や弁当の手配、記念撮影用の小道具など、イベントなれしていると思われる児童館職員の配慮が行き届いていた。公演中も、ぐずりだす子がいると親をさりげなくサポートするなど、日々こどもに関わっているスタッフがみえないところで重要な役割を担っている。

・全体を通しての感想

*3歳以下のこどもでも演劇を理解し、感じ取る力を持っていることを実感した。幼児期から本格的な芸術に触れることは、こどもの成長や保護者の心情にも良い影響を与えると思うが、こどもの状態によっては途中退席も想定され、有料（高額）の鑑賞料金を支払うことに躊躇される保護者もいるため、無料で鑑賞できたことは、保護者にとって次につながる良いきっかけになったと思われる。

*参加者の手荷物を会場で預かり、スマートフォンの持ち込みも制限、会場の扉を目張りしたり会場のカーテンも指定したりするなど、乳幼児が作品に集中できるよう視聴覚情報の管理が徹底していた。

5. 保護者用アンケート結果【回収数 23】

問1 お子さんの年齢（月齢）を教えてください。

～0歳11ヶ月	2
1歳～1歳6ヶ月未満	2
1歳6ヶ月～2歳未満	5
2歳～2歳6ヶ月未満	11
2歳6ヶ月～3歳未満	2
3歳以上	1
無回答	0

問2 児童館を利用することはありますか？

ある	15
ほとんどない	8
無回答	0

問2-1 児童館を利用する頻度を教えてください。【集計条件】 問2「ある」

～月1回	1
月2回～月3回	2
月4回～月5回	5
月6回～月10回	5
月11回～月20回	2
月21回以上	0
無回答	0

問3 今回の劇の上演は、何で知りましたか？

児童館の広報	4
インターネット	2
児童館の職員から聞いた	13
知人から聞いた	3
その他	1
無 回 答	0

その他

- ・市の広報誌

問3-1 児童館広報のどの媒体で知りましたか？【集計条件】 問3「児童館の広報」

たより	0
チラシ	1
ポスターの掲示	3
無 回 答	0

問4 今までに、今回一緒にいらしたお子さんと一緒に、このようなプロの劇団の舞台を観たことがありますか？（キャラクターショーは含みません）

観たことがある	3
今回が初めて	20
無 回 答	0

どこでご覧になりましたか？

- ・小学生の上の子があいぽーとでチラシをもらってきた。
- ・アートウォームカフェ
- ・アートウォームぼわぼわ
- ・中島公園

問4-2 それはなぜですか？【集計条件】 問4「今回が初めて」

自分の子にはまだ早いと思ったから	3
このような劇の情報がなかったから	13
泣いたり、ぐずったりすると困るから	4
演劇は難しそうと思ったから	2
退屈しそうだから	1

値段が高いから	1
その他	0
無回答	4

問5 今回、劇の上演に参加したきっかけを教えてください。

お子さんが観たいと言ったから	0
お子さんに体験させたいと思ったから	16
ご自身が演目（内容）に興味があったから	5
児童館で観られるから	7
誘われたから	6
無料だから	3
その他	0
無回答	0

問6 上演を観覧したご感想を、保護者の方の視点で教えてください。

楽しかった	21
感動した	5
ゆったりとした気分になった	0
わくわくした	15
ドキドキした	5
特にない	0
無回答	0

その他

- ・子どもが楽しむには、親が楽しんでいる姿を見せることが、楽しみを覚えるきっかけになると思いました。素晴らしい劇をありがとうございました。
- ・五感に訴えかける、楽しい演目でした。
- ・言葉がまだ理解できない子でも楽しめる劇でとても楽しめました。
- ・娘が目で人を追うのを久々に見れて、成長を感じました。音のする方を目で追うこともあった。
- ・二人の子どもが終わったら「さいこうだった！！」と喜んでました！
- ・一緒に歩いたりしたい！！
- ・また子どもと参加したいです。
- ・目と耳とで楽しむ事ができた。

- ・子どもの大スキなポイントが盛りだくさんで、楽器や声でいろんな音色があって感動しました。

問7 上演を観ていたお子さんの反応で気づかれたことを教えてください。

- ・言葉が無くても、内容を理解していると感じた。
- ・音楽を楽しんでいた。
- ・目の前で迫りに少しびっくりしたみたいですが、楽しめたようです。
- ・子どもも飽きずに見ていた。
- ・ずっと目で追っていた。
- ・集中して見られるか心配だったが、最後まで楽しく見る事が出来た。
- ・楽しそうにしていた。くいついて見っていた。
- ・声を出して笑っていた。
- ・とても楽しそうに見ていました。
- ・音楽だったり、人に集中していた。
- ・3才の子は、笑い声を出して楽しんでいた。
- ・下の子は興味ありげに見ていた。
- ・台詞がなくてもこんなに楽しめるんだ！と思いました。
- ・下の子がねむくて抱っこで見えていましたが、寝ることなく、音に反応して気になって見ていました。
- ・映像メディアを観る時とは、また違う真剣さで見つめていました。
- ・目で追いかける、真剣に見つめる。
- ・リズムにのっていた。楽しそうだった。
- ・笑顔が多かった。大きな音や声が急にした時は、少し怖がっていた。
- ・色々な音、動きでマネしていたりしていたので、子どもなりに感じとっているんだと思い、少し成長したと思えました。
- ・じっと見つめたり、音に反応して体が動きだしたり、とても楽しそうでした。いろんなものに興味をもってました。

問8 今回の体験は、お子さんの情操を豊かにする（美しいものや心を動かす出来事にふれ、想像力を豊かに持ち、コミュニケーション力を育むなど）きっかけになると思いますか？

とてもそう思う	16
そう思う	4
少し思う	0
どちらともいえない	0
無 回 答	3

問9 児童館でプロの劇団の公演を行うメリットは何だと思えますか？

子どもが喜ぶこと	18
内容が良いこと	7
いつも子どもが来ている場所であること	9
親も気軽に来ることができる場所であること	14
子どもが多少泣いても許されること	16
無料または安く観られること	8
特にない	0
そ の 他	0
無 回 答	3

問10 （児童館上演に限らず）劇を観る機会があったら、また観たいと思えますか？

ぜひ観たい	18
観たい	1
演目による	1
どちらともいえない	0
無 回 答	3

その他お気付きの点などがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・最初、緊張している様子でしたが、話が進むにつれて楽しんでいる姿が見られた。様々な表現手法がみられて楽しかったです。
- ・かなり楽しかったです！！
- ・またみたいです。

- ・ありがとうございました。(他4件)
- ・また来ます!
- ・また機会があれば参加してみたいです。

6. 児童館用アンケート結果【回収数 4】

(1) 上演前、劇に何を期待されましたか。(複数回答)

設問	回答数
子ども自身の楽しみとなること	4
保護者の楽しみとなること	3
子どもと保護者の関係に変化が表れること	2
身近な場所で良質な劇にふれることができること	4
子どもの感情表現が豊かになること	3
子どもの心の安定に効果があること	1
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼすこと	1
新たな児童館プログラムの展開が期待できること	3
児童館に乳幼児と保護者の来館が増えること	3
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えること	1
地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携が期待できること	0
職員の技術向上（スキルアップ）につながること	1
職員の意識向上（モチベーション）につながること	2
特になし	0
その他の期待	1
無回答	0

その他の期待

- ・家庭の経済状況にかかわらず参加出来ること

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【子ども】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	1
表情が明るくなってきた	3
感情表現が豊かになってきた	2
普段の行動が活発になってきた	0
来館者同士のコミュニケーションが増えた	0
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	0
保護者が進んで意見を出すようになった	0
児童館に来館する機会が増えた	0

児童館職員に関わってくる場面が増えた	0
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	0
舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	1
無回答	0

(2)鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【保護者】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	3
表情が明るくなってきた	2
感情表現が豊かになってきた	2
普段の行動が活発になってきた	0
来館者同士のコミュニケーションが増えた	1
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	0
保護者が進んで意見を出すようになった	0
児童館に来館する機会が増えた	0
児童館職員に関わってくる場面が増えた	0
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	1
舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	1
無回答	0

その他

- ・まだ小さすぎて、鑑賞会は早いかと思っていたが、今回参加してとても熱心に観ていたの
で、どんどんこういう体験をさせてあげたいと思った。
- ・子どものひきつけ方が勉強になった。参考にしたい！！

(3)上演によって、児童館にどのような効果がありましたか。(複数回答)

設問	回答
子ども自身の楽しみが増えた	1
保護者の楽しみが増えた	2
子どもと保護者の関係に変化が表れた	0
身近な場所で良質な劇にふれることができた	2

子どもの感情表現が豊かになった	0
子どもの心の安定に効果があった	1
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼした	2
新たな児童館プログラムの開発に資する気づきを得ることができた	3
児童館に乳幼児と保護者の来館児童が増えた	0
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えた	1
地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携に資する気づきを得ることができた	1
職員の技術向上（スキルアップ）につながった	1
職員の意識向上（モチベーション）につながった	3
特に効果はなかった	0
その他の効果	1
無 回 答	0

その他の効果

- ・以前も、児童館であった演奏会に参加して、今回もとても楽しかったので、また児童館や子育て支援センターで行う行事に参加したいという方が、多数いた。

（４）上演が効果的に実施されたのは、何が影響したからだと思いますか。（複数回答）

設問	回答数
児童福祉文化財推薦作品そのものの内容や質が高かったから	4
児童館が身近で気軽に参加できる施設だから	4
親と子で一緒に参加できるプログラムだったから	4
事業実施までの準備の取組みの過程が良かったから	3
事業実施にともない、児童館で関連プログラムを実施したから	0
事業実施当日のプログラム内容が良かったから	3
事業実施後の反省会の取組みがあったから	0
わからない	0
その他	1
無 回 答	0

その他

- ・我が子を機会があれば良質な芸術文化にふれさせたいと考えている保護者が地域にたくさんいるから。
- ・上演前に、劇団の方から具体的な対応の説明があったから。（幼児の行動への対応や私た

ち職員の立ち位置など)

(5) 今回のような劇団上演の機会があった場合、どのように対応しますか？(単一回答)

設問	回答数
また上演してみたい	4
条件が合えばまた上演したい	0
上演しないと思う	0
どちらともいえない	0
無 回 答	0

(6) 今後、児童館では児童劇等の児童福祉文化財推薦作品を活用してどのようなプログラムが実施できそうでしょうか？

- ・ 幼児～小学生低学年を対象としたプログラム。(劇など) (11ぴきのねこ)
- ・ 0才から18才まで成長発達段階、それぞれのプログラムを実施する。
- ・ 「こどもたちに読んでほしい本」から選んだ本を、対象年令(学年)者向けに、閉鎖された空間で読み聞かせをする。
- ・ 小学中・高学年向けの本を、効果音などを取り入れて、幼児から大人まで楽しめるようにする。
- ・ 劇「BALLORE～箏と舞踊の出会い」(令和5年度児童福祉文化財推薦作品)を上演し、地方の方まで参加できるものとする。

(6) また、どのような工夫が必要だと思いますか。

- ・ 児童館が定期的に開催する。(0歳から芸術文化にふれることが身近になり心豊かに育つ)。
- ・ 夏休み、冬休みなどに実施。
- ・ 本の内容に沿う効果音を取り入れる。
- ・ セリフがあったら児童にも参加してもらおう。
- ・ 集中するために閉ざされた空間で実施する。
- ・ 告知の方法に館外の施設(図書館や市役所や郵便局など)での掲示を加える。
- ・ 県外から来てもらうので、費用が高額になる。その費用を全て参加者負担にはできないと思うので、お金の捻出を考える。

Ⅲ. 東郷町立兵庫児童館

1. 実施日・演目・参加人数

- ・ 1月11日（木） 10：30～11：10
- ・ 『ハイハイ、ごろ～ん。』（劇団風の子九州）
- ・ 親子16組（こども17人、おとな16人）

2. 実施状況（時間経過）

時間	実施状況
7：00	<p>（児童館による事前設営）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 会場となる遊戯室の遊具などはすべて移動させる。・ 楽屋として、学童保育室（当日、工作室からへ変更）を片付けておく。・ 休憩室（対象月齢を超えたきょうだいをお預かりした）として、工作室に机や椅子を搬入しておく。・ 託児室として、図書室を片付けておく。・ 玄関前の看板などをベビーカーを並べやすいように移動させる。 <p>門の前にこどもたち手作りの「じどうかんもあるよ」とマスコットキャラクター「ひまならひっちゃん」のイラストが描かれた特大ポスターが掲示されている。館内にも職員手描きイラスト付きの案内がところどころに掲示されており、温かな雰囲気。</p>
7：30	<p>劇団4名到着。荷物搬入。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 劇団のワゴン車を児童館向かいのコミュニティセンターに駐車するため、また隣接する小学校の登校時刻8時までには搬入を完了させるため、全員で児童館前から遊戯室まで荷物を搬入する。
7：45	<p>搬入完了。</p> <p>（会場準備）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 劇団のみでセッティング。・ カーテンは、1窓分のみ明かりが入るようにレースカーテンにしておく。その他の窓は遮光カーテンをひく。・ 板張りの床の上にパンチカーペットを敷き、その上に参加組数分のクッションマットを並べる。 <p>（その他準備）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 順次出勤した職員が楽屋、休憩室、託児用の図書室などの準備。・ 劇団が衣装をアイロンがけするための電源確保。・ 終演後、劇団が衣装を選択するための洗濯機利用の確認。
9：15	<p>仕込み終了。劇団員の進行により関係者ミーティング。自己紹介後、入</p>

	<p>場から開演、終演までの流れと注意事項を確認。</p> <p>①観覧者の大きな荷物は遊戯室の外にあるベンチに置いてもらう。</p> <p>②受付で、観覧者の名前をひらがなで書いたテープを右肩に貼ってほしいとのこと（本人が嫌でなければ保護者も）。テープは劇団で準備されたものを利用。名前は予め職員が書いて準備した。また、劇団が用意した保護者へのメッセージを配布してほしいとのこと。受付の際に名札と一緒に職員がお渡しする段取りとした。</p> <p>③開場は開演15分前、演者が会場内でお出迎えする。</p> <p>④着座は参加者1組ごとに半円状のステージを囲むように配置されたクッションマットへ奥から座る。1列目8枚、2列目は1列目の間から見えるように10枚ほど敷かれている。見学者は会場奥と手前に並べられた椅子に座る、もしくは最後列に座る。</p> <p>⑤予定の観客が全員座ってから始める。</p> <p>⑥会場のスポットライトが点灯したら、開演の合図。</p> <p>⑦泣き出す子が出た場合、嫌で泣いている様子なら一旦会場から出てOK。また観たそうな様子なら、戻ってくれてOKとのこと。</p> <p>⑧開演してから、遅刻した場合も途中入場OK。</p> <p>⑨ステージの裏側や衝立などは危険なので、近づく子がいたら職員から近づいて声を掛けてほしいとのこと。</p> <p>⑩作品の終わり頃に手作りおもちゃを配り、自由に鳴らしたり演者は歌いながらフィナーレ。終演の合図は、「これでおしまいです」の演者の声掛け。「この後15分くらいゆっくり遊んでください」の声掛けを演者から行う。</p> <p>以上を確認した。</p>
9:40	<p>(受付準備)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名札の準備。 ・受付テーブルの準備。 ・参加者への伝達事項の確認。 <ul style="list-style-type: none"> ①スマホの電源を切るかマナーモードへの変更 ②記録用撮影の許可 ③大きな手荷物や上着は会場外に ④上映中の撮影は禁止
10:05	<p>10:00過ぎから託児利用の親子が来館。</p> <p>事前に児童館からアナウンスを行っていたため、開場予定の10:15を目指して来館する親子が多い。半数は兵庫児童館への来館が初めてのため、館内を見まわしたりしている。職員はこどもやお母さんの名前を呼びながら受付で名札を貼ったり、注意事項を説明してなごやかな雰囲気。順次受</p>

	付をしている間に開場時刻になった。
10 : 15	<p>開場。</p> <p>劇団員の合図で遊戯室の扉が開き、親子が入場した。演者2名と楽器演奏者1名が舞台の周りに座って親子を迎えている。外廊下で母親に抱っこされて待っていた子がマットの上に降ろされ、きょとんとした表情でお座りしている。顔見知りの母親同士が並んで座り、笑顔で会場を見渡しながらこどもに何か話しかけている。</p> <p>演者が小さな鈴を笑顔で優しく鳴らすと、早速興味を示して演者に近寄ったり、ステージに上がろうとする子がいる。演者は静止することなく、笑顔や動きで反応している。初めて来館する親子が半数だったものの、泣いたりぐずったりするような子はおらず、すぐに目で演者の動く様子を追いかける子が多かった。</p>
10 : 30	<p>開演。</p> <p>指に付けた小さな鈴を優しく鳴らしながら、二人の演者が会場をゆっくり歩いて回る。次第に「ぼつぼつぼつ」「によきよきによき」「ふあんふあんふあん」などのオノマトペを発していく。それに合わせて楽器が鳴り始めると、音に反応してそちらの方を見る子、親の顔を見上げる子、歩いて楽器に近づく子など、少しずつともたちの反応が表れ始める。</p> <p>大小のボールがステージに転がってくると、ボールの跳ねる動きを目で追う子、歩いて追いかける子、立ち上がって指さす子など、思い思いに反応している。楽器のそばからじっと離れない子もいるが、演奏者は穏やかな表情でこどもの動きを見守っている。やがて波の音に合わせて布の波が会場を一周すると「あ〜」という声がいくつも聞かれ、親も笑顔になった。波の音が大きくなり、ぱちぱちと拍手をする子、波の音を出す楽器を触ろうと手を伸ばす子、「う〜」と声を出しながら布を指さす子など、お母さんの元を離れてハイハイや歩くなどして動き出す子が増えた。途中、演者が赤ちゃんやお母さんに優しくタッチしながら名前を呼ぶとお母さんも照れくさそうに嬉しそうにしている。芋虫とカエルのぬいぐるみが登場しこどもたち一人ひとりに「こんにちは」と声をかけると、ぬいぐるみに手を伸ばしたり盛んに目を触る子がいた。気づけば、ステージに赤ちゃんが7〜8人集まっている。終盤、手作り楽器が配られると、振ってみたり、親に渡そうとしたり、なめたりして感触を楽しんでいる様子。太鼓の音に反応し少しぐずった子が一人いたが、音の変化やぬいぐるみの登場などで泣き止んだ。</p>
11 : 05	<p>終演。</p> <p>「これでおしまいですが、しばらく自由に遊んでください」の声。席を立つ人はおらず、そのまま手作り楽器を触ったり、近くの親同士で話をしたり、演者に話しかけたりして親もリラックスして過ごしている様子。こ</p>

	<p>どもたちはボールを持って歩いたり、おもちゃを振ったりなめたりしている。</p>
11:20	<p>館長からのアナウンスと、アンケートの配布。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めての来館者に向けて、今後の利用やSNS発信のご案内。 ・アンケートへの協力をお願い。 ・職員が手分けしてアンケートを配布。 <p>アンケートには全員がその場で記入してくれた。数名の親と話をしたが、初めて演劇を観て、我が子が集中していることに驚いたとのこと。楽器の音にとっても反応している様子を見て、こんなに音楽が好きだとは思わなかったという声もあった。この間も、手作りおもちゃで遊ぶ子や劇団員と話をする親もおり、アンケートの記入が終わってもこどもが飽きるまで遊びに付き合う親もいた。児童館職員は保護者一人ひとりに声をかけ、アンケート回収をしてくれた。最後の親子が帰るまで、劇団員も児童館職員も笑顔で見送った。</p>
11:45頃	<p>後片付け。</p> <p>劇団、児童館職員、事務局、見学に来ていた風の子中部スタッフなどで荷物の運び出し。車への積み込みは、劇団で行った。</p>
12:25	<p>劇団員と児童館職員3名、委員とで懇談の時間が持てた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観劇の際は、「我が子だけでなく、他の子と一緒に安全に観ましょう」という声掛けをすることで、親たちがどの子に対しても優しく接してくれる。 ・公演中に親が周囲に気兼ねすることなくリラックスできる空間づくりを意識している。 ・はじめは緊張感が漂っているように感じたが、徐々に赤ちゃんたちに動きが出てきて雰囲気が変わっていった。 ・それまでオノマトペのみ発していた演者からの「こんにちは」という何気ない一言がとても新鮮に感じられた。 ・ワークショップは必ずしもセットで実施する必要はないが、本作が参加型のためワークショップへつなげやすいと思う。後日遊びにつなげるツールとして児童館ではワークショップを取り入れやすいのでは。 <p>などの意見交換を行った。</p>

3. 実施児童館の感想、気づき、効果など

児童館で観劇という非日常に、初めから職員も来館者も興味を持った。様々な活動を行っている児童館であるが、表現活動は苦手な場合が多く、専門家による表現活動を実践できたのは職員にとって良い体験となった。

事前に劇団と担当者で直接打ち合わせができたことはよかった。劇団の方の思いをお聞き

し、児童館で実施することの大切を感じることができた。部屋の広さに対しての参加可能人数の設定等もしっかり計算され考慮されおり、その考え方は児童館の普段の活動においてもとても参考になった。

募集の際「赤ちゃんのための演劇」について支援者にも評判がよく、複数人から見学の申出を受けたほどだった。その劇の素晴らしさを知った上で、募集をすることができたことはよかった。参加した保護者の反応で最も多かったのは、赤ちゃんを連れて演劇を見ることができる「驚き」だった。参加したいという思いが強い方たちが多く、体調不良になった親がこどもを友達の母親に託しなんとかこどもだけでも参加させたいという人もいた。これは「演劇」という分野が子育て世代にとっていかに体験できる機会が少ないか、また体験したいと思っている人たちの思いの強さを表している。その機会をもっと増やすことが必要であると感じた。100%の参加率も、参加したいという思いの強さの表れである。

初めて来館する親子や、普段関わりのない親子同士が演劇を通じて関わり、話しをし、楽しそうな様子を見せたのは演劇の効果である。この非日常はこどもだけでなく大人たちの興味や気持ちの動きを促すのに十分な体験であった。そして実施の場所が児童館という来慣れた場所であり、こどもたちの行動を見守る職員がいるということも保護者にとってリラックスできる条件であり、「演劇」と「児童館」の組み合わせが、保護者達の参加のモチベーションを高めていると感じた。

また劇団員さんたちの「こども」「子育て中の親」についての学びがとても素晴らしく、他業種でありながらとても共感することができた。専門である「表現」という手法を使って、保護者やこどもたちに働きかけており、手法は違っても同じ目的であることに感激し、大きな学びとなった。

今回、児童館は「シアター」となることができた。劇団の力を借りていつもと違う場所になり、親子が演劇を楽しむ場所となったことにとっても感動をした。今後、児童館はまださまざまな場所になる可能性を秘めているし、いろいろなことがもっとできると感じた。新しい児童館の可能性についてこれまで以上に期待をもち、探求していきたいと感じた。

4. 委員・事務局（2名）の観察

・公演（上演作品）自体の感想

*幼児の動きや変化への保障があるような安心感があった。後半に向かうにしたがって母のもとを離れて動き出す子が増えていた。参加乳幼児、母は五感を生かしてのびのびと表情も穏やかに参加していた。

*3人の演者が登場し、赤ちゃんが音声としてとらえやすいオノマトペや鈴・鉄製のスリットドラムなどを使い、中央の小さな舞台を中心に会場全体で演じる。「ポポポ」「ニョキニョキ」「ウニャラウニャラ」など演者の出す声から、波の音を奏でる手作りの楽器、植物のつるで作られたボールや布製の不思議な形状の小道具などを使って盛り上がっていく構成・演出となっている。最後は、参加者に手作りのペットボトルのマラカスなどを渡し、一緒に音を出す体験をさせる。会場は観客側にマットで栈敷風の席がつけられ、さながらスヌーズレンのような会場でゆったりした環境の中で赤ちゃんの興味・関心を刺激する作品であった。

・参加者（こども、保護者）の様子

*第一子が多かったように感じたが、こどもも保護者も落ち着いて和やかに過ごしていた。鑑賞中は演者の動きを目で追う、一緒に動いたり、真似をしたり、楽器に興味を持ってその場を離れなかったりなど、愛着がしっかりと育まれているように感じた。母とくっついていながら、目で少しずつ演者を確かめたり、母の顔を確かめたりする姿も見られた。

*顔見知りの親子ばかりではなかったことから開演前はシーンと静まり、緊張した様子の親子もいたが、公演が始まり母親が演者のほうをみてクスクス笑うなど反応をしたら、リラックスした雰囲気が変わっていった。ひざ元から少し離れたり、演者や音の出る楽器のほうを指さしてみたり、なかには前方中央の小さな舞台上に多くの赤ちゃんが集まっていた。まわりを見渡したり、母親に何か合図を送ったり、寝転がったり、声を出したり、リズムにあわせて床をたたいたり、いろいろな反応がみられた。知り合いでなかった親同士もこどもたちの反応をみて顔を見合わせるなどコミュニケーションが図られていた。スリットドラムに吸い寄せられるように近づき、公演中終始そのまわりにいるこどももいて、自由でほのぼのしている様子であった。

・劇団のことで気づいた点

*自作の楽器にやさしい音色があり、和やかな雰囲気につながっているように感じた。ライトアップや演者同士のコミュニケーションに一貫した環境づくりを感じた。

*こどもの発達課題や子育て支援について、演者・制作担当者が思いをもっていると思われた。

・児童館職員のことので気づいた点

*参加者の募集や環境構成に丁寧な配慮を感じた。

*児童福祉文化財を広くみせたいという館長・職員の思いから、町内の児童館や子育て支援センターを通して広く広報していた。児童館の新たな利用者にもなっていくことが期待される。

・全体を通しての感想

*ねらいや対象年齢の設定は違っても、同じように温かい雰囲気に入れられ、こどもの発達につながるのではないかと劇の意義を体感できた。数値化が難しい、自発的好奇心が育まれる機会と考える保護者がどのくらい参加していたのか知ることができればより面白いと思った。

*公演後にインタビューした母親から、いつも上の子に手がかかっているが今日は下の子だけで参加したと聞いた。わが子の年齢で観劇の体験ができるということに大変興味をもって参加したということだった。

5. 保護者用アンケート結果【回収数 16】

問1 お子さんの年齢（月齢）を教えてください。

～0歳11ヶ月	9
1歳～1歳6ヶ月未満	7
1歳6ヶ月～2歳未満	0
2歳～2歳6ヶ月未満	0
2歳6ヶ月～3歳未満	0
3歳以上	0
無回答	0

問2 児童館を利用することはありますか？

ある	12
ほとんどない	4
無回答	0

問2-1 児童館を利用する頻度を教えてください。【集計条件】 問2「ある」

～月1回	2
月2回～月3回	3
月4回～月5回	4
月6回～月10回	2
月11回～月20回	1
月21回以上	0
無回答	0

問3 今回の劇の上演は、何で知りましたか？

児童館の広報	6
インターネット	0
児童館の職員から聞いた	6
知人から聞いた	2
その他	2
無 回 答	0

その他

- ・保育園
- ・支援センター

問3-1 児童館広報のどの媒体で知りましたか？【集計条件】 問3「児童館の広報」

たより	0
チラシ	1
ポスターの掲示	2
無 回 答	3

問4 今までに、今回一緒にいらしたお子さんと一緒に、このようなプロの劇団の舞台を観たことがありますか？（キャラクターショーは含みません）

観たことがある	0
今回が初めて	16
無 回 答	0

問4-2 それはなぜですか？【集計条件】 問4「今回が初めて」

自分の子にはまだ早いと思ったから	0
このような劇の情報がなかったから	13
泣いたり、ぐずったりすると困るから	4
演劇は難しそうと思ったから	2
退屈しそうだから	0
値段が高いから	0
そ の 他	1
無 回 答	2

その他

- ・ずっと座ってられない。

問5 今回、劇の上演に参加したきっかけを教えてください。

お子さんが観たいと言ったから	0
お子さんに体験させたいと思ったから	11
ご自身が演目（内容）に興味があったから	2
児童館で観られるから	3
誘われたから	2
無料だから	0
その他	0
無回答	0

問6 上演を観覧したご感想を、保護者の方の視点で教えてください。

楽しかった	16
感動した	3
ゆったりとした気分になった	10
わくわくした	7
ドキドキした	1
特にない	0
無回答	0

その他

- ・舞台装置の多彩さ、子どもの目線の演技、とても素晴らしかったです。
- ・子どものキラキラした表情に感動しました。
- ・独特な世界観で私自身も興味深かった。音も視覚も刺激が多かった。
- ・子が興味をもっている様子が見れてよかった。
- ・初めて体験する世界観で面白かったです。
- ・子どもも楽しそうで、とても良かった。

問7 上演を観ていたお子さんの反応で気づかれたことを教えてください。

- ・だんだん大きな音になる時驚かないよう、最初のきっかけとなる音はいつも優しい、きれいな、かわいい音ですい込まれた。子どもたちが一番聞く名前を使って音遊びをしてくれて、子どもたちもその音に振り向き、ハッ！とした明るい表情になっていた。子どもたちの「あーっ！」という声も演劇の一部として取り入れてくれた感じが嬉しかった。
- ・初めは私のそばで抱っこされていたが、プログラムが進むにつれて、だんだんと目が舞台に向き、離れていった。演目に集中しているのが感じとれた。
- ・太鼓の音が好きなようで、全身で音に乗っていた。

- ・楽器が好きなことに気付きました。楽しそうで目がキラキラしていました。別の場面でも音楽にふれられる機会を増やしてあげたいと思いました。
- ・大きい音の方が楽しそうだった。
 - ・一つ一つの動きをすごく目で追っていた。オノマトペの言葉？でこの頃の子たちならではの劇ですごく集中して楽しんでいたように思いました。
 - ・音にとっても敏感に反応していた。刺激が多かったのか「アー」「ウー」というように声を発することが多かった。ずっとご機嫌でぐずることが無かった。
 - ・色々な仕掛けや、演者さんの動きをよく見ていた。
 - ・普段は色々な所へ動き回っているけれど、とても集中して見ていた。
 - ・自由に動いても良いということでストレスなく楽しめて、たくさん笑顔が見られた。
 - ・じっと真剣に見ていて、赤ちゃんの好きなものを知ることができた。手を叩く、声を出すというのを場面に合わせてして、脳にとっても良さそうと思った。成長を感じた。
 - ・7ヶ月なので早いかなと思ったけど、よく見ていて楽しめてそうでした。
 - ・楽器だけでなく人の出す音・声にも興味を持っていた。
 - ・集中して見ていた。楽しそうに手を叩いていた。
 - ・上演に興味があったようだが、それ以上にまわりの人に興味を持って近付いている印象だった。
 - ・劇団員の方の動作にとっても興味深そうに見ていた。
 - ・たくさん色や音にすごく反応して、集中して見ていられた。

問8 今回の体験は、お子さんの情操を豊かにする（美しいものや心を動かす出来事にふれ、想像力を豊かに持ち、コミュニケーション力を育むなど）きっかけになると思いますか？

とてもそう思う		14
そう思う		2
少し思う		0
どちらともいえない		0
無 回 答		0

問9 児童館でプロの劇団の公演を行うメリットは何だと思えますか？

子どもが喜ぶこと	13
内容が良いこと	6
いつも子どもが来ている場所であること	6
親も気軽に来ることができる場所であること	12
子どもが多少泣いても許されること	14
無料または安く観られること	8
特にない	0
その他	0
無回答	0

問10 (児童館上演に限らず) 劇を観る機会があったら、また観たいと思えますか？

ぜひ観たい	14
観たい	2
演目による	0
どちらともいえない	0
無回答	0

その他お気づきの点などがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・急きょ、二人の子どもを一人で連れてくる事になりましたが、快く迎えて下さり、ありがとうございました。指さしたり、表情明るく見ていた姿を見て、子どもたちも楽しめたんだな！！と感じました。また、来たいです。
- ・演技のよさ、音の美しさ、舞台装置、どれもとてもすてきでした。我が子と私に良き体験をありがとうございました。
- ・ゆっくりする時間をすごせて、あたたかい気持ちになりました。じーっと集中してみている息子をみて、良い体験ができたなあと思いました。ありがとうございました。
- ・自由に動きまわられて、本人も楽しそうだった。
- ・五感を刺激するすごく素敵な上演の時間でした。演者さんの表情もよく、反応が返ってくるのもこの劇ならではの、とても子どもは嬉しいのだと思っていました。子どもの素敵な表情に私たち親まで笑顔になる事ができました。本当にありがとうございました。
- ・とても素敵な機会をありがとうございました。親子共々リフレッシュになりました！
- ・マラカスのビーズがこぼれていた。
- ・あたたかい雰囲気で見ることができ、親もゆったりとした気持ちで見られた。
- ・参加させていただきありがとうございました。色々な方が声をかけて頂き楽しい時間を過

ごせてリフレッシュになりました。是非またやってほしいです。

- ・非常に興味深く見させて頂きました。子どもも目を見開いていました。おもちゃも参考になるものが多く、家でも作ってみたいと思います。ありがとうございました。
- ・他にはないイベントを楽しみにしています。

6. 児童館用アンケート結果【回収数 4】

(1) 上演前、劇に何を期待されましたか。(複数回答)

設問	回答数
子ども自身の楽しみとなること	2
保護者の楽しみとなること	4
子どもと保護者の関係に変化が表れること	2
身近な場所で良質な劇にふれることができること	4
子どもの感情表現が豊かになること	3
子どもの心の安定に効果があること	4
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼすこと	3
新たな児童館プログラムの展開が期待できること	4
児童館に乳幼児と保護者の来館が増えること	3
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えること	2
地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携が期待できること	0
職員の技術向上（スキルアップ）につながること	4
職員の意識向上（モチベーション）につながること	4
特になし	0
その他の期待	0
無回答	0

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【子ども】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	3
表情が明るくなってきた	4
感情表現が豊かになってきた	3
普段の行動が活発になってきた	1
来館者同士のコミュニケーションが増えた	2
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	2
保護者が進んで意見を出すようになった	0
児童館に来館する機会が増えた	1
児童館職員に関わってくる場面が増えた	1
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	0

舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	0
無回答	0

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【保護者】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	4
表情が明るくなってきた	4
感情表現が豊かになってきた	2
普段の行動が活発になってきた	1
来館者同士のコミュニケーションが増えた	3
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	2
保護者が進んで意見を出すようになった	0
児童館に来館する機会が増えた	1
児童館職員に関わってくる場面が増えた	1
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	0
舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	0
無回答	0

(3) 上演によって、児童館にどのような効果がありましたか。(複数回答)

設問	回答
子ども自身の楽しみが増えた	2
保護者の楽しみが増えた	4
子どもと保護者の関係に変化が表れた	2
身近な場所で良質な劇にふれることができた	4
子どもの感情表現が豊かになった	2
子どもの心の安定に効果があった	2
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼした	4
新たな児童館プログラムの開発に資する気づきを得ることができた	4
児童館に乳幼児と保護者の来館児童が増えた	0
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えた	2

地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携に資する気づきを得ることができた	0
職員の技術向上（スキルアップ）につながった	4
職員の意識向上（モチベーション）につながった	4
特に効果はなかった	0
その他の効果	0
無 回 答	0

（４）上演が効果的に実施されたのは、何が影響したからだと思いますか。（複数回答）

設問	回答数
児童福祉文化財推薦作品そのものの内容や質が高かったから	4
児童館が身近で気軽に参加できる施設だから	3
親と子で一緒に参加できるプログラムだったから	4
事業実施までの準備の取組みの過程が良かったから	2
事業実施にともない、児童館で関連プログラムを実施したから	0
事業実施当日のプログラム内容が良かったから	3
事業実施後の反省会の取組みがあったから	0
わからない	0
その他	1
無 回 答	0

その他

- ・広報の際、作品の youtube などを事前に見せていただき、とても良さそうな作品だと職員が実感したので、保護者にオススメしやすかった。

（５）今回のような劇団上演の機会があった場合、どのように対応しますか？（単一回答）

設問	回答数
また上演してみたい	4
条件が合えばまた上演したい	0
上演しないと思う	0
どちらともいえない	0
無 回 答	0

(6) 今後、児童館では児童劇等の児童福祉文化財推薦作品を活用してどのようなプログラムが実施できそうでしょうか？

- ・「子どもを健やかに育てる本」の中で絵本をテーマにした観て、聞いて、楽しめる幼児向けの劇も今後、観てみたいと思った。
- ・劇中で使用したようなおもちゃ（楽器）を作って、遊ぶプログラム。
- ・言葉に頼らず身振りや音などで遊ぶプログラム。
- ・今回上演いただいたプログラムは親子の心身の安定を図ることに適した内容だと感じました。育児不安を抱えている方にとっての落ち着いた雰囲気での安らぎの時間を提供するようなプログラムを実施できると良いなと思いました。
- ・小さな子どものための演劇、映像の実施上映をしてその後、保護者たちが、感想を言ったりできるおしゃべりタイムをプラスする。→心が動かされた後は、相談事なども話しやすくなるため。

(6) また、どのような工夫が必要だと思いますか。

- ・児童福祉文化財推薦作品に何があるか、よく知らなかったので、今回調べるきっかけとなった。皆が広く知る機会がもっとあると良いと思った。
- ・独自の世界観をつくり、それも理解してもらう工夫。
- ・落ち着いた雰囲気を作るために、デジタル機器の使用について説明をしたり、施設全体に音楽をかけるなどの工夫が必要だと思いました。
- ・児童館でリラックスして文化作品にふれる事ができる環境を作ること。また、そのために職員もスキルUPする必要があるため学ぶこと。小さな子どもたちに与えたいことや刺激、体験がおよぼす効果等。

IV. 光の園児童館

1. 実施日・演目・参加人数

- ・ 1月18日（木）10：30～11：10
- ・ 『ハイハイ、ごろ～ん。』（劇団風の子九州）
- ・ 親子14組（こども15人、おとな15人）

2. 実施状況（時間経過）

時間	実施状況
	<p>（児童館による事前設営）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 会場は運営同法人の敷地内の児童養護施設（児童館の隣）のホールである。日頃は利用しているこどもたちの学習や集会などで使用している場であるが。長テーブルや椅子はすべて移動させてあった。・ 楽屋はホール奥の部屋を用意。・ 参加親子は、いつも通り児童館に来館し、開場時間になったらホールに移動する。 <p>同法人が運営する児童施設の原点は児童養護施設にあり、その後地域の子育て支援として保育園、こども家庭支援センター等を開設している。児童館は、児童養護施設利用児童の多くが被虐待経験がある中、虐待予防のためには孤立傾向にある子育て家庭の支援が重要と考えたことから、地域の乳幼児子育て家庭の支援を行うために児童館を開設したとのことである。また、児童館や保育所を運営することで、孤立しがちな児童養護施設が地域に開かれるという狙いもある。今回の遊びのプログラム参加者の募集にあたっては、広く広報を進めるほか、日ごろ児童館で行われるベビーマッサージに参加している親子にもぜひ声をかけたいと言っていた。</p>
7：30	<p>劇団4名到着、搬入と舞台仕込み （会場準備）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 劇団のみでセッティング。・ ホールのスポットライトも利用するため、向きや明るさなど確認。・ 板張りの床の上にパンチカーペットを敷き、その上に参加組数分のクッションマットを並べる。 <p>（その他準備）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 上演の様子を劇団が記録するため、カメラの三脚を調達。・ 劇団が衣装をアイロンがけするための電源確保。・ 終演後、劇団が衣装を洗濯するための洗濯機利用の確認。 <p>劇団代表曰く、観客を1列で配することができ、ベストな状態に会場ができたとのこと。</p>

9 : 15	<p>仕込み終了。劇団員の進行により関係者ミーティング。自己紹介後、入場から開演、終演までの流れと注意事項を確認。</p> <p>①観覧者の大きな荷物は会場となるホール内にあるカウンターのところでお預かりする。</p> <p>②受付で、観覧者の名前をひらがなで書いたテープを右肩に貼る。(本人が嫌でなければ保護者も)。テープは児童館のものを利用。名前は予め職員が書いて準備した。また、劇団が用意した保護者へのメッセージを配布してほしいとのこと。受付の際に名札と一緒に職員がお渡しする段取りとした。</p> <p>③開場は開演15分前、演者が会場内でお出迎えする。</p> <p>④着座は参加者1組ごとに半円状のステージを囲むように配置されたクッションマットへ奥から座る。今回の会場は、全員が1列で半円状態で鑑賞できる。見学者は会場奥と手前に並べられた椅子に座る、もしくは最後列に座る。</p> <p>⑤予定の観客が全員座ってから始める。</p> <p>⑥会場のスポットライトが点灯したら、開演の合図。</p> <p>⑦泣き出す子が出た場合、嫌で泣いている様子なら一旦会場から出てOK。また観たそうな様子なら、戻ってくれてOKとのこと。</p> <p>⑧開演してから、遅刻した場合も途中入場OK。</p> <p>⑨ステージの裏側や衝立などは危険なので、近づく子がいたら職員から近づいて声を掛けてほしいとのこと。</p> <p>⑩作品の終わり頃に手作りおもちゃを配り、自由に鳴らしたり演者は歌いながらフィナーレ。終演の合図は、「これでおしまいです」と演者が声掛けする。さらに「この後15分くらいゆっくり遊んでください」の声掛けを演者から行う。</p> <p>⑪頃合いを見計らって児童館職員がアンケートの依頼をして配布する。自然に帰るのを見送る。帰り際には児童館が用意したお土産を渡す。</p> <p>以上を確認した。</p>
9 : 40	<p>(受付準備)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名札の準備。 ・参加者への伝達事項の確認。 <ul style="list-style-type: none"> ①スマホの電源を切るかマナーモードへの変更 ②記録用撮影の許可 ③大きな手荷物や上着は会場後方に置く ④上映中の撮影は禁止
	<p>記録者がホールにいたため、参加親子が児童館に来た様子を見ることができなかった。</p>
10 : 00 頃	<p>開場。</p>

	<p>劇団員の合図で参加親子が児童館からホールに移動、入場した。演者2名と楽器演奏者1名が舞台の周りに座って親子を迎えている。いつもの児童館ではない場所であること、白を基調とした不思議な雰囲気舞台空間であるためか、不思議そうな顔をした子が何名か見られる。ベビーマッサージなどで顔見知りなのであろう。多くの母親が挨拶を交わし、おしゃべりしながら入場してきた。笑顔で会場を見渡しながらかどもに何か話しかけながら着座した。</p> <p>演者は小さな鈴を鳴らしたり、母に「リラックスして横になってみたりしても構わない」ことを話し、自分もゴロンとしたりして見せている。子は早速興味を示して演者に近寄ったり、ステージに上がろうとしたりしている。親の中にはまだこうした子をそっと抑えている方もいる。その間も演者はほぼ静止することなく、笑顔や動き、語りかけで和やかな空間づくりをしている。顔見知りが多いのか、初めから楽し気に話し合っている方も多い。父親も一緒に来た家族もいる。やわらかい雰囲気の空間ができあがっていく。</p>
10 : 30	<p>開演。</p> <p>指に付けた鈴を優しく鳴らしながら、二人の演者が会場をゆっくり歩いて回る。ゆっくりゆっくり、カーペットなので歩く音は出ない。子たちは凝視している。そのうち演者が不思議なオノマトペを発し楽器が鳴り始めると、音に反応する子がいる。親の顔を見て確認している様子の子、楽器に近づく子など、こどもの反応が表れ始める。</p> <p>大小のボールがステージに出てくると、ボールを目で追う子、ひたすら追いかける子など様々な反応を示す。ボールを追いかけるあまり、舞台裏に入ろうとする子がいたが、児童館職員がちょうど良いタイミングで子の中に戻した。</p> <p>手作り楽器の波の音に合わせて布の波が会場を一周する。親子は一様に「わー」、「あ〜」という反応。子も親も笑顔になっている。楽器のリズムに合わせるかのようにぱちぱちと拍手をする子、声を出しながら布を指さす子など、お母さんの元を離れて自由に動き出す子が増えている。途中、演者が赤ちゃんやお母さんの名前を呼びながらタッチしていく。親も子も嬉しそうだ。芋虫とカエルのぬいぐるみが登場しこどもたち一人ひとりに「こんにちは」と声をかけると、ぬいぐるみに手を伸ばしている。終盤、手作り楽器が配られると、振ってみたり、親に渡そうとしたり、なめたりして感触を楽しんでいる様子。</p>
11 : 05	<p>終演。</p> <p>「これでおしまいですが、しばらく自由に遊んでください」の声。席を立つ人はおらず、そのまま手作り楽器を触ったり、近くの親同士で話をしたり、演者に話しかけたりして親もリラックスして過ごしている様子。こ</p>

	<p>どもたちはボールを持って歩いたり、おもちゃを振ったりなめたりしている。</p> <p>序盤から最後までほぼ泣き止まない子がいたが、ほかの子たちは気にする様子もなく、自分のペースで楽しんでいた。終演後その泣いていた子の母親にほかのお母さんたちが「泣き止まなかったね〜」「大丈夫よ〜」などと笑顔で声をかけていたのが、とても印象的だった。</p> <p>アンケートも配布。子はそれぞれ遊びつつ、親はその場でアンケートに協力してくれた。</p>
11:20	<p>その間にも、手作りおもちゃで遊ぶ子や劇団員におもちゃの作り方を聞いている親、中央にある木のところでスマホで記念撮影をしている親もいた。</p> <p>それぞれこどもの様子を見ながら帰る体制となる。打ち合わせ通り、お土産を渡しながらお見送り。一様に楽しかったと言いながら会場を後にしていかれた。アンケートの記入が終わってもこどもが飽きるまで遊びに付き合う親もいた。児童館職員は保護者一人ひとりに声をかけ、アンケート回収をしてくれた。最後の親子が帰るまで、劇団員も児童館職員も笑顔で見送った。</p>
11:45頃	後片付けは劇団員が行った。
12:25	<p>劇団員と児童館職員2名、委員2名、法人施設長の奥様、保育園園長と懇談の時間が持てた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いを見知った関係で観劇ができていたので、親も子もリラックスしていてよい雰囲気できていた。児童館ならではの環境だろう。 ・乳幼児でも惹きつける劇団の技術に驚きと感動の気持ちを持った。 ・公演中に親が周囲に気兼ねすることなくリラックスできる空間づくりを意識している。 ・はじめは緊張感が漂っているように感じたが、徐々に赤ちゃんたちに動きが出てきて雰囲気が変わっていった。 <p>などの意見交換を行った。</p>

3. 実施児童館の感想、気づき、効果など

今回、初めて、乳幼児親子を対象とした観劇会を開催し、感動と驚きの連続でした。開催会場は児童館と同じ敷地内にある別の建物だったので、慣れない場所や雰囲気、開演前は泣いている赤ちゃんもいましたが、開演し、演者2名が動き出すと、赤ちゃんの泣き声がピタッと止まり、演者の声や動きに反応し、釘付けになって見ていたことは驚きでした。

また、セリフを一切使わず、動きや声、音などで赤ちゃんの五感に働きかけ、赤ちゃんたちが自由に、それぞれの感覚や興味、関心を繰り広げることが出来たことは、お母さん方に

とって、とても嬉しく、赤ちゃんを受け身だけの存在から、1人の尊い存在として実感することができた、感動的な出来事だったようです。

そんな赤ちゃんたちの様子を、お母さん方は、微笑ましく、愛おしく見つめ、赤ちゃんがどんな反応をするのか、どんなことに興味を示すのか、いつ自ら動き始めるのか、興味深く楽しみ、会場はとても温かい雰囲気になりました。

そして、この観劇会を、地域の児童館で実施できたことは、とても効果が大きかったと感じます。

参加のしやすさはもちろんのこと、劇中に赤ちゃんが泣いても、それをお母さん方みんなが温かく見守り、泣いている子のお母さんに優しく声をかけ、お互いに支え合い、癒し合うことが出来ました。

それは、日頃から同じ児童館を利用している仲間同士であることが大きな理由であるように思います。

更に、お母さん方がこの観劇会に参加できたことにより、「こどもの心をより良く育てる」その手段として、本物の文化や芸術に触れることの大切さを実感し、赤ちゃんでも楽しめる作品があることを知ることができたことは、とても大きな発見でした。

4. 委員・事務局（1名）の観察

・公演（上演作品）自体の感想

自館と併せ、公演を見るのが2回目となったが、参加者（赤ちゃんも保護者も）巻き込み型のため動きも音もタイミングも異なっていた。しかしながらそれが自然すぎて違いを感じたというよりは、「とてもそれぞれの場に合っていた」という感じがした。こどもたちに伝えたいこと、感じて欲しいことを演者がしっかりと芯をもって演じているため、おだやかなふんわりとした中にも強い意志が伝わる。保護者にとってこれほど満足する作品はないのではないかと感じる。

・参加者（こども、保護者）の様子

赤ちゃん達の引き込まれる様子は何度見ても感動する。保護者たちはその様子を見て、また満足したような笑顔を徐々に浮かべていくのが見て取れた。泣いたり、声を出したりする赤ちゃんに合わせて演者が動き、また声を出していくその掛け合いは気持ちよく全体の雰囲気を作っていた。後半、保護者達もリラックスして隣のママたちと小さなおしゃべりをしたり、赤ちゃんに声をかけたりしてまた雰囲気が変わっていった。赤ちゃんの動き

回るのを止めようとしたママを、隣のママが止めている姿をみて、会場全体が許容の空間になっていると感じた。最小限の言葉で、安心と許容は生み出せると感じた。

・劇団のことで気づいた点

非常に勉強熱心な方たちだと感じた。神経心理学について学んでおられ、よい効果があるから実施するのではなく、実施したことでよい効果がうまれることを実証してくというスタンスをポリシーとしておられる。自分たちの作品に自信と誇りを持っていると感じた。準備の段階や終わった後なども、思いを直接話してくださり「演劇」だけにとらわれず勉強させていただくことができた。

・児童館職員のことで気づいた点

演劇（演者）と保護者を結びつける大切な役割をされていた。泣き出してしまった赤ちゃんの保護者に対してフォローの言葉がけをしたり、全体に向けても気配りがされていた。3者一体となって空間が作られていた。

・全体を通しての感想

演劇の中で使われているボールや生き物たち、また後半に出される音のなるおもちゃを赤ちゃん達に渡すときに「どうぞ」と差し出すのではなく、赤ちゃん達が手に取りたくなるように仕向けている。赤ちゃん達の動きに合わせて作り出される（太鼓や指に付けた鈴などで）リズムや音が、動きをより活発にさせていた。参加型の演劇はまさに一緒にそのステージを作り上げているという感じがした。また途中、名前を呼ばれる（返事を強要するわけではなく歌となり、その場の音楽になる）のは大人たちが嬉しそうで、その瞬間から大人も一緒に参加しているような空気となった。小学生に向けてこのような参加型の演劇があったらまた面白いことになりそうだと感じた。

5. 保護者用アンケート結果【回収数 14】

問1 お子さんの年齢（月齢）を教えてください。

～0歳11ヶ月	9
1歳～1歳6ヶ月未満	5
1歳6ヶ月～2歳未満	0
2歳～2歳6ヶ月未満	0
2歳6ヶ月～3歳未満	0
3歳以上	0
無回答	0

問2 児童館を利用することはありますか？

ある	14
ほとんどない	0
無回答	0

問2-1 児童館を利用する頻度を教えてください。【集計条件】 問2「ある」

～月1回	2
月2回～月3回	1
月4回～月5回	6
月6回～月10回	1
月11回～月20回	4
月21回以上	0
無回答	0

問3 今回の劇の上演は、何で知りましたか？

児童館の広報	3
インターネット	1
児童館の職員から聞いた	9
知人から聞いた	1
その他	0
無 回 答	0

問3-1 児童館広報のどの媒体で知りましたか？【集計条件】 問3「児童館の広報」

たより	1
チラシ	0
ポスターの掲示	0
無 回 答	2

問4 今までに、今回一緒にいらしたお子さんと一緒に、このようなプロの劇団の舞台を観たことがありますか？（キャラクターショーは含みません）

観たことがある	0
今回が初めて	14
無 回 答	0

問4-2 それはなぜですか？【集計条件】 問4「今回が初めて」

自分の子にはまだ早いと思ったから	2
このような劇の情報がなかったから	11
泣いたり、ぐずったりすると困るから	3
演劇は難しそうと思ったから	3
退屈しそうだから	1
値段が高いから	2
そ の 他	1
無 回 答	1

その他

- ・舞台に出ていきそうだから。

問5 今回、劇の上演に参加したきっかけを教えてください。

お子さんが観たいと言ったから	0
お子さんに体験させたいと思ったから	14
ご自身が演目（内容）に興味があったから	1
児童館で観られるから	3
誘われたから	0
無料だから	1
その他	0
無回答	0

問6 上演を観覧したご感想を、保護者の方の視点で教えてください。

楽しかった	12
感動した	4
ゆったりとした気分になった	10
わくわくした	8
どきどきした	0
特にない	0
無回答	0

その他

- ・ふしぎな空間とふしぎな時間でした、とても楽しかった。
- ・0歳でも音や楽器や物に興味を持ち、集中して見ていて五感の刺激になってよかった！！

問7 上演を観ていたお子さんの反応で気づかれたことを教えてください。

- ・場所見知りがあって母のそばからなかなか離れなかったけど、興味はあるようで、じーっと見ていました。
- ・音に反応して、じーっと見ていた印象、楽しそうだった。慣れるまでに時間がかかり、ハイハイしたりしなかったのが残念。
- ・色々なものに興味をもって、とても楽しそうだった。（舞台に出ていってもよい環境がよかった）
- ・最初は見るだけでしたが、慣れてくると前に出て楽しんでいる様子で良かった。
- ・とても嬉しそうにしていたし、集中して見ていた。
- ・他の事に興味がそれでも、音がすると集中して見たり、近付いてみたいけど、不安で泣いてしまったり・・・(笑)。動いている布に大喜びしたり、とても色々な感情が見れました。
- ・笑顔で見てくれてたり、しーんとして集中して見ていたり、このような経験はたくさんさ

せてあげたいです。

- ・最初は場所見知りで母から離れようとしなかったのが、抱っこ→自分で座る→離れて気になる所へと、15分程経った頃には自由に動き回り、楽しそうでした。
- ・楽器に興味を持っていた。視覚的に色や形、動作など想像力や五感を刺激されて、心地よくおだやかな気持ちでいられたように感じた。
- ・色々なことに興味を示していて、とても良い経験になりました。
- ・音にとっても反応していて興味津々でした。
- ・動きにも反応していました。
- ・すごく真剣に色んなことを見たり聞いたり、終始集中していました。
- ・音に反応して娘が楽しそうに観ていたので、とても良かった。音の出るおもちゃも刺激があるようで楽しそうに見ていて、来て良かったです。

問8 今回の体験は、お子さんの情操を豊かにする（美しいものや心を動かす出来事にふれ、想像力を豊かに持ち、コミュニケーション力を育むなど）きっかけになると思えますか？

とてもそう思う	13
そう思う	1
少し思う	0
どちらともいえない	0
無 回 答	0

問9 児童館でプロの劇団の公演を行うメリットは何だと思えますか？

子どもが喜ぶこと	12
内容が良いこと	5
いつも子どもが来ている場所であること	5
親も気軽に来ることができる場所であること	11
子どもが多少泣いても許されること	11
無料または安く観られること	8
特にない	0
そ の 他	0
無 回 答	0

問10 (児童館上演に限らず) 劇を観る機会があったら、また観たいと思いますか？

ぜひ観たい	11
観たい	2
演目による	1
どちらともいえない	0
無 回 答	0

その他お気付きの点などがありましたら、ご自由にお書きください。

- ・楽しい時間をありがとうございました。
- ・絵本の読み聞かせは、途中で興味をなくしていたが、今日は、最後まで興味津々で、集中力が続いて驚きました。喜んだり、おどろいたり、泣いちゃったり、色々な気持ちを感じたようです。本日はありがとうございました。
- ・波の音やされいな音を聞くと、母子共に気持ちが落ち着きます。
- ・劇と言うと、少し敷居が高かったのですが、今日参加してみて、すごく素晴らしい体験になったと思うので、また機会があれば積極的に参加してみたいと思いました。
- ・いつも家にいて、初めてこのような会に参加させて頂きました。子どもがこんなに真剣に、そしてとても楽しそうに参加するとは思ってなくて、これからどんどんこのような劇に参加させてあげたいと思いました。そして、このような活動をして下さることにとっても感謝です。ありがとうございました。
- ・劇をされている方が汗をかいて一生懸命に演じておられるのを見て、さすがプロの方はすごいなと感じました。またぜひ観たいです。

6. 児童館用アンケート結果【回収数 2】

(1) 上演前、劇に何を期待されましたか。(複数回答)

設問	回答数
子ども自身の楽しみとなること	2
保護者の楽しみとなること	2
子どもと保護者の関係に変化が表れること	0
身近な場所で良質な劇にふれることができること	2
子どもの感情表現が豊かになること	1
子どもの心の安定に効果があること	0
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼすこと	1
新たな児童館プログラムの展開が期待できること	0
児童館に乳幼児と保護者の来館が増えること	2
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えること	0
地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携が期待できること	0
職員の技術向上（スキルアップ）につながること	1
職員の意識向上（モチベーション）につながること	1
特になし	0
その他の期待	0
無回答	0

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【子ども】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	0
表情が明るくなってきた	2
感情表現が豊かになってきた	2
普段の行動が活発になってきた	0
来館者同士のコミュニケーションが増えた	0
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	0
保護者が進んで意見を出すようになった	0
児童館に来館する機会が増えた	0
児童館職員に関わってくる場面が増えた	0
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	0

舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	0
無回答	0

(2) 鑑賞した子どもと保護者に、どのような変化が見られましたか。【保護者】(複数回答)

設問	回答数
鑑賞活動に満足し、次への期待を持った	2
表情が明るくなってきた	2
感情表現が豊かになってきた	1
普段の行動が活発になってきた	0
来館者同士のコミュニケーションが増えた	2
児童館のプログラムに積極的に参加するようになった	0
保護者が進んで意見を出すようになった	0
児童館に来館する機会が増えた	0
児童館職員に関わってくる場面が増えた	0
舞台芸術に興味や関心を示すようになった	0
舞台芸術に関する活動に参加するようになった	0
特に変化はなかった	0
その他	0
無回答	0

(3) 上演によって、児童館にどのような効果がありましたか。(複数回答)

設問	回答
子ども自身の楽しみが増えた	1
保護者の楽しみが増えた	2
子どもと保護者の関係に変化が表れた	0
身近な場所で良質な劇にふれることができた	2
子どもの感情表現が豊かになった	0
子どもの心の安定に効果があった	0
既存の児童館プログラムによい影響を及ぼした	0
新たな児童館プログラムの開発に資する気づきを得ることができた	2
児童館に乳幼児と保護者の来館児童が増えた	0
児童館に関心を持つ地域の来館者が増えた	0

地域のさまざまな社会資源（他施設・機関、主任児童委員等）との連携に資する気づきを得ることができた	0
職員の技術向上（スキルアップ）につながった	0
職員の意識向上（モチベーション）につながった	2
特に効果はなかった	0
その他の効果	0
無 回 答	0

（４）上演が効果的に実施されたのは、何が影響したからだと思いますか。（複数回答）

設問	回答数
児童福祉文化財推薦作品そのものの内容や質が高かったから	2
児童館が身近で気軽に参加できる施設だから	2
親と子で一緒に参加できるプログラムだったから	2
事業実施までの準備の取組みの過程が良かったから	0
事業実施にともない、児童館で関連プログラムを実施したから	0
事業実施当日のプログラム内容が良かったから	1
事業実施後の反省会の取組みがあったから	1
わからない	0
その他	1
無 回 答	0

その他

- ・児童館で日頃会っている親子さんたちでお互いに顔見知りの人が多かったから、お母さんも子どもたちも安心して参加することが出来たから。

（５）今回のような劇団上演の機会があった場合、どのように対応しますか？（単一回答）

設問	回答数
また上演してみたい	2
条件が合えばまた上演したい	0
上演しないと思う	0
どちらともいえない	0
無 回 答	0

(6) 今後、児童館では児童劇等の児童福祉文化財推薦作品を活用してどのようなプログラムが実施できそうでしょうか？

- ・乳幼児親子や幼児・小学校低学年（劇場に劇を観に行くのが難しい年代の子たち）の子たちを対象とした、劇団の劇や人形劇など生の語り、生身の人が演じるプログラムを実施したい。
- ・人形劇 幼児から小学生向け。

(6) また、どのような工夫が必要だと思いますか。

- ・日頃から人と人との関わり、コミュニケーションを大切にすること。
- ・日頃から絵本の読み聞かせや人形劇などの機会を多く持つこと。
- ・金銭的な補助が必要かと思います。
- ・金銭的補助がないと自力では難しい。幼稚園、小学校を通じてチラシを配り、多くの来館者を募る。

V. 劇団インタビュー

1. インタビューの目的

本調査研究におけるプログラムの主体は、プログラムに参加する乳幼児である。このプログラムがより効果的に実施されるためには、その主体を取り巻いてプログラムを構成する、プログラム提供者である劇団、会場となる児童館の環境、劇団と親子を繋ぐ児童館職員の存在が重要であると思われる。これらが良い形で関わり合い、それぞれの役割を果たすことで、プログラムがこどもに効果的に届くことは、これまでの多くの研究や実践が実証している。

ところで、同じ乳幼児親子を対象としてプログラムを提供・支援する児童館と劇団ではあるが、児童館は福祉分野、劇団は舞台芸術分野というそもそもの大きな違いがある。そのため、劇団が「乳幼児向けプログラムをどのような考えから提供しているのか」、「提供するためにどのような努力をしているのか」などを理解することは、親子にプログラムを提供する企画をするにあたって有効なことと考えられる。

そこで、この項では本調査研究に参加した劇団に、上演した「ぐるぐる」、「ハイハイ、ごろ〜ん。」を対象として以下の項目について聴取し、劇団の考えを理解することを目的として、インタビューを試みた。

- ・乳幼児向け作品を制作したきっかけ、作品意図
- ・児童館で上演した感想
- ・今後児童館で上演する場合に関してのご意見、ご要望
- ・その他、児童館への期待など

2. インタビューの実施方法

- ・インタビューは事務局が行った。
- ・予めインタビュー項目をメールで劇団に送信し、内容を理解した上でインタビューに臨んでもらった。
- ・オンライン会議システムで行い、1劇団概ね90分で実施した。

3. インタビューの結果（要約）

① CAN 青芸 出演者 浅野佳砂音氏

『ぐるぐる』が生まれた経緯

以前所属していた劇団で対象年齢を下げて作品を作ってみようかという議論があった。私は娘が3歳になったところで、こどもが芝居を観るということにとっても興味があり、上演したのが『三人であそぼ』という作品だ。舞台から平土間に下りると、こども達の反応がダイレクトに伝わってきて、役者としてはとてもおもしろい体験で、その空気感が私には魅力的だった。やがて30年ほど前に『三人であそぼ』で海外に招聘された際、同作品は4歳以上をターゲットにしたものだったが、海外では3歳までのこどもが観る芝居があることに驚き、その10年後に『ぐるぐる』という作品を作った。

作品の意図

それまで芝居は言語理解ができるからこそ楽しめるものだと思っていた。しかし『ぐるぐる』では、3歳児にも体験したことがあるような「泣く」「怒る」「食べる」「笑う」「寝る」といったモチーフをステージ上で見せられたら良いと思っている。ドラマとして理解することよりも、その時に出ている二人の感情と関係性が伝わると思い、おもしろさを誰かと共有してもらえそうなポイントを探りながら作品を作った。こどもは観客としては最高の客だ。嘘はつかない。ちゃんと喜んでくれるし、観たくないものは観たくないと言ってくれる。

また言葉を使わないので、感覚に訴えるものは音楽か音だということと、私たちが使っている言葉にならない「ジブリッシュ」も、観客へ伝えるための音として使っている。演じながら自分の気持ちを音に乗せることができるので、役者同士や会場とのやりとりがとてもスムーズになる。その時の気持ちを表す音ならば何でも良く、会場にいるこども達によっても変わる。言ってみれば同じ事ができない。

児童館での上演について

いつも『ぐるぐる』を演じるときは、芝居さえできれば良いのではなく、環境が重要だと思っている。空間や準備段階、天気や会場の匂い、母親の気分などが影響する芝居だと思っている、児童館もそれを大事にしてくれてありがたかった。私たちはいつも開場前に

スタンバイして、開場とともに観客を受け入れ、音や顔・衣装・匂いに慣れてもらい、親が焦らないような受け入れ体制を取りたいと考えている。

今回の 2 館はそれぞれ空間も雰囲気も違ったが、両方とも楽しい本番だった。『ぐるぐる』を児童館で上演するのは初めてだったが、児童館での日常的な繋がりがあり、そこにいるスタッフの顔を知っていることが親のリラックスに繋がり、こども達のリラックスに繋がっていたと感じた。

演じるときに大事にしていること

上演中に泣いている子がいる場合、その原因はその場でも考えるが、経験上わかるのは、私たちが安心して楽しんで芝居を続けるということが絶対的に必要であり、全体のリラックスに繋がっていくということ。ある時、公演の 30 分間ずっと泣いている子がいた。しかし、他のこども達はまるで関係なく芝居に集中していた。こども達にとって泣き声は騒音ではなく日常生活にある音。話の展開で泣き出すこどももたくさんおり、それぞれの理由はあるが、心が動いている証拠であり、しっかりと芝居を観ている、感じている結果だという確信を経験上持っている。

児童館へ期待すること

芝居の中で触れても良い人かどうかなど親の様子は意識するようにしている。公演の後に他の役者と親についての話が出ることもあり、ただ一回の劇を観に来ること以上の繋がりを求めているのではないかと感じることもある。児童館でやったからこそ初めて観に来ることができたという感想は、とても重要なことだと思う。

私の知っている児童館は来館者の年齢層がもう少し高めで、小学生くらいだったが、児童館自体が変わってきているように感じた。乳幼児を育てている親が一番孤独だと思っていて、子育てをしながらつらい思いをしている人がたくさんいると思う。そういう意味で、児童館は大事な居場所になれると思うし、児童館に行くことが楽しいというイメージを親たちの中で持てる機会があるといいと思う。

今回のような演劇を観るということが、観て終わりではなく、児童館と来館者との繋がりを作るきっかけになればと思う。良い出会いがその一度ではなく、役者との関係も含めて、スタッフや他の来館者とも顔見知りになり、リラックスして演劇を楽しんでもらえるようになるといいと思う。

② 劇団風の子九州 出演者 玉木聡美氏

「劇団風の子九州」のプロフィール

「劇団風の子」自体は東京で戦後すぐに文庫活動から始まり、こども達に人形劇等をする中で職業専門劇団として発足し、その後いろいろな地方でそれぞれ独立して活動を始めた。「劇団風の子九州」は1985年に設立されている。

乳幼児向け作品を制作するようになったきっかけ

3歳未満児を対象とした初めての作品は、1992年の『ふわふわふわり』だが、それまでも幼稚園や保育園で公演するなかで、0歳児も集中して観ている実感があった。乳幼児と親と一緒に楽しめるスタイルの作品をいくつか上演した後、生後15カ月未満児を対象とした『ハイハイ、ごろ～ん。』が生まれた。小さな年齢のこども達が、安心して安全な空間の中で、心ゆくまで自分の集中したいものに向き合える空間を作りたかった。また親が周囲に気を遣うことなく、わが子が色々なものに興味をもって楽しめるということを実感できる空間にしたいと考えた。

舞台を作るうえでのこだわり

こども達が五感で感じながら自ら探索に行きたくする空間にしたいと考えた。そのためにはこども達が安全に探索できることが重要だ。役者との距離やこども達が安心して動ける空間かどうか。そして、なるべく1列で観られるように観客数を制限すること、あるいは2列になっても、役者と観客が出来る限り同等の状況で芝居を共有できるような空間を作りたいと考えている。今回公演を行った2館は、どちらも広すぎず狭すぎず、ちょうど良い空間だった。

また「ようこそ、ここへ」という演出家や劇団の想いをこども達が受け取って、観終わってからもそれを感じながら帰ってもらうためにはどう表現すればよいかをかなり考えた。モヤッとしたものを表現して、どう受け取ってもらっても良い、ではなく、私たちはこういう風に思っている、でも感じ方は自由ですよということを責任をもって伝えるようにしている。

児童館での上演について

児童館が良いのは、親も子も慣れ親しんでいる空間で、スタッフや友人など知っている

人が多く安心できる場所である。15 カ月未満という月齢の子ども達は場に慣れる時間が必要だったり、その長さもそれぞれ異なったりする。公演の際はギリギリではなく早めに来て会場でゆっくり待ってもらえるように時間設定をしている。劇団側としても、公演前に子ども達の当日の状況がわかるという意味で事前に触れあえるのはありがたい。入場の時点から親にも声かけをすることで、親がリラックスでき、それが子どもにも伝わることで会場全体がリラックスした雰囲気になっていることは重要なポイントだと思う。親が安心することで、子どもは劇団員を「安心できる大人」と感じてくれるのだろう。

劇団主催の公演となると、窓のないホールが会場となり照明を効果的に使うために暗いことが多いが、児童館のように明るい空間で、なおかつ観客にとって親しみのある場所で公演できるのはメリットであると感じた。

科学の知識を作品へ取り入れる

脳神経のスペシャリストから 10 年ほど、脳発達と演劇の関係性についての講習で学んでいる。声のかけ方だけではなく観客の観る体勢や距離感についても医学的な根拠を学んでいる。先生からは、「科学的な根拠があって芝居を作るのではなく、子ども達から学んだことを基に芝居をすることで理にかなった作品になる。そのために必要な知識を有効活用してほしい」と言われている。

例えば、子どもにとって 1 時間もの間、座って観るには筋力が伴わず重労働になってしまう。幼稚園や保育園の先生方には、子どもたちが立ったり座ったり寝転んだりすることは、楽な体勢で芝居に集中でき、体中で楽しめていて良いことだと伝える。親にも、ごろごろしても良いし、途中で出ていっても良い、かといって無理に追い出す必要もないことを伝えている。

児童館に期待すること

児童館公演は何度か経験があったが、今回、児童館の役割が地域の中で大きいということを知ることができた。子ども達だけが利用するのではなく、子どもに関わる人達に対して開かれた空間になってきている。そのことをもっと広く発信ができると良いと思う。

芝居というのは、○と×のはっきりしたところだけではなく、その中間に色々な形を作る要素や役割がある。それは 0 歳児から作り続けていくことができるもので、そのために

たくさんの体験をしているということはとても大切なことだ。児童演劇の人間として、知識を得ることやアウトプットするときに相手に伝わる言葉に変換していく重要性を感じているので、日々現場にいる児童館職員の方々と話ができるのはとても良い体験になると思う。

VI. 委員（学識経験者）による「演目レビュー」及び「観察報告」

1. 「演目レビュー」及び「観察報告」の目的

本調査研究の「プログラム」実施状況を、こども家庭庁こども家庭審議会児童福祉文化分科会舞台芸術委員会委員を務めている本調査研究委員（学識経験者）に視察してもらうことにより、専門的・客観的な視点によるレビューと観察報告を得ることを目的とした。

2. 「演目レビュー」及び「観察報告」の実施方法

「ぐるぐる」、「ハイハイ、ごろ～ん。」の2プログラムの公表資料ならびに、実施当日の実施状況の観察により記録・作成した。

3. 「演目レビュー」及び「観察報告」

① CAN青芸 「ぐるぐる」

・演目レビュー

「ぐるぐる」は、CAN青芸が2003年7月に制作した、せりふのない、乳幼児にむけたおしぼい。（作／演出／出演 浅野佳砂音 中ムラサトコ）

劇団の案内には「おひざの上で不思議体験」と紹介されている。「子どもがはじめて出会うおしぼい」ということを意識して制作されている。現在（2024年2月）までに200ステージが行われている。

開場に入ると太鼓と、歌声（ボイスパフォーマンス）が親子を迎える。この音の中で自然と親子がリラックスしていく。舞台は客席となる青い円形のカーペットの周りをぐるぐる模様のパネルがまあるく囲んでいる。

子どもたちは回遊するのが大好きだ。その特質に着目して作品が生まれたのだろう。舞台や客席の周りをぐるぐる回りながら物語は進み、最後にはお祭りのようになる。

セリフは一切ないが、舞台上で展開されるのは、知り合い、反目し、仲間になり、ともに遊ぶと言った子どもたちにはおなじみの行動。口琴・カリンバ・太鼓などの手作り楽器と独特なボイスパフォーマンスで、たべる、わらう、ねる、なく、おこるを遊んでいく。わかりやすく、子どもたちはすぐに引き込まれていく。

円形の舞台なので、友だちの様子も同時に見られることで、劇への参加が誘われる。劇場が観客も含めて作り上げられていることを実感する作品だ。

・観察報告 川口市立戸塚児童センターあすばる実施

1 知っている場所の安心感

会場に入ると太鼓の音。そしてパパパッラとボイスパフォーマンスが聞こえてくる。入り口では、「あら〇〇さん」と児童館スタッフが声をかけている。

名前を児童館スタッフが知っている。会場となるホールの前で児童館スタッフが声をかけている。親子の様子などさり気なく気遣っている。まちの児童館ならではの風景だ。常連が多いのだろう。身近な場所で劇を見ることができ環境は素晴らしい。スタートから親子の心が開かれている。

「お母さんと子どもたちはぐるっと円になって座っている。真ん中のステージになるだろう空間を、一人のこどもが走り回っている。つられてもう一人。目が回ってゴテン。お母さんたちの優しい笑い声。突然お母さんの膝に座っていたこどもが叫ぶ。それでもニコニコ見守っているお母さんたち。

よく知っているお母さんたちだからこそその空気感だ。始まる前から楽しそうである。絶叫してしまった子どもの行動は、一般の劇場では違和感を持たれるだろう。ほかの観客からの視線を集めるかもしれない。しかしこのお母さんたちは、今までの児童館活動の中でこの子の特徴をよく理解しているのであろう。お母さんたちはニコニコと見守っている。だから絶叫してしまった子どものお母さんもくつろいで座っていることができる。様々な特性を個性として受け入れ、ともに育っていく。それがこの児童館にはある。

真ん中で回るこどもも増えてくる。ぐるぐる回る。友達が回るのを見ていて、思わず出てしまい、いいのかなとお母さんを振り返るこども。

2 導入劇へのいざない。

館長の挨拶の後、ゆっくりしたリズムで役者が入ってくる。真ん中のステージをゆっくり回りながら歩く。太鼓を叩きながらボイスパフォーマンスをしている役者（以後シンガー）の後ろからなんだろうと興味を待った赤い服を着た役者（以後レッド）がついていく。スローモーションのような動き。場内が静かになる。集中。ムックリの音。ヨンヨンヨン。

みごとな導入。一気にステージに引き付けられる。ボイスパフォーマンスが心地よい。

2003年の制作当時より更にパワーが上がっている。

3 劇への参加を楽しむ

それまでお母さんの横で寝転がっていたこども。起き上がってお母さんの後ろに隠れる。近づきたいがお母さんが止める。ヤー。

子どもは近づきたい。お母さんは劇を邪魔してしまうのではないかと、子どもを静止するが、その行為で子どもが嫌がってしまう。大人は自分が子どもだった頃の演劇鑑賞の仕方がイメージとしてあり迷惑をかけてはいけないとの行動に出してしまうのだろう。

シンガーのマネをレッドが始める。シンガーが止まり、レッドを振り向く。?!へ！大人は笑うがこどもは笑わない。真剣に見つめている。

子どもはレッドの気持ちになっているのだろうか。入れてもらえるか不安。大人との感じ方の違いがあるようだ。

やがてシンガーはだんだんスピードを上げて走り出す。レッドはそれに必死について行く。子どもたちが笑う。お母さんと顔を見合わせて笑う。

言葉は出ないが「おもしろいね～」と目と目で話している。楽しさの共有。子どもたちとお母さんの心が繋がっていく。

ぐるぐる追いかけっこ。やがてシンガーは観客席に隠れる。レッド見つけられなくて、泣き出す。寝転がってジタバタ。号泣。やがて寝てしまう。すると観客席からこどもがフラっと一人起こしに行くが、直ぐにお母さんの元へ。

劇に入り込んでつい参加してしまうが、周りの様子に気が付きお母さんのもとに。お母さん優しく受け止める。子どもたちの自由な鑑賞の仕方、表現が優しく受け止められている。

やがて様子を見ていたシンガーがレッドに近づき起こしに行く。はじめは起きないが、トコトコトコと指で歩きレッドをくすぐると笑い出す。機嫌を直し2人でトコトコトコと観客席に向かい、館長、児童館スタッフ、お母さんと頭にタッチしていく。やがて、ふにゃふにゃムニョムニョと子どもにタッチ。

役者と観客のふれあい。最初は子どもが怖がらないようにとの配慮だろう。大人とのタッチをしていく。大人たちがとても楽しそうにしているので、次に子どもたちも安心して、タッチを受け入れる。嬉しそうである。「劇の世界にもっと入ってきて」のメッセージだろう。

4 幸せの風景

レッド木の実を見つける。もぎ取り食べる。美味しい。シンガーに上げる。
客席の子どもたちに向かい、子どもたちにも実を上げる。「あーん」と口を開けて食べる子どもたち。一人ひとりに、実を食べさせてあげる。

嘘っこの世界を子どもと一緒に楽しむ。少し前にはできなかったイメージする力が育ってきたこの年代の子どもたちにとっては、とても楽しい体験だろう。

うん。ドンドンと太鼓の音。うん。ドンドン。フィナーレ。子どもたちにもタッチ。ボイスパフォーマンスが響く。美しく力強く響く声。紙吹雪。お祭りの終わり。
舞台から去っていく。紙吹雪を拾う子ども。遊びだす。舞台をぐるぐると回りだす子どもたち。4人に増えている。

まだまだ遊びたい。お祭りにいたい。お祭りが終わった高揚感に包まれ、劇は終わる。大人は一樣にふっと静かになる。でも子どもたちは遊び続けている。子どもたちにとっては、お祭りは終わらないのだ。幸せの風景である。

5 児童館の取り組み

劇公演前に児童館スタッフのお話を聞く機会を持てた。展示物や、クラブ活動などの様子からこの児童館は一つのイベントをイベントとして終わらせず日々の日常活動に繋げている試みを行っていると分かった。イベントを宝物として扱っているのだろう。このお祭りのような劇体験もまた大切にされ日々の中に染み込んでいくことであろう。それこそが地域の児童館の素晴らしさだろう。

仲間と一緒に生活のすぐ近くで劇を見て、仲間や児童館スタッフともそのことでおしゃべりできることは、子育て環境としてとても大切なことだと思う。

② 劇団風の子九州 「ハイハイ、ごろ～ん。」

・演目レビュー

「ハイハイ、ごろ～ん。」は、劇団風の子九州が8ヶ月から18ヶ月の赤ちゃんのために2018年に制作した作品である。「この時期が全てを取り込もうとする時期で、その後は自分がいろいろやりたくなる時。しっかり全部を取り込んでいくのがその時期」という神経心理学者ジャッキーE チャン（韓国・ウンソン医療財団ニューロサイエンスアートセンター院長）の指導のもとに作られた。現在までおおよそ28日41回（2024年2/5現在）上演されている。

劇場に入るとまず目につくのは真ん中に斜め半円状の小さな舞台、その上にチンアナゴのような木。その舞台の周りに、指に小さな鈴、オルゴールベルをつけた役者が2人座っている。

観客席はその周りを囲むように配置されている。観客席の後方に音響担当の役者が座っている。（この構成は初演の時から役者に合わせて変わっている）半円状にマットが置かれ、限定で20組だけの親子が座る。鈴と目で子どもたちを誘う役者。「どこでどんなふうに見てもいいですよ。とめないであげてください」とお母さんに優しく語られる。

芝居が始まるまでかなり長い時間。そこでゆっくり役者と交流。この時間も大切にされているのが、ベイビーシアターの特徴だろう。やがて流れの中で自然にお芝居が始まる。

3人の役者がものと戯れ、赤ちゃんとお母さんにノンバーバルの表現で話しかける。優しい音楽が会場を包み込む。最初は緊張してお母さんのそばを離れなかった赤ちゃんたちも、劇が進むに連れ、自由に動きまわるようになる。最後に客席いっぱいペットボトルやガチャポンで作られた楽器が広げられると、その楽器で遊びだす。

そして3人の役者の芝居は終わるのだが、劇団から「この後まだ少し遊んでいいですよ」のメッセージ。実はここから、お母さんと赤ちゃんとの劇が始まるように作られている作品なのだ。赤ちゃんとお母さんたちがそこかしこで遊びだす。これこそが、劇団の意図なのだろう。

劇団からもらった資料にはこんなことが書かれていた。「何をしたいのかわからない、自分は完璧な親ではないと思いこんでしまうストレスは、すぐに鬱と結びつきます。誰も自分のことを理解してくれない。誰も助けてくれない。この赤ちゃんは私を困らせ

るようになっていると思ってしまうのです。もっと自然体で子どもと遊ぼう」。

他愛ない遊びがとても意味のあるすてきな表現なのだとお母さんに伝えることができる作品である。

・観察報告 東郷町立兵庫児童館

小学校と隣接して建てられている東郷児童館。小学校と同時に建てられたという近代的な平屋づくりの開放感あふれる建物である。学校との間の塀はスリット状になっている。小学生たちが休み時間なのだろう「今日行くからね～」と手を振っている。

幅がとても広く日当たりのいいテラスを通り会場のホールに入っていく。このテラスは午後の子どもの遊び場としても人気の場所であるらしい。ここを通っていくだけでも、気分は高まっていく。

1 優れた導入・くつろぐ環境作り

ホールに入ると対面に白いひげの役者。鈴の音で迎え入れられる。

観客は全員着席している。

「赤ちゃんがお膝から出て歩き回ってもいいです。その時は全員で守ってください。止めるのではなく・・・」と役者が劇の説明をしている。

寝転がっている役者。

すでに舞台上に上っている赤ちゃんもいる。まん中のオブジェを見上げている。

この風の子九州「ハイハイごろ～ん」は劇場のリラックスした環境を最初にするをとても大切にしている。役者自らが寝転がったり、おしゃべりしたり、くつろいでいる姿を見せている。言葉のない作品だからこそリラックスした空間で赤ちゃんとお母さんがより五感で楽しめるように配慮されている。かなり長い時間が取られていて、赤ちゃんの中には安定してもう探索行動が始まっている子もいるが、多くの赤ちゃんはお母さんの膝の上にいる。まだお母さんたちも静かで何が始まるのか舞台を見ている。

2 劇の始まり

ライトが付き開演。役者が突然うなりだす。お母さんのお膝にいた赤ちゃんも、ハイハイしだしていた赤ちゃんも好奇心いっぱいの目で舞台を見つめる。役者が「わー」と言っ

て向こうを見る。ところが赤ちゃんたちは誰も見ない。ポポポのリレー。赤ちゃんたちはどうしたのだろうという顔で役者を見つめている。

Mちゃん舞台に向かっていく。舞台上で役者が絡まり合う。巻き込まれる。お母さんたちの笑い。児童館館長の笑顔。

赤ちゃんたちは舞台上の役者や、音響に好奇心いっぱい。しかし役者が遠くを見る演技をしてもそれには反応がない。まだイメージを共有する力は育っていないから当然である。しかし言葉の世界で生きている役者にとってそれは自分の演技が受け取られていないと感じづらいことでもある。それでも大切だと思い、演じ続けているわけだが、それはまるでどこかに「吸い取られていく」(役者談)ようにも感じるのだという。言葉の世界で生きる役者が、言葉のない世界の住人に劇を見せることの大変さがそこにある。そしてだからこそ言葉以前の表現が鮮明に浮かび上がってくる。

赤ちゃんたちの動きを見てお母さんたちの笑いが生まれてくる。

児童館の館長の笑顔がはじけている。よく知っているスタッフの笑顔が会場全体の空気を作り出している。

3 それぞれの物語

ボール登場。赤ちゃんたちが集中する。

ゴロゴロトトトン

音に興味いっぱいのR君 音響の机に登ろうとする。

地球ボール登場。T君指差し。

Kちゃんがお母さんの膝から出て舞台に向かう。不安そうなKちゃんの母。

Kちゃん舞台に上ろうとするが、登れない。どうしてなのか振り返り、自分の足が登れないことを発見。自分の足を自分の手で持ち上げようとする。

海 観客上に。びっくりする。お母さん笑顔。うじゃらうじゃら

R君、色々な子と関わりながら外側に向かう。

クラゲ登場 お母さんの表情柔らかに。いつのまにか児童館スタッフの膝にKちゃんがすわっている。

リズムが変わる。足ふみ。ドドン ザ ドドン ザ

太鼓 ドドン サ ホ ワッ

F君行きたい お母さん手を離さない。

R君の長い旅終わる。お母さんの胸に飛び込む

赤ちゃんたちの興味の対象は色々で、反応も異なる。発見の連続。自分の体も発見する。様々な物語が生まれている。

他の子どもの動きに誘われて、動き出したい子どもも見えるが、まだ自分から離れることに不安を持っているお母さんも見受けられる。

また最初は不安がっていたが、しばらく見守っているうちにそのまま大丈夫だと安心し、やがて児童館スタッフの膝でくつろぐ我が子を横目に母が舞台を楽しんでいる姿を見ることができた。

会場をたくさんの子どもと関わりながら歩いていた子どもが、最後にお母さんの胸に飛び込む姿は感動的。

4 子どもたちへのリスペクト

役者 名前を呼び歩く

ウニャラウニャラウニャラ ピッ。イモムシのような姿の人形が登場する。やがて「こんにちは」を覚える。会場を歩き回り色々なところで「こんにちは」赤ちゃんにも「こんにちは」

丁寧に赤ちゃんにも頭を下げ「こんにちは」を伝えようとする姿には、劇団の思いが溢れている。お母さんたちの笑い声が優しい。愛おしんでいる。

5 赤ちゃんたちいよいよ自由に

舞台上に上がろうとする子どもが増えてくる。カエル登場。

ピーとヘビが登場。赤ちゃんたち惹きつけられる。集まってくる。

ハピドラムの音響き出す。

ルールー 赤い布 布が広がるオレンジ 青

7人の赤ちゃん舞台上に

ボールやプラスチックケースにビーズを入れたものが客席にもたくさん転がってくる。隣の子と遊ぶお母さん。

お母さんたちの笑顔。小さな声でのお母さんたちのおしゃべり。

赤ちゃんたちの動きが盛んになってくる。

舞台の上にもいろいろな子どもが登り始めるようになってきた。

その中の一人の子どもが登り始めようとして振り返った。お母さんに許可を求めたのだろうと思っていたが、その時笑ってうなずいたお母さんは別の子のお母さんだったのだ。

いつも一緒に児童館で遊んでいる友達のお母さんだったのだろう。安心してその眼差しに押されその子は登っていった。児童館でみんな育てている姿を垣間見ることができた。

へびが登場すると大人気。へびに乗り飛び跳ねる子どももいる。子どもたちの動きが激しくなってきた頃、ちょうど場を納めるかのように小さくやさしくハピドラムの音が響きだしてくる。匠の技を感じる。赤オレンジ青の布が会場に張り巡らされ、世界がまとまってい。やがてボールやプラスチックケースにビーズを入れたものが会場いっぱいになりだすと、そこここで遊びが広がる。隣の子とも遊ぶお母さんもいる。

6 おばちゃん（おじちゃん）の大切さ

今回の児童館での公演で一番素晴らしいと感じたのは、おばちゃん存在である。自分の子どもではない子どもを慈しみ、遊び、また子どももその承認を受け入れる存在。それがおばちゃんである。そのおばちゃんが生活のすぐそばの児童館にできるということである。

霊長類研究者の山極寿一氏は「人間が他者に示す高い共感能力も、家族を超えた子供との触れ合いによって鍛えられる。そのアイデンティティと共感が失われたとき、人間は自分と近親者の利益しか考えない極めて利己的な社会を作り始めるだろう。」（毎日新聞2014年12月21日朝刊「時代の風」）と述べている。

孤立しがちな現代の子育て環境のなかで、児童館がお母さんたちの共感力を鍛える場になっているということである。

そしてこのような子どもたちが自由に動き回るようになる劇をともに見て、今までは子どもたちが絡みそうになった時は人の目を気にして止めていたが、止めなくても大丈夫なんだということを実感する。また自分と同じようにそう思っている人たちがたくさんいることを知り子育てに前向きな気持ちになっていくと思う。

すべての児童館の子育てグループで、このような作品を体験してもらいたいと思う。

・観察報告 光の園児童館

大分県別府市にある社会福祉法人別府光の園。児童養護施設や保育園、放課後児童クラブなどたくさんある光の園の施設が立ち並ぶ中、児童館がある。施設全体として、穏やかな場所である。今回は会場の都合で同団体が持つ隣のホールで行うことになった。

1 いつもと違う場所での緊張感そして仲間と出会い生み出す安心感

“Deo Gratas”と書かれたホールでの公演。静かな環境。

10時。開場時間になり3人お母さんたちが入ってくる。張り詰めた空気。抱いている子どもに「大丈夫みんないるよ」と話している。子どもを膝に下ろすと泣いてしまう。
舞台上に座りニコニコと見守っていた役者A「今子どもたちは皆さんのお膝に座っているけど、どんどん歩いて行っても大丈夫ですよ。心配ならついていってもいいです。」とのんびりしゃべりだす。
するとさっきまで泣いていたJ君。泣き止み早速ハイハイで私のところまでやってくる。

いつもと違う静かな会場にお母さんも少し緊張しているのだろう。大丈夫と自分に言っているように感じる。そんな緊張を解くよう役者が、世間話をするように劇体験の仕方を話す。お母さんの緊張がほぐれたことを感じたのか、子どももハイハイを始める。

次々にお母さんたちがやってくる。「おはようございます」の声が飛び交う。
「今日ね・・・」「7時すぎにご飯を食べてたらね」とお母さんたちのおしゃべりがにぎやかになってくる。ほぼ全員が知り合いという状況なのだろう。
I君がJ君のお母さんに抱きつく。手をふりあうお母さんたち。
10時30分。劇が始まる。

場所が違って、すっかりいつもの乳児グループの場所になってきた。世間話がそこに広がる。最適な環境でスタートを迎える。

2 子どもの表現を愛おしむ

ハイハイで歩き回る子が増える。少しハイハイして、急に泣き出す子。すると気がついたように舞台の上までハイハイしていた子が泣き出す。しばらくして最初の子が泣き止む。しかし今度はお母さんの膝の上にいる子が泣き出す。みんな泣き止んだと思うと、また一人が泣き出し、またそれに誘われ誰かが泣き出す。

「面白いね」と一人のお母さんが言うと、「面白いね」と言いながら笑い合う。

赤ちゃんの泣き声が連鎖することを面白く思うお母さんたち。泣くことで子どもたちが繋がっているを感じている。そして笑いあうことで、お母さんたちのつながりも確認しあう。

役者が舞台をトントンとたたき、「お！」と一言。トントンお！と様々なところを叩き出す。

始まりから泣き通しだったAちゃん、泣き止む。

音響の役者が鈴を持ってみんなの前を歩く。

Aちゃんの前で、顔に手を当てると、またAちゃん泣き出す。慌てる役者。

それを見てお母さんたち優しく笑う。

ボールが出てくる。子どもたちは夢中。ついていく。集まってくる。「かわいいよね」

「かわいい」とお母さんたちの声。

Sちゃん笑い出す。

大きなボール登場。舞台に3人子どもが登る。

R君地球ボール好き。大きなボールに向かう。I君R君についていく。

I君R君を引っ張る。I君母心配になり、Iくんを止めに行こうとする。隣のお母さんに「大丈夫」と止められる。わかっているのだ。

急に舞台の雰囲気が変わり集中する子どもたち。ボールはこの年代の子どもたちにとって一番興味があるものかもしれない。触ると動き、勝手に転がる。生き物のようだ。この後、劇の間中ボールにこだわり続ける子どももいる。

そんな子どもたちの姿が愛おしいお母さんたち。迷惑をかけるのではないかと思う場面でも「大丈夫」と止められ、子どもの世界としてみんなで大切にしようと思っている事が伝わってくる。

3 役者の演技での子どもの反応に心を動かされる

波の音とする透明な箱、子どもたちの上に。先程から泣き続けている A ちゃん、箱が来ると泣き止み下からじっと見つめている。中のビーズがキラキラ光りきれい。通り過ぎるとまた泣いてしまう。
クラゲ登場。触ってにっこり。手をたたく R 君。M ちゃん笑う。R 君手拍子。
名前呼び歩き。M ちゃん笑う。
ウニャラウニャラ。「こんにちは」を習う。
子どもたちやお母さんに「こんにちは」を言って回る。
お母さんたち子どもの反応に笑う。
I 君お母さんのところに飛び込む。そしてニコニコ。
O ちゃん、急にハイスピードハイハイ。笑う。ここちよくゴロン。
「劇はこれで終わりですが、まだ遊んでいっていいですよ」と役者。
そこここに遊びが広がる。パピドラムの音が心地よい。

ビーズの入ったきらきらする美しい箱を見せられ思わず見とれてしまう A ちゃん。しかし通り過ぎると泣いてしまう。そのことを A ちゃんのお母さんだけでなく、お母さんたちが見ている。「あああ、また泣いちゃった」とほほえましく見ている。私たちの子どもたちであることが感じられる。

通常の劇であれば、役者の演技を見て心を動かされるのだが、お母さんはこの劇では子どもたちの反応を喜び、心動かされている。お母さんたちは役者の演技での子どもたちの反応が嬉しく、笑い合う。幸せな空間が広がっている。

その幸せを味わうように、終演後遊びが広がっていく。

4 心をいやす子育て仲間とおしゃべり

やがて、帰りだすお母さんたち。A 母が立ち上がる。A 母のもとに集まってくる母たち。
「すみませんうるさくして」と A 母が言うと、「全然」「全然」と口々に。「さっき寝た」「少し寝た」「さっき、(泣くの) 連動していたね」と言って笑いあう。おしゃべりしながら帰っていく。

劇場で親子だけで観劇していた場合、劇の間中泣いていた我が子が他の人に迷惑をかけていたと母親は感じる。そしてそんな視線も感じてしまう。しかし、たくさんの友だちに

囲まれ、泣き声が連動していたことを愛おしむ友だちの言葉に癒やされる。友だちが自分の子どもを愛おしんでくれることを感じ、絆が深まっていく。児童館の仲良しグループがあったからこそその体験だと思う。

劇が終われば役者たちは帰っていく。しかし同じ劇を体験した仲間は明日からもここにいる。

共有して創りだした、子どもたちの表現をいつくしむ空間はこれからもここにある。だからこそ地域の児童館でやる意義があるのだと私は思う。

VII. 特別寄稿

小林由利子氏 明治学院大学 心理学部教育発達学科 教授

委員の提案から、乳幼児を対象とした演劇プログラムの世界の状況に造詣の深い、明治学院大学心理学部教授の小林由利子氏に「児童館における乳幼児のための演劇鑑賞について」と遊びプログラムの意義について」をテーマにご寄稿いただくことになった。

以下は、その寄稿文である。

児童館における乳幼児のための演劇鑑賞と遊びプログラムの意義 －海外の乳幼児のための演劇の検討を通して－

小林由利子（明治学院大学）

1. はじめに

児童館は、18歳未満の子どもが自由に利用することができ、専門の職員（児童厚生員）を配置して、地域における遊びの援助と子育て支援を行い、遊びを通じた子どもの健全育成のための活動を行っている児童福祉施設です。子どもの演劇鑑賞と遊びは、密接な関係にあります。なぜなら、演劇のルーツは、子どもの「遊び（特に劇的遊び／ごっこ遊び）」と言われているからです。ここから、乳幼児が演劇鑑賞をして、鑑賞後に遊びプログラムを体験することは、子どもの遊びをより豊かにしたり、より広げたり、より深めたりするのではないかと考えます。

したがって、一般財団法人児童健全育成推進財団による『児童館における乳幼児親子を対象とした遊びのプログラムに関する調査研究』は、親子の演劇鑑賞と遊びプログラムの体験が、乳幼児の健全育成にとっても保護者のための子育て支援にとっても必要不可欠であることを証明するための重要な調査研究です。

そこで本論において、イタリアとフランスとスウェーデンにおける乳幼児のための演劇（theatre for early years）ⁱの検討を通して、乳幼児のための演劇の意義と演劇鑑賞と鑑賞直後の遊びプログラムを実施することの意義について明らかにしていきたいと思います。

2. ヨーロッパの乳幼児のための演劇の中心的存在であるボローニャのラ・バラッカ劇団

世界的な視点から考えて、長年にわたり乳幼児のための演劇の普及と発展に尽力してきたのは、ボローニャのラ・バラッカ劇団であるといえるでしょう。特に、この劇団の創立者の一人であり、俳優／演出家でもあるロベルト・フラベッティ (Roberto Frabetti) の存在は非常に大

きいです。

(1) ラ・バラッカ劇団の理念と実践：「チルドレンズ・ファースト」

ラ・バラッカ劇団は、1976年にフラベッティと3人の大学生により人形劇団として創立されました。人形劇団から児童青少年を対象にした演劇劇団になり、劇団員がフランスのグルノーブルにある乳児のための文化施設訪問をきっかけに乳幼児のための演劇を中心とした劇団に発展していきました(下山あさき, 2011)。1987年に最初の乳幼児のための演劇作品『みず』を制作し、ボローニャ市内の5つの保育所で上演しました(下山, 2011)。それ以後、ラ・バラッカ劇団は、ボローニャ市と市内の幼児教育・保育施設と連携しながら、毎年巡回公演を実施し、今日に至っています。同時に、ウィーク・デーにラ・バラッカ劇団の本拠地であるテストーニ劇場に幼稚園・保育所の乳幼児が観劇にやってきます。週末には、家族で劇場に来ます。ボローニャ市内の子どもたちは、乳幼児期から劇場に来る経験を重ねているので、家庭と幼稚園・保育所と同様な居場所になっていると思います。乳幼児にとってそのような場所になるためにラ・バラッカ劇団は、「チルドレンズ・ファースト」の考えを劇団員に徹底し、観客にも伝えています。たとえば、子どもたちが劇場前の道路の向かい側にやってくると、劇団員が猛ダッシュで出迎えに行きます。そして、彼らが劇場に入ってくると別の劇団員が、大人の観客に「子どもたちのために道を空けてください」と大声で伝え、まさにレッド・カーペットのような道がパーと出来上がり、子どもたちがホールの真ん中を歩いて、一番先に劇場に入っていきます。このような体験を通して、子どもたちに「あなたたちは大人から尊重されています」、「劇場における重要な存在です」ということを繰り返し伝えています。大人の観客には、社会で軽視されがちな乳幼児がいかに大切な存在であるか、この劇場は「チルドレンズ・ファースト」であることを伝えています。(図1：劇場へ入る)



図1:劇場へ入る 提供：ラ・バラッカ劇団

たから！」と応えました。こういうやり方でフェスティバルに参加している大人たちに「チル

ない雪の日の思い出があります。わたしが劇場の中で外を見ていると、保育者に連れられて幼児たちが、横断歩道を渡ろうとしていました。そのときフラベッティは、雪の降りしきる中を傘もささずに子どもたちに駆け寄り、劇場までの道案内をしていました。わたしは、彼のその姿に感動して、カフェで彼と話しながらそのことを伝えると、彼はウィンクしながら「ユリが見ているの知ってたから！」と応えました。こういうやり方でフェスティバルに参加している大人たちに「チル

ドレンズ・ファースト」を伝えているのか、とさらに感服しました。フラベッティに限らず、全てのラ・バラッカ劇団のメンバーが、「チルドレンズ・ファースト」を自然に実践していました。ラ・バラッカ劇団の理念と実践は、こども家庭庁のスローガンである「こどもまんなか」につながっていると思います。

さらに、ラ・バラッカ劇団は、乳幼児が泣き出し劇場外に出ようとする保護者へのサポートを行い、入場券代を払い戻しています。そうすることで、保護者は安心して乳幼児と観劇でき、乳幼児が親になると劇場に子どもと一緒に観劇に来る、という循環が生まれています。乳幼児にとって、劇場に来て演劇作品を観劇し、さまざまなプログラムに参加することは、日常の一部であり、自然なことになっています。



図2：俳優と幼児とのやりとり 提供：ラ・バラッカ劇団

乳幼児の鑑賞する姿を観察して、乳幼児が観客として慣れている、という印象を強く受けました。なんと子どもたちは、作品が面白くなければブーイングもします。

ラ・バラッカ劇団は、上演作品において観客としての乳幼児との特別な関係を大切にしています。（図2：俳優と幼児とのやりとり）フラベッティは、観客としての幼児と話したり、



図3：フラベッティと幼児との会話 提供：ラ・バラッカ劇団

人形遣いとして登場人物になったり、ストーリーテラーになったり、自由自在に現実世界と想像世界を行き来します。（図3：フラベッティと幼児との会話）多くの乳幼児のための演劇は、言葉を使わない作品が多いのですが、フラベッティの作品には、ふんだんに言葉が使われています。なぜなら彼は、「子どもたちは、言葉を聞きたがっている」と経験と最新研究からそのことを知っているからです。彼は、「バベルー乳幼児のための演劇における聞くというアート（BABEL－The Art of Listening in Theatre for Young Audience）」のプロジェクト代表として、乳幼児にとっていかに言語が重要であるかを明らかにするためのプロジェクトを遂行しています。

(2) ラ・バラッカ劇団と「スモール・サイズ」プロジェクト

ラ・バラッカ劇団とフラベッティの乳幼児のための演劇についての注目すべきことは、さまざまな助成金に申請し、いろいろなところから寄付を募っていることです。

ラ・バラッカ劇団は、助成金を得て 2004 年に第 1 回「乳幼児のための演劇と文化の国際フェスティバルー未来のヴィジョン、演劇のヴィジョン・・・」を開催しました。さらに 2005 年に EU から助成金を得て 4 劇団／芸術組織による「ネットワーク・スモール・サイズ」という 1 年間のプロジェクトが始まりました。この申請書を書き、応募し、プロジェクト代表をしていたのがフラベッティでした。その後、長期にわたり継続されていく「スモール・サイズ」の最初プロジェクトでした。「ネットワーク・スモール・サイズ」の目的は、「協議会とショーケースを開催すること、研修を実施すること、リサーチを記録し普及させること、0 歳から 6 歳を対象にした演劇作品の共同制作をすること」(小林, 2015, p.18)でした。フラベッティは、ヨーロッパ内の劇団等が集まり、調査研究をして、お互いに研修を通して研鑽し、乳幼児のための演劇作品を共同で制作していこうと考えていたと思います。ラ・バラッカ劇団とフラベッティは、一つの劇団だけが助成金を得て発展していくのではなく、数か国の劇団が協働して、乳幼児のための演劇の質を上げながら、社会に普及させていこうとしています。これは、ラ・バラッカ劇団が、「協同組合」により運営されていることと深くかかわっていると思います。そして、2005 年の間にドイツとイタリアとルーマニアの劇団がプロジェクトに参加しました。ここからも明らかなように 2000 年代になると乳幼児のための演劇に対する関心が、ヨーロッパを中心に高まっています。これが、2005 年から現在まで継続している「スモール・サイズ」プロジェクトのはじまりです。

2006 年に「ネットワーク・スモール・サイズ」は、EU からの助成を得て「スモール・サイズ、ネット」という 3 年間のプロジェクトに発展しました。このプロジェクトの目的は、「ヨーロッパ内外のネットワークの構築、マルチ・メディアによる記録、共同制作の推進、専門家の訓練、専門知識と技術と実践の交換」(小林, 2015, p.18)でした。そして、フィンランド、アイルランド、オーストリア、ハンガリー、フランスの 5 つの劇団／芸術組織がプロジェクトに加わりました。

2009 年から 5 年間の「スモール・サイズ、ビック・シチズン」というプロジェクトがはじまりました。このプロジェクトからヨーロッパ内だけでなく、世界的に乳幼児のための演劇が普及していきました。プロジェクト名の乳幼児を「ビック・シチズン」と呼んでいることから明らかなように、フラベッティらは、乳幼児を重要な市民として位置づけています。「スモール・サイズ」プロジェクトは、これまで乳幼児が観客として芸術を楽しむ権利に強調していました(小林, 2015, p.19)。これをさらに進めて乳幼児が「芸術家と共に創造過程を共有する楽しみを経験できる」(小林, 2015, p.19)ように発展させました。そして、この経験により乳幼児は、「『感情的知性』を培い、感性と自己の有用さを調和させられる」(小林, 2015, p.19)ことを

明らかにするためにプロジェクトを推進しました。この考えは、「子どもの権利条約」第31条をまさに体現していると思います。

2014年に「スモール・サイズ」プロジェクトは、世界的な乳幼児のための演劇ネットワークとして「スモール・サイズ協会」をプロジェクトとは別に新たな国際的組織として創設し、活動の場を広げていっています(小林, 2015, p.19)。

2014年に新たに5年間の「スモール・サイズ、乳幼児のための舞台芸術」プロジェクトについてEUから助成金を得て、2004年に始まった「乳幼児のための演劇と文化国際フェスティバルー未来のヴィジョン、演劇のヴィジョン・・・」を継続して開催することができました。2019年は、第14回目のフェスティバルになり、世界中から400名以上の参加がありました。多くのフェスティバルは、規模が拡大し、マンネリ化し、衰退してく場合が多いのですが、フェスティバルの芸術監督であるフラベッティは、次の一手を考えていました。

(3) 「スモール・サイズ」プロジェクトから「マッピング」プロジェクトへ

2019年にフラベッティは、EUから大規模な助成金を得て5年間の新たなプロジェクト「マッピング」を立ち上げました。2019年の第15回「乳幼児のための演劇と文化国際フェスティバルー未来のヴィジョン、演劇のヴィジョン」を「マッピング」プロジェクトの最初のフェスティバルと位置づけました。

「マッピング」プロジェクトの主目的は、乳幼児のための舞台芸術の美的体験についての「マップ」を構築することであり、乳幼児のための「美的体験」を探求するための優れた実践と有効なアプローチを探求することです(小林, 2021, p.53)。ここでいう「マップ」とは、フラベッティによればダイナミックな場所、たくさんの「問い」を意味するということです(小林, 2021, p.53)。この「問い」とは、「問い」が次の「問い」を生み出していくことを意味しています(小林, 2021, p.53)。つまり、乳幼児の舞台芸術の「美的体験」に関する「問い」を探求することです。他方、「マッピング」に参加している人たちが、活発に議論しながら、未知なことが多い乳幼児の舞台芸術における「美的体験」を解明していくことです。フラベッティによれば「美的体験」とは、さまざまな感覚によって影響される知覚のことです(小林, 2021, p.53)。フラベッティによれば、「子どもと知覚の関係性を示せるとき、われわれは経験に基づく感覚を再評価できる」(小林, 2021, p.53)ということです。つまり、乳幼児に質の高い「美的体験」を舞台芸術体験において乳幼児に提供するためには、どうしたらいいか、ということです。2023年10月20-29日に開催された第20回「乳幼児のための演劇と文化国際フェスティバルー未来のヴィジョン、演劇のヴィジョン」が「マッピング」プロジェクトの総括になりました。ラ・バラッカ劇団と世界から選ばれた17の国際パートナーが、フェスティバルに集結し、5年間の「マッピング」プロジェクトの国際的活動とリサーチについて討議し、報告書を作成し、プロジェクトを終えました。

「マッピング」プロジェクトは、舞台芸術にかかわるアーティストだけでなく、この分野を調査研究している研究者との共同プロジェクトであることが、新たな挑戦になっています。韓国国立芸術大学演劇学部は、このプロジェクトのメンバーですが、日本の大学は選ばれませんでした。このことから日本の大学における乳幼児のための演劇を研究するセンターのような組織が必要と改めて思いました。2022年に一般社団法人日本ベビーシアターネットワークが創立されたことは朗報と思います。ぜひ、この組織が乳幼児のための演劇について先進的な取り組みをしているスウェーデン、デンマーク、フランス、イタリア、ドイツなどとの交流を深め、乳幼児のための質の高い舞台芸術作品を制作していくことを願います。

そして、2023年にフラベッティは、新たな3年間のプロジェクト「バベルー乳幼児のための演劇における聞くというアート (BABEL-The Art of Listening in Theatre for Young Audience)」を開始しました。フラベッティは、2005年から切れ目なくEUから大規模な助

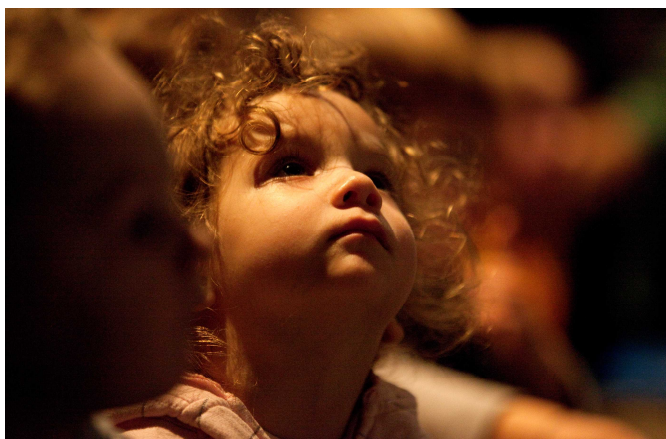


図4：鑑賞している幼児 提供：ラ・バラッカ劇団

成金を獲得して、乳幼児のための演劇から舞台芸術全般に広げていき、演劇にかかわるアーティストだけでなく研究者や行政関係者を含みこみ、イタリアからEUそして世界へ乳幼児という市民の存在の重要性を伝え続けています。彼は、インタビューで「ずっと子どもと一緒に仕事がしたいと思っていたんだ」と話していました。そのことをずっと継続して、自分だけではなく、劇団だけ

ではなく、乳幼児について関心があり、乳幼児を社会のまんなかに据えていこうと人たちと一緒に、乳幼児たちも一緒に、乳幼児期にアート体験をする重要性について活動し続けています。(図4：鑑賞している幼児)

3. フランスにおける乳幼児のための演劇

フランスにおける乳幼児のための演劇の中心人物は、アニエス・デフォス(Agnes Desfosses)という俳優、演出家、写真家です。1980年から演劇にかかわり、1990年に劇団ACTA(Association de Creation Theatrale et Audiovisuelle)を創設し、さまざまなジャンルの芸術家を共同し、舞台芸術作品を演出してきました(星三和子, 2015, p.68)。デフォスは、1994年に生後6カ月から4歳のための多様な芸術言語(歌、音楽、ダンス、演技、人形劇、アクロバットなど)を使った舞台芸術作品を上演し、乳幼児が集中して作品を観ている姿を目の当たりにしました(星, 2015, p.69)。このことがきっかけとなり、デフォスと劇団ACTAは、2002

年から隔年で「はじめての出会い：乳幼児期・アート・生のスペクタクル、ヴァルドワーズヨーロッパ ビエンナーレ」というフェスティバルをパリ郊外のヴァリエール・ベル市で芸術家と保育者と研究者と市の文化局・乳幼児局と一緒に開催してきました(星, 2015, p.68)。革新的なデフォスの作品を乳幼児は、楽しむことができるのだろうか、と懐疑的な保育者もいましたが、フェスティバルを重ね、同時に開催されたフォーラム等での討論を通して、乳幼児という観客が質の高い芸術作品を感性で受け止めていることを理解するようになっていったということです(星, 2015, p.69)。つまり、乳幼児が芸術を理解できるのか、できないか、ということではなく、彼らは彼らのやり方で芸術を感受しているということである。いいかえれば、乳幼児から大人の芸術と同じ質の高い芸術作品を観ることができるし、観る権利があるということです。さらにいえば、乳幼児だけでなく、保護者も保育者も「子どもの美的体験の傍観者ではなく、自身も美的経験をjする」(小笠原文, 2015, p.73)ということが重要です。つまり、質の高い乳幼児のための演劇鑑賞を通して、乳幼児も大人も美的体験を重ねていくことが必要です。

乳幼児のための舞台芸術フェスティバルの開催には公的な財政援助が必要であるので、政府と地方自治体は「芸術と文化が子ども発達と社会の発達にとって重要な役割を果たす」(星, 2015, p.70)ということをも十分に理解し、助成を継続していくことが必要不可欠です。

4. スウェーデンの『ベビードラマ(babydrama)』という乳児のための演劇作品の演出家スザンヌ・オスティンの存在

(1) スザンヌ・オスティン(Suzanne Osten)とウンガ・クララ劇団

オスティンは、スウェーデンをはじめ世界的に乳幼児のための演劇に影響を与えた重要人物です。オスティンは、子どものための演劇と大人のための演劇の演出家だけでなく、映画監督・脚本家として、スウェーデンのみならずヨーロッパで長年活躍し、乳幼児・児童・青少年演劇の先駆者として尊敬されています。

オスティンは、1967年に独立演劇グループとしてポケット・シアターを創設しました。それまでの児童・青少年演劇は、有名な昔話などを劇化し、公立劇場で主にクリスマス時期に上演されていました。しかし、1960年代になると学生運動やフェミニズム運動の影響を受けて、公立劇場附属劇団に対して、社会的・文化的なメッセージを持つ小規模な独立劇団が多く創設されました(Rebecca Brinch, 2019, p.45)。その代表的な劇団の一つが、オスティンらが創設したポケット・シアターでした。その後、オスティンは1975年にストックホルム市立劇場附属の児童青少年演劇劇団であるウンガ・クララ劇団を創設し、2014年まで芸術監督として活躍しました。また、1995年から2009年までストックホルム芸術大学で舞台マネージメントの教授を務め、子どもだけでなく、大人を対象にした演劇の演出もしました。ウンガ・クララ劇団は、ストックホルム市立劇場を離れた後は、独立劇団として活動を継続しています(Karin Helander, 2013, p.6)。

ウング・クララ劇団のコンセプトは、「観客とより密接な関係を築く」(Brinch, 2019, p.49)こと、「『子どもの目線』で演劇」(Brinch, 2019, p.49)をつくることです。いいかえれば、政治的にも経済的にも権力を持たない弱者である子どもの立場から物事考えることです。オスティンは、母親が統合失調症であったこともあり、厳しい子ども時代を経験しているため、「子どもの目線」を重視していると考えます。オスティンは、子どもたちが抱えている社会問題、たとえば拒食症、離婚、心的な病、ヤングケアラーなどを取り上げて作品をつくってきました。同時に、子どもたちが質の高い芸術的経験をすることを重視しています。

(2) オスティンの幼児のための演劇作品

オスティンの乳幼児のための最初の演劇作品は、1976年の3歳以上を対象にした『スナーク狩り』です。この作品は、幼児の言葉で構成されたルイス・キャロル(Lewis Carroll)のテキストの翻案でした(Brinch, 2019, p.49)。この作品は、社会で大きく取り上げられ、幼児が何を理解できるか、という議論を巻き起こしました(Brinch, 2019, p.49)。フランスでも日本でも同様な議論があり、乳幼児のための演劇において、この理解できるか、できないかは、当時から現在にいたるまで大きな問題になっています。オスティンは、1989年に「子どもの権利条約」が国連で採択される前から、乳幼児の「芸術と文化への権利の問題と関わっており、また、子どもたちの社会参加の考え方に関わって」(Brinch, 2019, p.47)いました。オスティンが主張してきたように、この乳幼児が理解できるか、できないかという議論以前に、わたしたちは、「子どもの権利条約」の第31条を基盤にして、乳幼児が「芸術に自由に参加する権利」を認め、乳幼児が「文化的及び芸術的な性格に十分に参加する権利を尊重しかつ促進する」ことを主張し続ける必要があります。つまり、乳幼児が演劇鑑賞し、演劇に参加することは、彼らの当然の権利なのです。

次にオスティンは、対象年齢を2歳児以上に下げて『ドルフィン』(1992年初演)を上演しました(Nordenfalks, 2005, p.5)。作品のテーマは、突然に弟あるいは妹ができるという子どもの不安に着目し、幼児自身による内的な自我の理解でした。オスティンは、この作品の制作過程と上演時の観客としての幼児を観察することを通して、幼児にも複雑な感情を感じ取り、受容する能力があることを発見したと考えます(Brinch, 2019, p.48)。さらにオスティンは、これらの経験から、芸術としての「演劇の出会いに年齢制限があるのか？」という問いを持ちました。いいかえれば、何歳から観客として可能であるか、という問いです。

これは、先述したように児童演劇で長年議論されてきた乳幼児に演劇作品を理解できるか、できないか、という「理解の概念」に結びついています(Brinch, 2019, p.52)。乳幼児は、大人が言語により演劇作品を理解するのとは異なる、彼らの感覚を通じた理解の仕方があるのではないか、ということです(Brinch, 2019, p.52)。先述したフランスのデフォスも指摘したように乳幼児のやり方で芸術を感受していることを指摘しました。オスティンやデフォスのように実

際に乳幼児のための演劇作品を制作し上演して、乳幼児という観客を観察しているので、乳幼児独自の理解の仕方を確信しているといえる。実際、乳幼児が演劇を鑑賞している様子を観察すれば、そのことを実感できます。わたし自身、実際に観察するまでは信じられませんでした。しかし、乳児が演劇作品を凝視し、目の前で展開されていることを集中して観ている様子を観察して、乳児の方が、2歳児や3歳児よりむしろ集中して演劇作品を観ているのではないかと考えるようになりました。

(3) 乳児のための演劇『ベビードラマ(babydrama)』という作品

オスティンは、先述した「演劇の出会いに年齢制限があるのか？」という問いを解明するために乳児のための演劇作品『ベビードラマ』を創作することになりました。2006年1月に『ベビードラマ』は、ストックホルムで初演されました。この作品は、芸術教育プロジェクトでした。2007年から2007年までの2年間で、『ベビードラマ』についてのリサーチ／リハーサルに費やされ、その全過程と上演が記録され、『ベビードラマ―芸術研究レポート』として出版され、記録映画も制作されました(Brinch, 2019, p.51)。つまり、『ベビードラマ』は、リサーチと演劇作品制作過程と上演が一体化し、融合したプロジェクトであると同時に『ベビードラマ』という作品名でした。このような長期プロジェクトに助成するスウェーデンだからこそ、乳幼児についての新たな知見を世界に示し、世界の乳幼児のための演劇についての認識を変革できたといえる。

『ベビードラマ』において、観客として考えられたのは、生後6カ月から12カ月の乳児と



©Photo Lesley Leslie-Spinks, Stockholms Stadsteater

図5：赤い舞台

保護者を合わせて12～15名でした。テーマは、「この世に生を受けるといふこと」(Brinch, 2019, p.48)でした。この作品は、俳優5名で、かれらは登場人物を演じるだけでなく、楽器の生演奏もしました。『ベビードラマ』は、テキスト・ベースで書かれた脚本を使用しました。舞台は円形で、舞台の基調色として赤、黒、白が使われました。(写真：『ベビードラマ』の舞台) 真っ赤なカーテンと赤い床と天井から垂れ下がった紐

は、子宮内部を想像させました。そして、舞台と観客との間に仕切りはありませんでした。

(図5：赤い舞台)

『ベビードラマ』は、劇場の中で始まるのではなく、乳児と保護者が入場を待っているロビーから始まりました。俳優は、一人ひとりの乳児の傍に行き、話をしたり、名前を聞いて呼んだり、遊んだりしていました。これは、オスティンの「観客としての乳幼児よりよく交流するためのコミュニケーション・ストラテジーを見つけようとする」(Brinch, 2019, p.48)試みと考えられています。同時に俳優が乳児にこれから演劇が始まりますが、「フィクションを受け入



©Photo Lesley Leslie-Spinks, Stockholms Stadsteater

図6：演劇作品に貢献する乳児

れませんか」という契約を交わすことでもあります(Brinch, 2019, p.51)。これは、乳児が自ら芸術に参加することにつながり、保護者に対して乳児と一緒にフィクションの世界を共有していきましょう、というメッセージにもなっています(Brinch, 2019, pp.51-52)。さらに、乳児と保護者をフィクションの世界にいざなう導入部分にもなっています。(図6：演劇作品に貢献する乳児)

図6で示されているように、『ベビードラマ』において、乳児が興味を持つと舞台に入ってきて、俳優とコミュニケーションすることが保障されていました。最初、俳優たちは、乳児が作品を観るか懐疑的であり、即興的に乳児に対応することを恐れていたということです。しかし、俳優たちは、徐々に舞台に入ってきた乳児との関わりを楽しむようになり、乳児という観客の素晴らしさを実感していった、ということです。オスティンは、図6の場面について、乳児が自ら選択して、舞台に上がり、俳優と一緒に芸術活動に参加して、作品がよりよくなるために貢献している捉えています。つまり、乳児が演劇に参加することで、演劇作品の質がよくなる、ということです。

5. 日本の乳幼児のための演劇の現状と課題

日本の乳児のための作品において、乳児が舞台上がってくることをオスティンのように作品への貢献と考えている劇団は少ないのではないかと思います。たとえば、乳児が、楽器に触ろうとすると楽器を後ろに下げて、乳児が触れないようにしたり、舞台上がろうとする乳児を保護者が席に引き戻したり、舞台上に段差があり上がろうとしても乳児が上がれなかったりしているのを見過ごしていたりすることがあります。「子どもの権利条約」を基盤にしたオスティンの『ベビードラマ』のレベルに至るには、課題がまだまだあるといわざるを得ません。他方、多くの劇団が、乳幼児のための演劇に関心を示し、作品を制作・上演していることは朗報

です。

乳幼児のための演劇は、観客の人数が限られ、特別な俳優の訓練も必要です。さらに入場者数に 10～15 組の親子といった制限もあるので、チケット収入を十分に得ることはできません。したがって、公演をすればするほど赤字になってしまう現実があります。

スウェーデンの『ベビードラマ』プロジェクトのような劇団と専門家（心理学者、医者、看護師、保育者、官僚等）との協働とそれを支える助成金と公演を継続するための支援が必要です。乳幼児が、質の高い芸術体験を重ねることにより、日常の乳幼児の遊びが豊かになり、健全な育成を促し、生涯にわたり芸術を感受し、芸術に参加することにつながっていると思います。労働経済学者のジェームズ・ヘックマン(James J. Heckman)は、乳幼児期の教育の重要性について次のように述べています。

幼少期の教育を上手に実行することは、大きな利益をもたらす可能性がある。ではもっと後になってからの介入はどうだろうか？じつのところ、子どもが成人後に成功するかどうかは幼少期の介入の質に大きく影響される。スキルがスキルをもたらし、能力が将来の能力を育てるのだ。幼少期に認知力や社会性や情動の各方面の能力を幅広く身につけることは、その後の学習をより効率的にし、それによって学習することがより簡単になり、継続しやすくなる。

(Heckman, 2015, p.34)

児童館における乳幼児期からの演劇鑑賞体験と遊びプログラムの体験は、ヘックマンが指摘している「幼少期に認知力や社会性や情動」の育成に密接にかかわっているのではないのでしょうか。演劇鑑賞は、乳幼児の認知力を総動員させる体験であり、演劇鑑賞も遊びプログラムもグループ体験であるので社会性が深くかかわっています。演劇鑑賞も遊びプログラムも乳幼児の情動に深く働きかけます。乳幼児期に質の高い演劇を鑑賞し、その体験を基盤に実際に遊びプログラムを通して表現する体験は、認知力・社会性・情動の育成になり、生涯学び続けていくことにつながると考えます。

6. おわりに

イタリアのラ・バラッカ劇団とフラベッティ、フランスの劇団 ACTA とデフォス、スウェーデンのウング・クララ劇団とオスティンの事例から、「子どもの権利条約」を基盤にして、政策・法律を設定し、政府・地方自治体が助成金を給付し、各自治体と劇団と幼児教育・保育施設と保育者と保護者が協働して、乳幼児が質の高い演劇作品を鑑賞し、鑑賞したことを表現

につなげて芸術活動に参加できる機会を保障しなければならないと思います。その実現のためにこども家庭庁の役割は、非常に大きいと思います。

引用・参考文献

浅野泰昌・太田昭・大沢愛・中島研他(2024) 特集ベイベーシアター！ 児童・青少年演劇ジャーナル げき、27号、pp.6-37.

浅野泰昌(2024) 児演協ベイベーシアタープロジェクトの取り組み 2015-2021 児童・青少年演劇ジャーナル げき、27号、pp.14-15.

浅野泰昌(2024) 日本のベイベーシアターの動向とネットワークの構築 児童・青少年演劇ジャーナル げき、27号、pp.16-17.

Brinch, R. (2019) *Osten and Swedish Theatre for Young Audiences*. (レベッカ、B. 中島裕昭訳 (2019) 児童・青少年演劇ジャーナル げき、21号、pp.44-49.

ヘックマン, J. J. (2015) 幼児教育の経済学 東洋経済新報社.

Helander, K. (2013) *Artistic Development on the Frontline*. News from Swedish Theatre Focus: Young Audiences. Teaterunionen-ITI and ASSITEJ Sweden.

小林由利子(2015) 乳幼児のための舞台芸術の国際共同制作－「スモール・サイズ(Small Size)」に着目して－ 児童・青少年演劇ジャーナル げき、15号、pp.18-20.

Nordenfalk, P. H. & Nordenfalk, K. (2005) *Children's Culture*. Swedish Culture, Swedish Institute, pp.1-12.

大宮勇雄・星美和子・小笠原文・小林由利子・榎田二三子・日浦直美(2015) 第15回国際交流委員会企画シンポジウム報告 舞台芸術は保育にどんな豊かさをもたらすか－「はじめてに出会い ヨーロッパフェスティバル」の挑戦－ 保育学研究、第53巻、第3号、pp.68-77.

下山あさき(2011) 劇団バラッカとボローニャのフェスティバルー乳幼児演劇芸術の探求の30年ー 児童・青少年演劇ジャーナルげき、9号、pp.64-68.

<https://mapping-project.eu/> 2024年2月25日閲覧

[La Baracca Testoni ragazzi](#) 2024年2月25日閲覧

ⁱ ヨーロッパでは、乳幼児のための演劇(theatre for early years)と呼ばれています。「ベイベーシアター」という名称は、日本における乳幼児のための演劇についての造語です。

第3章 考察及び提言

本調査研究は、児童館ガイドラインにおいて児童館に期待される機能の一つである「子育て家庭への支援」（児童館ガイドライン第3章 児童館の機能役割の4）における乳幼児支援に関して、全国の児童館において参照されたい取組の企画を通じて、今後の児童館活動の方向性検討に資することを目的として実施した。

その方法としては、①有識者等による調査研究委員会で児童館等の選定、評価、周知方策の検討、遊びのプログラムの企画、事業全体の助言・検討、②「遊びのプログラム」として厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財作品2作品を選定し、4児童館において2作品のうちいずれか1作品を実施、③それぞれの実施児童館で、公演実施後の感想、意見、効果把握のため、児童館、保護者に向けてアンケートを行うものとした。

これらのうち、①、②については、第1章、第2章にまとめている。ここでは、作品ごとのアンケート結果を報告するとともに、今回の調査研究において特筆すべき事項について考察する。なお、アンケートの設問及び、回答の選択肢、回答者の自由記述で使用された「子ども」表記はそのまま表示している。

I 保護者用アンケート、児童館用アンケートの結果の概要

ここでの集計結果の概要は、今回の2つのプログラムの設定観客数が少なく、サンプル数も少なくなるため、量的な確保の観点から、作品ごとに集計していることを始めにお断りする。

1. ぐるぐる（CAN青芸）

児童館：こども未来館あいぽーと（北海道）、川口市立戸塚児童センターあすばる（埼玉県）

① 保護者用アンケート

・参加したこどもの年齢（月齢）

「2歳～2歳6ヶ月未満」が最も多く、18人、次いで「2歳6ヶ月～3歳未満」が8人、「3歳以上」が6人だった。劇団の設定する対象年齢は2歳～3歳となっており、概ね設定どおりの年齢のこどもに参加してもらうことができた。

・児童館の利用頻度

32人（78.0%）の保護者が児童館を利用することがあり、利用頻度は「月4～5回」、「6回～10回」がそれぞれ9人（28.1%）、「11回～20回」が7人（21.9%）と、日ごろから頻繁に児童館を利用している方が多かった。

- ・今回の劇の上演を何で知ったか

「児童館の職員から聞いた」が 30 人 (73.2%) と最も多かった。

- ・今までにプロの劇団の舞台をみたことがあるか

「今回が初めて」が 36 人 (87.8%) と最も多かった。

- ・今回が初めての場合の理由

「このような劇の情報がなかったから」が 22 人 (61.1%) と最も多く、次いで「泣いたり、ぐずったりすると困るから」12 人 (33.3%)、「自分の子にはまだ早いと思ったから」6 人 (16.7%) と続いた。乳幼児に向けた演劇プログラムが少なく、情報に会う機会がないこと、「こどもが鑑賞中に迷惑をかけるのでは」と躊躇しているものと推察できる。

- ・劇の上演に参加したきっかけ

「子どもに体験させたいと思ったから」が 26 人 (63.4%) と最も多く、次いで「児童館で観られるから」16 人 (39.0%)、「誘われたから」10 人 (24.4%) と続いた。児童館で観られること、仲間も参加することが「子どもに体験させたい」という思いを後押ししたことが推察できる。

- ・上演を観覧した感想（保護者視点で）

「楽しかった」が 38 人 (92.7%) と最も多く、次いで「わくわくした」28 人、「どきどきした」が 8 人 (19.5%) と続いた。保護者自身も楽しんだことが推察できる。

また、自由記述では「子どもが楽しむには、親が楽しんでいる姿を見せることが、楽しさを覚えるきっかけになると思いました」「五感に訴えかける、楽しい演目でした」「周囲の子どもたちを含め、最初にこわばっていた顔が、最後笑顔の子が増えて面白かったです」「子どもの大スキなポイントが盛りだくさんで、楽器や声でいろんな音色があって感動しました」など、新たな発見をした喜びが多数書かれていた。

- ・子どもの反応で気づいたこと（自由記述）

「おはなしではないので見ていられるか心配でしたが、いつのまにか世界に入り込んでいて、とても楽しそうでした」「音につられて、興味深く目で追っていて、とても楽しそうでした。近くで見すぎておどろいてしまったようですが、その後も泣きながらも、目で追っていたのが印象的でした」「子どもの色々な表情が見れたので良かったです」「映像メディアを観る時とは、また違う真剣さでみつめていました」「色々な音、動きでマネしていたりしていたので、子どもなりに感じとっているんだと思い、少し

成長したと思えました。」など、こどもが作品に集中する姿、劇中で起こる様々なことに反応する姿をこどもから感じ取ったことが推察される。

- ・今回の体験は子どもの情操を豊かにするきっかけになると思うか

「とてもそう思う」「そう思う」が合わせて 36 人 (87.8%) だった。

- ・児童館でプロの劇団の公演を行うメリット

「子どもが喜ぶこと」「親も気軽に来ることができる場所であること」がそれぞれ 28 人 (68.3%)、「子どもが多少泣いても許されること」24 人 (58.5%) と多く、参加にあたっての親の心理的な負担が少ないこともメリットと感じていることが分かる。

- ・(児童館上演に限らず) 劇を観る機会があったらまた観たいと思うか。

「ぜひ観たい」「観たい」が合わせて 31 人 (80.5%) と多く、今回初めて観劇をした体験が次の期待へとつながったことが推察できる。

- ・その他気づいた点

「すてきな時間をありがとうございました。家でも一緒にやってみたいと思います」

「最初、緊張している様子でしたが、話が進むにつれて楽しんでいる姿が見られた。様々な表現手法がみられて楽しかったです。」「親子で楽しめました。ありがとうございました！！」など感謝の記述が多数見られた。一方で「いやがって泣く子を慣らせなくても良いと思う。せっかくの機会ではあるが無理することはない」との声もあった。

② 児童館用アンケート

- ・上演前、劇に何を期待したか

「子ども自身の楽しみとなること」「身近な場所で良質な劇にふれることができること」がそれぞれ 8 人 (100.0%) と最も多く、次いで「子どもの感情表現が豊かになること」7 人 (87.5%)、「保護者の楽しみとなること」6 人 (75.0%) と続いた。

自由記述としては「家庭の経済状況にかかわらず参加出来ること」「子どもにとってあこがれの存在、不思議な感情、保護者との愛着形成の意識につながること」があった。

- ・鑑賞した子どもと保護者にどのような変化が見られたか (子ども)

「表情が明るくなってきた」が 7 人 (87.5%)、「感情表現が豊かになってきた」5 人 (62.5%)、「鑑賞活動に満足し、次への期待を持った」2 人 (25.0%) となり、他の

選択肢は選択されなかった。

- ・鑑賞した子どもと保護者にどのような変化が見られたか（保護者）

「鑑賞活動に満足し、次への期待を持った」が6人（75.0%）と最も多く、次いで「表情が明るくなってきた」5人（62.5%）、「感情表現が豊かになってきた」「児童館職員に関わってくる場面が増えた」「舞台芸術に興味や関心を示すようになった」がそれぞれ2人（25.0%）だった。鑑賞後は、こどもも親も表情が明るくなり、さらに次への期待が高まっていると感じたようだ。

また、自由記述には「まだ小さすぎて、鑑賞会は早いかと思っていたが、今回参加してとても熱心に観ていたので、どんどんこういう体験をさせてあげたいと思った」「子どものひきつけ方が勉強になった。参考にしたい！！」との意見があった。

- ・児童館にどのような効果があったか

「身近な場所で良質な劇にふれることができた」「職員の意識向上（モチベーション）につながった」がそれぞれ6人（75.0%）であり、次いで「保護者の楽しみが増えた」「新たな児童館プログラムの開発に資する気づきを得ることができた」がそれぞれ5人（62.5%）だった。

自由記述としては「以前も、児童館であった演奏会に参加して、今回もとても楽しかったので、また児童館や子育て支援センターで行う行事に参加したいという方が多数いた」との意見があった。

- ・上演が効果的に実施されたのは、何が影響したからだと思うか

「児童福祉文化財推薦作品そのものの内容や質が高かったから」「児童館が身近で気軽に参加できる施設だから」がそれぞれ8人（100.0%）と最も多く、次いで「親と子で一緒に参加できるプログラムだったから」7人（87.5%）となった。

自由記述としては「我が子を機会があれば良質な芸術文化にふれさせたいと考えている保護者が地域にたくさんいるから」「上演前に、劇団の方から具体的な対応の説明があったから。（幼児の行動への対応や私たち職員の立ち位置など）」「2歳～3歳という月齢の発達により影響があったのではないか」との意見があった。

- ・今回のような劇団上演の機会があった場合、どのように対応するか

「また上演してみたい」が8人（100%）だった。

- ・今後、児童館では児童劇等の児童福祉文化財推薦作品を活用して、どのようなプログラムが実施できそうか。また、どのような工夫が必要だと思うか。

プログラムとしては「0才から18才まで成長発達段階、それぞれのプログラムを実施する」「幼児～小学生低学年を対象としたプログラム。(劇など)」「こどもたちに読んでほしい本」から選んだ本を、対象年齢(学年)者向けに、閉鎖された空間で読み聞かせをする。小学中・高学年向けの本を、効果音などを取り入れて、幼児から大人まで楽しめるようにする」「乳幼児の発達段階に合うプログラム」「小・中・高校生向けの劇や音楽などの鑑賞会。・ロールプレイ体験会」などの意見があった。

また、工夫としては「児童館が定期的を開催する。(0才から、芸術文化にふれる事が身近になり心豊かに育つ)」「①本の内容に沿う効果音を取り入れる。セリフがあったら児童にも参加してもらおう。集中するため閉ざされた空間で実施する。②告知の方法に、館外の施設(図書館や市役所や郵便局など)での掲示を加える」「・五感や感性を育むことの大切さを伝えること。・日頃の関わりを大切に信頼関係を築く、特に中高生との関わり」などの意見があった。

2. ハイハイ、ごろ～ん。(劇団風の子九州)

児童館：東郷町立兵庫児童館(愛知県)、光の園児童館(大分県)

① 保護者用アンケート

- ・参加した子どもの年齢(月齢)

「～0歳11ヶ月」が最も多く18人、次いで「1歳～1歳6ヶ月未満」が12人だった。劇団が設定する対象年齢は8ヶ月～18ヶ月となっており、設定どおりの年齢の子どもに参加してもらうことができた。

- ・児童館の利用頻度

26人(86.7%)の保護者が児童館を利用することがあり、利用頻度は「月4～5回」が10人(28.1%)、「11回～20回」が5人(19.2%)と、日ごろから頻繁に児童館を利用している方が多かった。

- ・今回の劇の上演を何で知ったか

「児童館の職員から聞いた」が15人(50.0%)と最も多く、次いで「児童館の広報」が9人と続いた。

- ・今までにプロの劇団の舞台をみたことがあるか

「今回が初めて」が30人(100.0%)と全員が初めての体験だった。

- ・今回が初めての理由

「このような劇の情報がなかったから」が 24 人 (80.0%) と最も多く、次いで「泣いたり、ぐずったりすると困るから」7 人 (23.3%)、「演劇は難しそうと思ったから」5 人 (16.7%) と続いた。乳幼児に向けた演劇プログラムが少なく、情報に会う機会がないこと、「こどもが泣いたら迷惑になる」「難しそう」といったことから躊躇している姿が見て取れる。

・劇の上演に参加したきっかけ

「子どもに体験させたいと思ったから」が 25 人 (83.3%) と最も多く、次いで「児童館で観られるから」6 人 (20.0%)、「自身が演目に興味があった」3 人 (10.0%) と続いた。こちらの上演でも、児童館で観られることが「こどもに体験させたい」という思いを後押ししたことが推察できる。

・上演を観覧した感想（保護者視点で）

「楽しかった」が 28 人 (93.3%) と最も多く、次いで「ゆったりとした気分になった」20 人 (66.7%)、「わくわくした」が 15 人 (50.0%) と続いた。保護者自身も楽しんだことが推察できる。

また、自由記述では「舞台装置の多彩さ、子どもの目線の演技、とても素晴らしかったです」「子どものキラキラした表情に感動しました」「独特な世界観で私自身も興味深かった。音も視覚も刺激が多かった」「0歳でも音や楽器や物に興味を持ち、集中して見ていて五感の刺激になってよかった！！」など、親子で楽しんだ記述が見られた。

・子どもの反応で気づいたこと（自由記述）

「(前略) 子どもたちが一番聞く名前を使って音遊びをしてくれて、子どもたちもその音に振り向き、ハッ！とした明るい表情になっていた。子どもたちの「あーっ！」という声も演劇の一部として取り入れてくれた感じが嬉しかった！」「楽器が好きなことに気がきました。楽しそうで目がキラキラしていました。別の場面でも音楽にふれられる機会を増やしてあげたいと思いました」「音にとっても敏感に反応していた。刺激が多かったのか「アー」「ウー」というように声を発することが多かった。ずっとご機嫌でぐずることが無かった」「じっと真剣に見ていて、赤ちゃんの好きなものを知ることができた。手を叩く、声を出すというのを場面に合わせてして、脳にとっても良さそうと思った。成長を感じた」「上演に興味があったようだが、それ以上にまわりの人に興味を持って近付いている印象だった」「他の事に興味がそれでも、音がすると集中して見たり、近付いてみたいけど、不安で泣いてしまったり… (笑)。動いている布

に大喜びしたり、とても色々な感情が見れました。」など、乳児が作品に集中する姿への意外、劇中で起こる様々なことに反応する姿に、新たな発見や成長を感じ取ったことが見て取れる。

- ・今回の体験は子どもの情操を豊かにするきっかけになると思うか

「とてもそう思う」「そう思う」が合わせて 30 人（100.0%）だった。

- ・児童館でプロの劇団の公演を行うメリット

「子どもが喜ぶこと」「子どもが多少泣いても許されること」がそれぞれ 25 人（83.3%）「親も気軽に來ることが出来る場所であること」、23 人（76.7%）と多く、こちらの上演でも、参加にあたっての親の心理的な負担が少ないことをメリットと感じていることが分かる。

- ・（児童館上演に限らず）劇を観る機会があったらまた観たいと思うか。

「ぜひ観たい」「観たい」が合わせて 29 人（96.6%）と多く、今回初めて観劇をした体験が次の期待へと変わったことが推察できる。

- ・その他気づいた点

「いつも家において、初めてこのような会に参加させて頂きました。子どもがこんなに真剣に、そしてとても楽しそうに参加するとは思ってなくて、これからどんどんこのような劇に参加させてあげたいと思いました。そして、このような活動をして下さることにとっても感謝です。ありがとうございました」「絵本の読み聞かせは、途中で興味をなくしていたが、今日は、最後まで興味津々で、集中力が続いて驚きました。喜んだり、おどろいたり、泣いちゃったり、色々な気持ちを感じれたようです。本日はありがとうございました。」「劇と言うと、少し敷居が高かったのですが、今日参加してみて、すごく素晴らしい体験になったと思うので、また機会があれば積極的に参加してみたいと思いました。」「五感を刺激するすごく素敵な上演の時間でした。演者さんの表情もよく、反応が返ってくるのもこの劇ならではの、とても子どもは嬉しいのだと思っていました。子どもの素敵な表情に私たち親まで笑顔になる事ができました。本当にありがとうございました！」「参加させて頂きありがとうございました。色々な方に声をかけて頂き楽しい時間を過ごせてリフレッシュになりました。是非またやってほしいです」など感謝の言葉とともに、こども、そして親自身も嬉しくなる体験だったことが読み取れる。

② 児童館用アンケート

- ・上演前、劇に何を期待したか

「保護者の楽しみとなること」「身近な場所で良質な劇にふれることができること」がそれぞれ 6 人 (100.0%) と最も多く、次いで「子ども自身の楽しみとなること」「子どもの感情表現が豊かになること」「子どもの心の安定に効果があること」「既存の児童館プログラムによい影響を及ぼすこと」 4 人 (66.7%) と続き多くの期待を抱いていたことが見て取れる。

- ・鑑賞した子どもと保護者にどのような変化が見られたか (子ども)

「表情が明るくなってきた」が 6 人 (100.0%)、「感情表現が豊かになってきた」 5 人 (83.3%)、「鑑賞活動に満足し、次への期待を持った」 3 人 (50.0%) となった。

- ・鑑賞した子どもと保護者にどのような変化が見られたか (保護者)

「鑑賞活動に満足し、次への期待を持った」「表情が明るくなってきた」が 6 人 (100.0%) と最も多く、次いで「来館者同士のコミュニケーションが増えた」が 5 人 (83.3%)、だった。鑑賞後は、こどもも親も表情が明るくなり、さらに次への期待が高まっていると感じたようだ。来館者同士のコミュニケーションが増えたことも着目したい。

- ・児童館にどのような効果があったか

「保護者の楽しみが増えた」「身近な場所で良質な劇にふれることができた」「職員の意識向上 (モチベーション) につながった」がそれぞれ 6 人 (100.0%) だった。さらに、「既存の児童館プログラムに良い影響を及ぼした」「職員の技術向上 (スキルアップ) につながった」がそれぞれ 4 人 (66.7%) だった。

- ・上演が効果的に実施されたのは、何が影響したからだと思うか

「児童福祉文化財推薦作品そのものの内容や質が高かったから」「親と子と一緒に参加できるプログラムだったから」がそれぞれ 6 人 (100.0%) と最も多く、次いで「児童館が身近で気軽に参加できる施設だから」 5 人 (83.3%) となった。

自由記述としては、「児童館で日頃会っている親子さんたちでお互いに顔見知りの人が多かったため、お母さんも子どもたちも安心して参加することが出来たから」「広報の際、作品の youtube などを事前に見せていただき、とても良さそうな作品だと職員が実感したので、保護者にオススメしやすかった」との意見があった。

- ・今回のような劇団上演の機会があった場合、どのように対応するか

「また上演してみたい」が6人（100%）だった。

- ・今後、児童館では児童劇等の児童福祉文化財推薦作品を活用して、どのようなプログラムが実施できそうか。また、どのような工夫が必要だと思うか。

プログラムとしては「乳幼児親子や幼児・小学校低学年（劇場に劇を観に行くのが難しい年代の子たち）の子たちを対象とした、劇団の劇や人形劇など生の語り、生身の人が演じるプログラムを実施したい」「人形劇 幼児から小学生向け」「子どもを健やかに育てる本」の中で絵本をテーマにした観て、聞いて、楽しめる 幼児向けの劇 も今後、観てみたいと思った」「劇中で使用したようなおもちゃ（楽器）を作って、遊ぶプログラム。・言葉に頼らず身振りや音などで遊ぶプログラム」「育児不安を抱えている方にとっての落ち着いた雰囲気での安らぎの時間を提供するようなプログラムを 実施できると良いなと思いました」「小さな子どものための演劇、映像の実施上映をしてその後、保護者たちが、感想を言ったりできるおしゃべりタイムをプラスする」などの意見があった。

また、工夫としては「日頃から人と人との関わり、コミュニケーションを大切にすること。・日頃から絵本の読み聞かせや人形劇などの機会を多く持つこと。金銭的な補助が必要かと思います」「金銭的補助がないと自力では難しい。幼稚園、小学校を通じてチラシを配り、多くの来館者を募る」「児童福祉文化財推薦作品に何があるか、よく知らなかったのが、今回調べるきっかけとなった。皆が広く知る機会がもっとあると良いと思った」「落ち着いた雰囲気を作るために、デジタル機器の使用について説明をしたり、施設全体に音楽をかけるなどの工夫が必要だと思いました」「児童館でリラックスして文化作品にふれる事ができる環境を作ること。また、そのために職員もスキルUPする必要があるため学ぶこと。小さな子どもたちに与えたいことや刺激、体験がおよぼす効果等」などの意見があった。

II 児童福祉文化財（主に児童劇）を活用した乳幼児親子を対象とした遊びのプログラム実施結果の考察

1. 乳幼児親子を対象とした遊びのプログラム（主に児童劇）の可能性

本調査研究で実施したプログラム2作品は、年齢（月齢）が低いこどもとその保護者が観客となることが設定されている。

保護者アンケートや観察報告からは、こどもたちが劇の世界に入り込み、作品に参加し、様々な反応を見せていることがわかる。そして、保護者もそのような我が子の様々な反応を好ましく見守り、成長を感じたり、こどもの新たな側面を発見したりする機会になっている。そして保護者自身も楽しむ様子が見える。

① 乳幼児の発達に寄与する可能性

保護者アンケートの「色々な音、動きでマネしていたりしていたので、子どもなりに感じとっているんだと思い、少し成長したと思えました。」や「じっと真剣に見ていて、赤ちゃんの好きなものを知ることができた。手を叩く、声を出すというのを場面に合わせていて、脳にとっても良さそうと思った。成長を感じた」などの感想に見られるように、こどもたちが自然に手を叩く、声を出す、動きを真似るなど、保護者が成長を感じるほどの反応を見せている。また、観察報告の「ボール登場。赤ちゃんたちが集中する。ゴロゴロトトトン 音に興味いっぱいのR君。音響の机に登ろうとする。地球ボール登場。T君指差し。」や「(役者が) 転がってジタバタ。号泣。やがて寝てしまう。すると観客席からこどもがフラっと一人起こしに行くが、直ぐにお母さんの元へ。」などの記述にあるように、劇中で起こっている物事に興味や関心を示し自発的に参加する姿がある。こうした行動は、乳幼児の発達に寄与する可能性を推察できる。

② 親子の信頼関係を確認することに寄与する可能性

保護者アンケートでは「子どもの色々な表情が見れたので良かった」「他の事に興味がそれても、音がすると集中して見たり、近付いてみたいけど、不安で泣いてしまったり…(笑)。動いている布に大喜びしたり、とても色々な感情が見れました。」「楽器が好きなことに気付きました。楽しそうで目がキラキラしていました。別の場面でも音楽にふれられる機会を増やしてあげたいと思いました」「(前略) 家でも一緒にやってみたくていま

す」等、こどもの表情や動きを見守り、あらためてこどもに対する気づきを得て、今後のこどもとの関わりを確認しているコメントがあった。

また、観察報告では「やがてシンガーはだんだんスピードを上げて走り出す。レッドはそれに必死について行く。子どもたちが笑う。お母さんと顔を見合わせて笑う。」「音に興味いっぱいの R 君 音響の机に登ろうとする。…（中略）…R 君、色々な子と関わりながら外側に向かう。…（中略）…R 君の長い旅終わる。お母さんの胸に飛び込む」など、こどもが保護者への信頼感を見せていると思われる場面が切り取られている。こうした事象から、親子の信頼関係を確認することに寄与する可能性を推察できる。

③ 親子同士が交流する場として寄与する可能性

保護者アンケートでは、両プログラムとも保護者自身も「楽しかった」の回答が 90%を超え、こどもの様子は自由記述に見られる通り、劇を真剣に見入り様々な反応を見せている。親子とも楽しみ、親子間のコミュニケーションのきっかけとなり得たと推察される。

また、観察報告では「ボールやプラスチックケースにビーズを入れたものが客席にもたくさん転がってくる。隣の子と遊ぶお母さん。お母さんたちの笑顔。小さな声でのお母さんたちのおしゃべり。」や『「すみませんうるさくして」と A 母が言うと、「全然」「全然」と口々に。「さっき寝た」「少し寝た」「さっき、(泣くの) 連動していたね」と言って笑いあう。おしゃべり』などの場面が切り取られている。保護者同士の交流の促進のきっかけともなり得たと推察される。

2. 児童館で乳幼児親子を対象とした遊びのプログラム（主に児童劇）を実施する意義

① 乳幼児親子が児童福祉文化財に接する機会を推進する可能性

保護者アンケートによると、観劇の体験は「ぐるぐる」では「今回が初めて」が 36 人（87.8%）、「ハイハイ、ごろ～ん。」では 30 人（100.0%）となっていた。その理由としては、「このような劇の情報がなかったから」が最も高い割合を示している。また、児童館で劇を実施するメリットを問うた設問では「子どもが喜ぶこと」が最も高い割合を示していた。そして、「劇を観る機会があったらぜひ観たい」という声が多かった。乳幼児親子にとって身近な児童館が児童福祉文化財を活用したり、情報発信に取り組んだりすることにより、乳幼児親子に良質な児童福祉文化財に触れる機会と楽しみを提供し、その魅力を伝えることとなる可能性が推察できる。

② 参加する際の保護者の心理的負担を下げる可能性

保護者アンケートによると観劇体験が初めての理由として「泣いたり、ぐずったりすると困るから」の回答も多数選択されていた。また、児童館で劇を実施するメリットを問うた設問では、「親も気軽に来ることができる場所であること」「子どもが多少泣いても許されること」が上位に挙げられていた。実際に観察報告では、「I 君 R 君を引っ張る。I 君母心配になり、I くんを止めに行こうとする。隣のお母さんに「大丈夫」と止められる。わかっているのだ。」や「真ん中のステージになるだろう空間を、一人のこどもが走り回っている。つられてもう一人。目が回ってゴテン。お母さんたちの優しい笑い声。突然お母さんの膝に座っていたこどもが叫ぶ。それでもニコニコ見守っているお母さんたち。」などのエピソードが示されている。児童館の日頃の活動を通して互いを見知っている関係性や、こどもの行動に対して許容がある空間は、保護者が安心して参加できることに繋がっているものと思われる。このように、通い慣れた児童館で、見知った児童館職員や見知った親子と一緒に鑑賞できることは、参加の際に生じる保護者の心理的な負担を下げることに役立っていると推察される。

③ 児童館が鑑賞環境として適している可能性

劇団インタビューでは、児童館での上演について2劇団が共通して「親も子も慣れ親しんでいる空間で、スタッフや友人など知っている人が多く安心できる場所である。」(風の子九州)、「児童館での日常的な繋がりがあり、そこにいるスタッフの顔を知っていることが親のリラックスに繋がり、こども達のリラックスに繋がっていたと感じた。」(CAN 青芸)のように、日常から慣れ親しんだ人たちが同じ空間にいることが安心感へと繋がり、上演と鑑賞する環境に好影響をもたらしていることを述べている。また、「私たちはいつも開場前にスタンバイして、開場とともに観客を受け入れ、音や顔・衣装・匂いに慣れてもらい、親が焦らないような受け入れ体制を取りたいと考えている。」(CAN 青芸)や「15カ月未満という月齢のこども達は場に慣れる時間が必要だったり、その長さもそれぞれ異なったりする。公演の際はギリギリではなく早めに来て会場でゆっくり待ってもらえるように時間設定をしている。」(風の子九州)という言葉からも、日頃から慣れ親しんでいる空間で劇が行われることは、こどもにとってリラックスした状態で体験をすることができるようになる。こうしたことから、児童館が鑑賞環境として適している可能性が推察される。

④ 児童館によい影響を及ぼす可能性

児童館用アンケート結果では、「ぐるぐる」実施館では「身近な場所で良質な劇にふれ

ることができた」「職員の意識向上（モチベーション）につながった」がそれぞれ6人（75.0%）であり、次いで「保護者の楽しみが増えた」「新たな児童館プログラムの開発に資する気づきを得ることができた」がそれぞれ5人（62.5%）だった。

「ハイハイ、ごろへん。」実施館でも「保護者の楽しみが増えた」「身近な場所で良質な劇にふれることができた」「職員の意識向上（モチベーション）につながった」がそれぞれ6人（100.0%）だった。さらに、「既存の児童館プログラムに良い影響を及ぼした」「職員の技術向上（スキルアップ）につながった」がそれぞれ4人（66.7%）とほぼ同様の傾向を示した。このように保護者に対して児童館で良質なプログラムを届けることができたことや、劇団員の技術力・こどもたちや作品に向かう姿勢が職員の意識向上につながったことを挙げている。また、今回の鑑賞を通して初めて児童館に来館した親子もあった。こうしたことから、上演が児童館によい影響を及ぼしていることが推察できる。

3. 今後の研究に向けて（提言）

本事業を行った「結果」と「考察」の通り、児童館における乳幼児親子を対象としたプログラムとして児童福祉文化財（主に児童劇）の上演を行うことにより、乳幼児親子に多くの良い影響をもたらすとともに、児童館における乳幼児支援の質の向上と活性化に資することが明らかになった。以上を踏まえ、今後に向けて以下のことを提言する。

本事業の実施により、乳幼児親子を対象とした遊びのプログラム（主に児童劇）は、年齢（月齢）の低いこどもであっても興味を持って自主的に参加し、保護者も驚くほどの様々な反応を示すことが確認された。こうした感情の動きやそれに伴う行動は、こどもの情操を豊かにすることにつながるとともに、こどもの意思表示でもあることから、今後もこのような機会が保障されることが期待される。

また、プログラムを通して、保護者が我が子をあらためて愛おしく思い見守る姿、こどもは保護者との信頼関係を確認する機会となっている姿も確認され、さらに、我が子ばかりでなく、近くに来た他者のこどもと遊ぶ保護者の姿や、こどもが泣いてしまってもそれを温かく包み込む関係性が見られるなど、親子同士の交流をより深めることも確認された。

そして、児童館には親子同士や親子と劇団を繋いだり、上演・鑑賞に適した環境づくりをサポートしたりすることができる児童館職員の存在がある。実際にプログラム実施場面にお

いても、上演作品の対象年齢（月齢）より高いこどもに対して、児童館職員と一緒に過ごして劇が終わるのを待ったり、こどもが泣き止まない親子にそっと「後ろに下がってみる？」と、提案を声掛けしたりなどの実践が行われた。こうした児童館ならではの配慮も、児童館が良質な児童福祉文化財を活用、普及することに適した環境であり、保護者が気軽に参加し、触れることができる環境を持ち合わせているといえるだろう。

これらは、児童館ガイドラインに示されている乳幼児支援の具現に繋がるものであり、今後も乳幼児を対象とした遊びのプログラム（主に児童劇）の鑑賞体験を児童館に普及することは必要性が高いと思われる。

なお、児童館で実施することにより、無料または低廉な価格で、あらゆる子育て家庭が等しく児童福祉文化財に触れる機会を保障できる可能性があるため、国や地方自治体においては上演が可能となるような方策の検討が期待される。

この事業は、児童の権利に関する条約第 31 条に規定されている「児童が文化的及び芸術的な生活に十分に参加する権利を尊重しかつ促進するものとし、文化的及び芸術的な活動並びにレクリエーション及び余暇の活動のための適当かつ平等な機会の提供を奨励する。」ことに大きく貢献するものである。

これらの本年度の調査研究の知見を活かして次年度も引き続き調査研究を行うことによって、児童福祉文化財を活用した新しい児童館プログラムがさらに開発されることを期待したい。

謝辞

本報告書の作成に当たり、児童福祉文化財（舞台芸術）の公演に携わっていただきました児童館や劇団の皆様、及びアンケートにご回答くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

令和5年度 こども家庭庁委託事業

児童館における乳幼児親子を対象とした遊びのプログラムに関する調査研究

令和6年（2024年）3月

受託者 一般財団法人 児童健全育成推進財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷2-12-15 日本薬学会ビル7階

